

# 温泉地域研究

第3号

2004年 9月

## 論文

- 兵庫県湯村温泉の地域形成と活性化 ..... 山村順次 (1)  
 宮城県東鳴子温泉における湯治場の地域変容と活性化  
 ..... 小堀貴亮・山村順次 (11)

## 研究ノート

- 都市型温泉施設の現状と温泉観光地の課題  
 ..... 前田 勇・姜 淑瑛 (19)  
 温泉の現地観察会の実施とその意義 ..... 古田靖志 (25)

## 基調講演

- 温泉地域づくりのあり方ー花咲くよりも根を肥やせー ..... 中谷健太郎 (31)

## シンポジウム

- 温泉地の地域づくりー由布院温泉からの発信 ..... (37)

## 書評

- 日本温泉科学会・西村 進編：『温泉科学の最前線』 ..... 長島秀行 (52)  
 山村順次著：『世界の温泉地 発達と現状(新版)』 ..... 浦 達雄 (53)

## 温泉地情報

- 下呂発温泉博物館 ..... 古田靖志 (54)

## 学会記事 ..... (55)

- 日本温泉地域資産の選定について ..... (59)

日本温泉地域学会

# 兵庫県湯村温泉の地域形成と活性化

## Regional Development and Activation in Yumura Spa, Hyogo Prefecture

山村 順次\*  
Junji YAMAMURA

キーワード：温泉地域 (spa region)・活性化 (activation)・温泉地ガイド (spa guide)  
湯村温泉 (Yumura spa)・兵庫県 (Hyogo Prefecture)

### 1 はじめに

兵庫県北西部、但馬地方の美方郡温泉町湯に位置する湯村温泉は、山陰の有力な温泉地のひとつである。環境省の温泉利用状況報告<sup>1)</sup>によれば、2001(平成13)年現在、同じ但馬地方の伝統的温泉地である城崎温泉の年間宿泊客数が73万人であるのに対し、湯村温泉では22万人であり、格差が大きいことが指摘される。もともと、城崎温泉が旅館数95軒、収容人員6,900人(稼働率29%)であるのに対して、湯村温泉はそれぞれ18軒、2,200人(27%)であることを見ると、健闘しているとも言える。一方、温泉資源については、湯村温泉は毎分1,760リットルの高温泉を湧出していて、城崎温泉の毎分1,240リットルを上回っている。こうして、湯村温泉は有力な温泉資源を基にしつつ、今後とも地域活性化を図ることが必要となろう。

筆者は湯村温泉において、1994(平成6)年6月に温泉町・日本温泉協会主催「温泉を活かしたまちづくりサミット」でのパネルディスカッション「魅力ある観光地づくり」にパネリストとして参加し、2004(平成16)年2月には国土交通省主催「地域づくり活動出合いの広場フォーラム」で基調講演を行った<sup>2)</sup>。その際、いずれにおいても、環境保全・景観保全を前提としつつ、地域性を活かした個性的な温泉地域づくりが重要であり、その具体的な担い手として、官民一体と

なった温泉地域構成員による共生の必要性を強調した。

本稿では、湯村温泉の地域的特性を明らかにするとともに、観光の現状を分析し、さらに今後の持続可能な温泉地域づくりに対して、具体的な活性化方策を提示することにした。

### 2 湯村温泉の地域形成と観光実態

#### (1) 温泉地域の形成過程

湯村温泉については、平城京発掘調査で出土した738(天平10)年頃の木簡に「但馬国二方郡温泉」と記され、848(承和15)年には、天台僧の慈覚大師が荒湯の温泉開発を指導して泉源を保護したと伝えられており、歴史の古さがわかる<sup>3)</sup>。

近世期を通じて、1617(元和3)年に浜坂芦屋城主へ湯役銀43匁を納めており、1788(天明8)年には湯坪が4つ、宿が5～6軒あり、入浴客は年間300人ほどであったこと、さらに地震でたびたび温泉が止まる事態になったことなどが記録されている<sup>4)</sup>。

1886(明治19)年の『日本鉱泉誌中巻』<sup>5)</sup>には、泉源は元湯といい、高温の温泉が溜まっており、その近くに6つの浴槽が設置されていたこと、住民が川沿いの温泉を日用に使用していたこと、旅館は11戸あるが温泉地への交通は不便であること、そして明治初期の浴客数は年間約1,000人であったことなど

\* 千葉大学教育学部 (Chiba University)

が記されていた。

1901（明治34）年、「温泉場ノ利益ヲ増進シ、温泉村ノ天職ヲ全フル上ニ於テ缺漏少ナカラズ候ニ付、町村制第百壹拾四条ニ依リ湯村区会ヲ設ケ、直接関係者ヲシテ参与セシメ候様致度・・・」<sup>6)</sup>として温泉村区会議事細則を制定、区長・議員を中心とした自治組織のもとに、温泉の管理運営が行われることになった。2年後に共同浴場が改築され、1917（大正6）年には浴場新館が1万6,000円の工事費で落成した。この時、温泉村大字湯村が大字湯に改称されて、今日にいたって

いる。兵庫県衛生課調査によると、同年の湯村温泉の浴客数は26万人、有馬温泉24万人、城崎温泉5万人であり、1923年では湯村の浴客数29万人のうち、地域住民である区民が23万人、区外の客が6万人を数え、区民の利用が80%に達していた<sup>7)</sup>。そして、1926年にはいち早く旅館の内湯化が実現したのである。ここに、温泉地は着実に発展を遂げ、1927（昭和2）年には町制を施行した。

第2次世界大戦後における湯村温泉と町内周辺地域の観光開発および関連事項を年表にまとめると、表1のようである。

表1 第2次世界大戦後の湯村温泉観光発達史年表（1945～2003年）

年次	事項	温泉場	周辺地域	交通	その他
1955（昭和30）		61 温泉会館改築 71 湯村火祭り再開 // 湯区内温泉配湯	59 但馬山岳自然公園 69 氷ノ山後山那岐山 国定公園指定	58 急行「但馬」 67 国道9号開通 74 大阪特急バス	54 町村合併
1975（昭和50）		79 温泉祭り菖蒲綱 復活 80 夢千代日記ロケ 開始 86 リフレッシュパ ークゆむら多目的 温泉利用施設開業	83 健康公園 84 パノラマ広場 86 // 人工スキー場 88 // パターゴルフ	88 神戸特急バス	75 宿泊客20万 83 人口8,432 87 宿泊客35万
1989（平成元）		93 荒湯・春來川整備  99 足湯設置 01 ライトアップ事 業開始 町並み景観整備	89 // 体育館 92 但馬牧場公園開設 93 // 博物館・花園 94 // 観光放牧地ふれ あい広場 95 生涯学習のむら 96 おもしろ昆虫化石 館 99 そば処てっぺん 02 上山高原エコミ ュージウム事業	92 湯村バイパス 93 湯村温泉ヘリ ポート	93 人口7,889  00 保健福祉セン ター 02 宿泊客25万 03 人口7,088

（注）温泉町の資料により作成。

温泉町は新市町村合併促進法に基づいて、1954（昭和29）年に周辺の照来村と八田村を合併し、ここに新生温泉町が発足した。そして、1960年代以降の高度経済成長に合わせて、湯村温泉も発展を遂げるようになった。共同浴場の「薬師湯」がある温泉会館の改築、火祭りや温泉祭りでの「菖蒲綱」が復活され、1969（昭和44）年には氷ノ山後山那岐山国定公園の一部に指定されて知名度が上がり、鉄道やバスなどの交通の便が良くなった。

高度経済成長が終わった1980年代になると、それまでの経済優先の開発から、落ち着いた温泉地環境の整備など、環境保全への配慮がなされるようになった。湯村温泉が全国的に脚光を浴びることになったのは、NHKが湯村温泉を舞台にした『夢千代日記』<sup>8)</sup>を放映したからであり、以後荒湯を中心とした湯村温泉の再開発が始まった。

春來川の河川改修事業は1990年代まで待たねばならなかったが、この間、1986（昭和61）年には日帰り温泉施設である「リフレッシュパークゆむら」の多目的温泉利用施設が開業し、新たな客層を吸収することになった。この事業は約7億3,000万円をかけて観光利用と町民の健康増進を目的に実施されたが、同時に露天風呂・但馬ビーフレストラン・森林公園の整備には森林総合利用促進施設の補助金（7,000万円）が使われ、総額2億2,000万円が投資された<sup>9)</sup>。その後、1998（平成10）年には、7,000万円で行窟露天風呂が新設された。各施設ともに第3セクターの（株）温泉町夢公社が運営している。

温泉場では、1993年から湯村温泉のシンボルである荒湯源泉と春來川の環境整備が実施された。河川沿いに遊歩道が設けられ、護岸壁には芸能人などの銅版手形レリーフが備え付けられており、川にはコイも放流された。特に、湯煙がもうもうと立ちのぼる荒湯は、古くからの地蔵堂のほか、温泉開発の恩人である慈覚大師像も祀られるようになり、ここで飲泉をしたり、自ら茹でたゆで卵を味

わうこともできる。さらに、1999年には河岸に足湯が設置されて、人気を博している。

新世紀に入った2001（平成13）年からはライトアップ事業（3.5億円）が始まり、清正公園の頂上のネオンが、毎晩時間を限って大きな「夢」の文字を浮かび上がらせることになった<sup>10)</sup>。それに関連して、町並み景観整備事業（1億円）も行われるようになり、現在電柱の地中化などが進捗している。

一方、周辺地域でも観光開発が活発化した。1983年には温泉街から1.5 kmほど南の高原に、まず多目的広場の機能をもつ「健康公園」が開設されたが、この公園は以後1990年までにセンターハウス・テニスコート・人工スキー場・パターゴルフ場・体育館などが整備され、国・県の補助金3分の1を得て、総事業費は約23億3,000万円に達した<sup>11)</sup>。さらに、95年には過疎地域滞在施設モデル事業として4億5,000万円が投じられ、生涯学習のむら（温泉つきカナディアンログハウス）がオープンした。これらも第3セクターの（株）温泉町夢公社が施設の管理運営をしている。また、1996年開業のユニークな「おもしろ昆虫化石館」や2001年の「上山高原エコミュージアム」事業など、教養観光に資する観光施設がオープンし、多様な観光活動を可能にしている。

以上のように、湯村温泉周辺では温泉施設・スポーツ施設・文化施設が充実してきたが、これに加えて一帯が但馬牛の産地であることから、「兵庫県立但馬牧場公園」が建設されたことは特記されよう。ここでは、実際に肥育牛を放牧しており、生産振興と動物・自然との触れ合いを目指し、放牧地・ラベンダー園・展望台・動物触れ合い広場のほか、スキー場・リフトや但馬牛博物館・宿泊施設なども整備されている。放牧地は冬にはスキー場となり、自然林地は遊歩道として利用される。ここに、総事業費35億4,000万円のうち、県費33億円を投じた一大グリーン・リゾートが1994年に形成されたのである<sup>12)</sup>。2億

4,000万円を出資した町当局が、これらの施設管理を受託している。

このように、湯村温泉では温泉場中心部の景観保全を踏まえた再開発が進みつつあるとともに、周辺地域ではすでに各種の充実した観光施設が整備済みで、多くの日帰り観光客を集めているのである(図1)。湯村温泉は観光地としての広がりを持ちつつ機能的にも分化して、温泉場と周辺地域とが緊密に結びついており、すでに互いの役割を果たせる状況になっている。

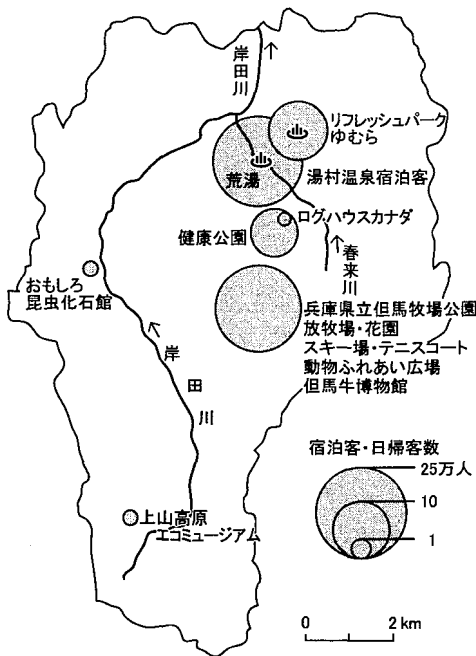


図1 温泉町における観光資源・観光施設の分布(2003年)

(注) 温泉町の資料により作成。湯村温泉のみ宿泊客数を示す。

## (2) 湯村温泉の観光実態

### ① 温泉資源

湯村温泉の温泉資源を見ると、まず荒湯源泉地区では98℃の高温の温泉が豊富に湧出しており、多くの源泉のうち2源泉の管理運営は「湯」財産区の地元住民に任せられ、守られてきた。そのひとつは荒湯の共同源泉と

して地域住民に利用され、別の源泉は「薬師湯」に利用されている。湯村温泉の旅館も荒湯に源泉を有しており、湯湯された温泉を高台まで引湯している場合が多い。また、一帯は源泉地帯のために、わずかに数mを掘削すれば高温の温泉が湧出するので、湯地区の多数の地域住民が源泉を有しており、利用してきた(図2)<sup>13)</sup>。とはいえ、個人所有泉の場合は、源泉が地下2~7mと浅いので管理が難しく、使用していない源泉も多いので、湯村温泉における利用構成比は、わずかに2%に過ぎなかった。

荒湯の源泉はナトリウム-炭酸水素塩・硫酸塩泉であり、98℃の高温泉が毎分480リットル湧出している。たえず湯煙を上げる荒湯は、湯村温泉のシンボルであり、湯量は1日690トンに相当し、湯村温泉の旅館と財産区管理の薬師湯・配湯に使用されている。このうち、旅館利用分は1993年の調査では56%、財産区分は43%である。春木川の河岸に長い足湯が作られたのも、そのおかげである。温泉町では、旅館や温泉施設などの源泉を入れて毎分1,760リットルの温泉が湧出しており、温泉資源には恵まれていると言えるが、荒湯源泉の保全とこれ以上の湯湯は問題であることが、指摘されている<sup>14)</sup>。

### ② 宿泊施設と観光施設

湯村温泉における宿泊施設と主な観光施設の分布を示したのが、図3である。温泉集落は旅館が建ち並んで温泉街を形成していると言うよりは、点在しているところに特色がある。荒湯源泉は春木川の谷底部にあり、その周辺は土地が狭いので小規模な旅館や土産品店・飲食店・一般商店などが分布し、有力な2旅館は隣接した高台の平坦地にある。

2004年現在、湯村温泉の旅館数は14軒、その収容人員は2,024人、保養所数は3軒、収容人員は243人であり、宿泊施設17軒の収容人員総数は2,267人である。1980年代前半の宿泊施設は27軒であったが、収容人員は2,300人台で今日と大差ない。老舗の有

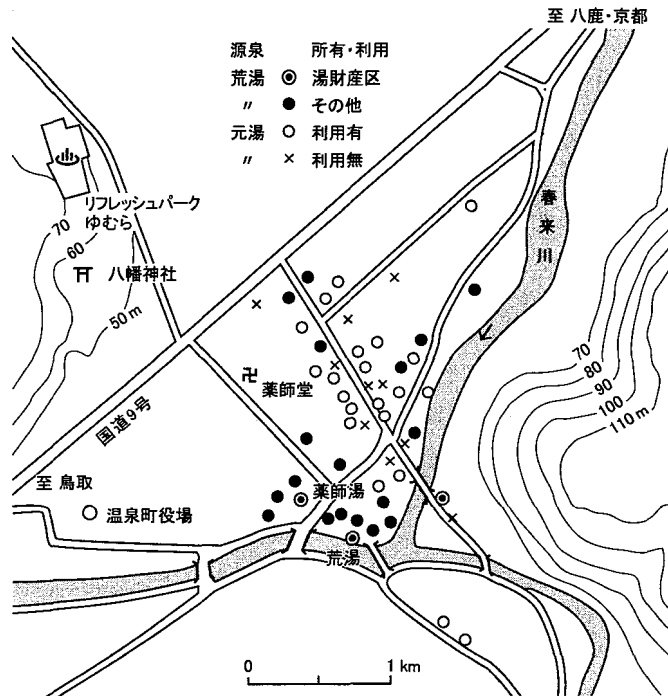


図2 湯村温泉の源泉分布と利用状況（1993年）

（注）温泉町の資料により作成。

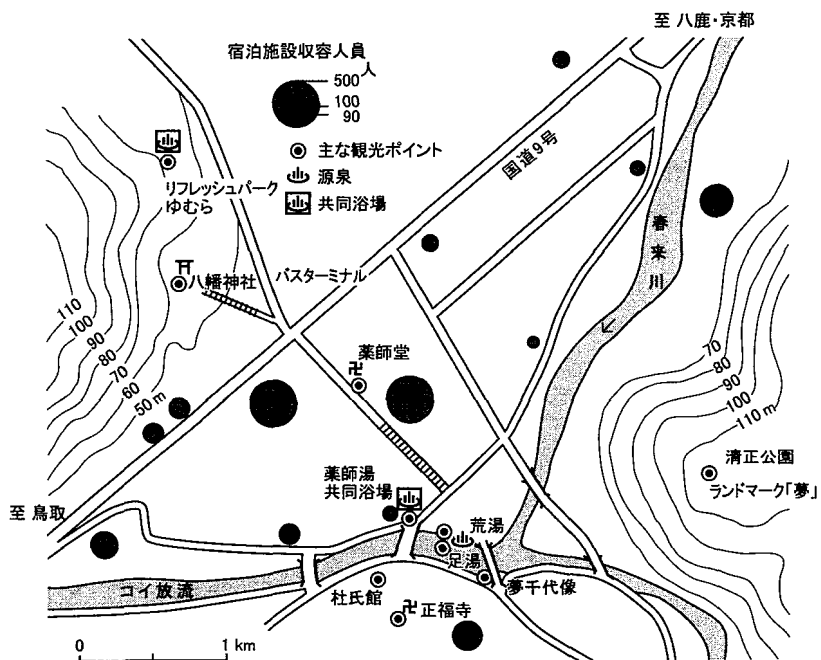


図3 湯村温泉中心部の宿泊施設と観光ポイント（2004年）

（注）温泉町観光協会などの資料により作成。

力旅館とそれに次ぐ大規模旅館の収容人員は、それぞれ500人、430人であり、両者で全収容人員の41%を占める。ここに、湯村温泉の宿泊施設は、2軒の有力旅館と15軒の中小旅館で構成される二重構造を呈しており、それは湯村温泉の宿泊観光経営戦略の相違ともなっている。事実、1泊2食付標準宿泊料金は最低の1万円から2万円までと差があり、団体受け入れ可能旅館と個人客専門旅館とに分化している。

湯村温泉集落内の観光ポイントは充実している。湯煙をあげる荒湯源泉一帯は湯村温泉第一の観光ポイントであり、隣接して夢千代像のある夢千代広場・足湯・手形レリーフ・杜氏館・薬師湯共同浴場などが集中している。北西へ1～2kmほど離れたところに薬師堂と八幡神社の歴史的観光ポイントがあり、その横に「リフレッシュゆむら」温泉浴場がある。荒湯の東の丘の上には、ランドマーク「夢」がライトアップされる清正公園がある。このように、歴史の古い観光施設と近代的な観光施設が混在していることは、今後の湯村温泉の活性化にとってプラスとなることは疑いを入れない。

### ③観光客の動向

高度経済成長後の低成長下の1976（昭和51）年から現在までの宿泊客数と日帰り客数の推移をまとめると、図4のようになる。

宿泊客数は当初の約20万人から最盛年（1987年）の35万人へと伸び、10年間で75%の増加率を示した。しかし、以後は徐々に減少傾向を示すようになり、阪神淡路大震災の影響を受けたとはいえ、今日では20万人台前半で停滞している。一方、日帰り客数は増加の一途をたどっており、これは前述したような観光施設が集中して周辺地域に開発されたことを反映している。当初の20万人が4倍に増加しているのである。この日帰り客を滞在させることが、活性化策の検討に際して重要である。宿泊客と日帰り客の季節性を見ると、宿泊客はほぼ周年化しているのに対し、日帰り客は8月の夏をピークに5月、1月などへとピークシーズンの変動が見られる。

国土交通省が行った「温泉地の満足度アンケート調査」<sup>15)</sup>によると、2001～2002年にかけての9ヵ月間の宿泊客の実態は、以下のようなものである。サンプル数306のうち、男女比は56：44であり、年齢層は30～50代が各20%程度、20代と60代が各約15%で分散している。旅行者構成では、家族連れ35%をはじめ夫婦の29%が多く、友人グループが18%で次ぎ、その他に、カップル8%、親戚5%などとなっている。

ここに、小グループの温泉観光が主流であることは疑う余地はないが、1泊が86%に

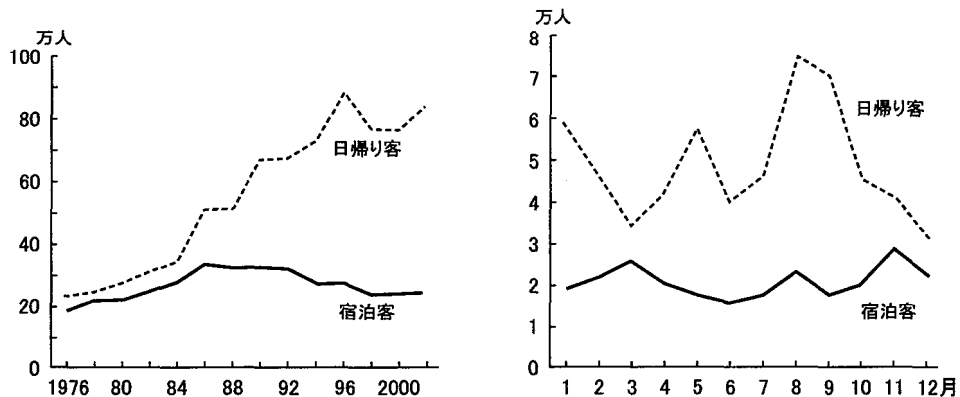


図4 湯村温泉における宿泊客・日帰り客の推移（1976～2002年）と季節性（2002年）  
（注）温泉町の資料により作成。

および、相変わらず短期宿泊旅行が中心である。最近普及しつつあるバックツアーは10%程度に過ぎない。居住地構成では、地元兵庫県内が42%、大阪府24%、京都府12%で計78%を占め、京阪神観光市場に依存していることが明らかである。そこで、リピーターが61%であり、5回以上が3分の1に達している。温泉地訪問の目的は、複数回答で「温泉に入る・楽しむ」が92%、「名物料理を楽しむ」が66%を示し、冬のカニ料理を求めて来訪する湯村温泉客の特色がよく出ている。温泉地選定に際しての情報入手は、口コミの21%をはじめ、ガイドブック18%、旅行情報誌16%、旅行会社のパンフレット14%などであり、旅行情報誌のウエイトが高い。

次に、湯村温泉における温泉地選定条件の重要度とその満足度をまとめると、表2のようである。湯村温泉を宿泊地に選定するに

際して、重要な条件は冬のカニの郷土料理をはじめとし、以下に温泉の質や量・宿泊料金・温泉場の魅力・交通の利便性などが上位にランクされている。選定条件の上位3位までの合計値を全国平均と比較すると、特に郷土料理は26.8ポイント、温泉の質・量は10.5ポイントも上回っており、この両者が湯村温泉への志向性を特色づけていると言えよう。そして、その満足度も「大変満足」が30%を超えており、全国平均に比べても著しく上位にある。

反対に、温泉地の雰囲気や周辺の自然景観などの地域環境については評価が低く、交通の利便性も同様である。交通条件は仕方がないとしても、温泉地の雰囲気、すなわち温泉情緒の醸成は今後の課題であり、十二分に整備されている周辺地域の自然景観についての認識が足りず、満足度も低いことは問題である。

表2 湯村温泉における温泉地選定条件の重要度と満足度 (2001～2002年) (単位%)

選定条件	重要度					重要度上位3位			満足度					満足度上位3位		
	A	B	C	D	E	湯村	全国	差	A	B	C	D	E	湯村	全国	差
郷土料理	42.0	33.9	15.0	5.8	3.3	53.7	26.9	26.8	32.7	42.1	20.9	3.1	1.2	41.3	20.8	20.5
温泉の質・量	29.0	37.9	21.0	9.2	2.9	40.7	30.2	10.5	34.7	51.1	11.9	1.5	0.8	46.5	37.1	9.4
宿泊料金	25.7	46.8	16.0	8.2	3.3	39.9	38.5	1.4	19.2	54.3	20.4	5.7	0.4	27.2	27.4	-0.2
温泉場の魅力	24.5	39.0	21.6	10.8	4.1	27.1	26.2	0.9	28.6	43.9	22.9	4.2	0.4	24.9	22.8	2.1
交通の利便性	20.7	46.9	14.5	15.3	2.6	30.7	37.0	-6.3	19.2	43.0	24.2	12.5	1.1	22.5	26.1	-3.6
くつろぎ	16.9	42.1	29.7	5.3	6.0	15.6	15.8	-0.2	12.7	48.6	33.9	3.2	1.6	7.0	10.9	-3.9
接客サービス	16.0	34.0	37.7	7.5	4.8	9.2	9.1	0.1	24.2	52.8	20.6	2.0	0.4	17.4	15.9	1.5
宿泊施設の設備	15.5	30.1	29.0	19.9	5.5	14.2	14.7	-0.5	14.1	47.2	31.2	7.1	0.4	16.4	17.3	-0.9
温泉地の雰囲気	14.1	48.3	24.9	10.8	1.9	13.3	17.3	-4.0	18.0	51.5	25.8	4.3	0.4	15.5	16.6	-1.1
知名度の高さ	9.1	33.0	33.0	14.8	10.1	4.1	4.9	-0.8								
パンフレット情報	9.0	28.6	33.5	19.5	9.4	2.3	3.9	-1.6								
周辺の自然景観	6.7	17.5	37.5	27.1	11.2	0.9	9.2	-8.3	3.2	21.8	65.1	7.9	2.0	0.5	6.6	-6.1
特産品・土産品	6.0	21.4	42.5	18.4	11.7	4.1	2.0	2.1	4.0	29.2	57.6	7.2	2.0	1.9	1.5	0.4
家族のレジャー	5.4	16.2	31.3	19.7	27.4	3.7	8.0	-4.3	5.7	15.5	66.7	9.3	2.8	3.8	5.0	-1.2
バックツアー	1.2	7.2	25.8	19.8	46.0	0.5	1.8	-1.3								
創作活動の充実	0.7	10.6	38.9	25.3	24.5	0.0	0.7	-0.7	1.6	11.7	75.1	8.4	3.2	0.0	0.5	-0.5
イベント・祭り	0.4	7.8	23.8	27.0	41.0	0.5	1.2	-0.7	1.2	10.2	74.0	11.8	2.8	0.5	1.2	-0.7
総合満足度・湯村									14.5	73.2	9.3	3.0	0.0			
総合満足度・全国									25.5	61.7	9.3	3.0	0.6			

(注) 国土交通省資料により作成。選定条件の配列は、重要度のAの比率の順による。差は全国との差。  
 重要度 A: 大変重視 B: 重視 C: どちらでもない D: あまり重視しない E: 全く重視しない  
 満足度 A: 大変満足 B: 満足 C: どちらでもない D: 少し不満 E: 大変不満



### 3 湯村温泉の活性化策

以上の分析を踏まえて、湯村温泉の今後の活性化について、すぐに出来る具体策を提示する。これまでのように、施設整備に多額の資金を投じてきた経緯からすると、以下のような整備は容易であろう。

#### (1) ハード面の整備

①湯村温泉のシンボルである荒湯とその周辺地区は、基本的には整備が完成し、温泉情緒を醸成している。しかし、隣接した共同浴場の「薬師湯」は鉄筋コンクリート造りの何の変哲もない施設のままだに置かれている。まず、この共同浴場の外観を和風の木造建築に変え、そぞろ歩きで外出した宿泊客が、自然に入浴したい気になるように配慮する。薬師湯の利用者は、現在でも年間7万8,000人中、町外客が74%を占めており、さらなる誘客が大切である。

次いで、現在、電柱の地中化が進められつつあるものの、土産品店や商店などの外観や看板の不調和が目立っている。宿泊客が温泉地に求める3大要件は、「温泉資源そのもの」「温泉情緒」「自然環境」の良さである<sup>16)</sup>。温泉情緒豊かな癒しの空間として活性化するために、荒湯一帯の温泉集落景観を和風の町並みに統一し、保全すべきである。

②既存観光資源の整備として、第1に薬師堂の補修が先決である。湯村温泉の発展を見守ってきた温泉の本尊である薬師様を、このような荒れた状態で放置していることは問題である。すぐれた天井絵も扉が閉められたままでは、鑑賞することも出来ない。湯村温泉まちづくり協議会も、同様なプランをすでに4年前に明らかにしている<sup>17)</sup>、すぐにも実現することが望まれる。

#### (2) ソフト面の整備

①湯村温泉の中心街や周辺地域ともに、すぐれた観光資源や観光施設が分布していることは、すでに述べた。季節にかかわらず、これらをいかに有機的に結合させて、活性化するかが問われているのである。そのためには、

まず温泉地ガイドの創設が大切である。ボランティア的な案内人が温泉地域の歴史・文化をガイドし、観光客とともに温泉街を歩いて触れ合い、温泉地存立の意義を実感してもらうことが、口コミによる宿泊客の誘致に繋がるのである。実際、日本温泉協会の最近の調査結果でも、地域ガイドを要望する声が著しく高くなっている<sup>18)</sup>。

具体的なルートと訪問施設は、次のように設定できる。

A コース：荒湯源泉→夢千代像→正福寺→杜氏館→薬師堂→八幡神社→リフレッシュパークゆむら解散（入浴とレストランでの昼食）（所要時間は徒歩3時間で無料）

B コース：清正公園→但馬牧場公園→おもしろ昆虫化石館→上山エコミュージアム散策→薬師湯解散（入浴）（所要時間はマイクロバス利用3時間で交通費・入場料実費）

AコースとBコースは、それぞれ午前と午後の2回ずつ行い、両方に参加出来るように配慮する。両コースに参加すると丸1日の滞在となり、時間に余裕のある宿泊客の連泊を推進することにもなる。Aコースでの杜氏館の資料、薬師堂の天井絵や八幡神社境内の五輪の石塔などは必見である。

②「リフレッシュパークゆむら」の活用を図る上で、健康志向客への対応を一層重視すべきである。高齢化社会の今日、高齢者が温泉旅行の主役を担いつつあることは明らかである。この日帰り温泉施設は、年間安定して10~12万人程度（町民30%）の入浴客があり、併設のレストラン楓は但馬牛のメニューがうけて、年間3万人強の客を集めている。

ピークシーズンの8月や正月の入浴客数は、1日で1,800人にもなるが、その他の月の平日は少ないので、その活用を促進する必要がある。リハビリ的利用は13年前から始まっているが、2年前からは健康づくりのメニューとして、30分間のダイエットコースを導入した<sup>19)</sup>。これは生活習慣病や水中健康づくりを目指しており、週4回、年間35

回を目標としている。毎回 20 名弱の参加者があり、さらなる飛躍が期待される。

この施設は兵庫県健康スポーツ関連施設連絡協議会に所属しており、兵庫県医師会認定の運動指導員が指導に当たっている。現在、会員 290 名中、65% が町内、35% が町外の居住者と言う。年会費はそれぞれ 1 万 5,000 円、3 万円に過ぎないし、町民へのアンケート結果でも保健・医療施設の充実が望まれているので<sup>20)</sup>、医療費を下げる上からも「リフレッシュゆむら」の健康利用は重要である。源泉を 2 本有し、毎分 400 リットルの豊富な温泉資源を有効に活用するためにも、町民はもちろん、周辺地域からの会員増強を図るべきである。さらには、旅館滞在客に対して健康づくりを行う短期集中型のメニューを考案し、提供すると良い。

#### 4 むすび

兵庫県湯村温泉は、温泉街では温泉の歴史性を有する荒湯源泉の湯量の豊富さと湯煙をあげる温泉情緒に加えて、共同浴場の「薬師湯」、新しい日帰り温泉施設の「リフレッシュパークゆむら」などの温泉施設があり、第 1 級の温泉地域景観を有している。自然環境に恵まれた周辺地域では、地域性を反映した但馬牛の牧場公園やスキー・テニスなどのスポーツ施設も充実し、さらには昆虫化石館や上山エコミュージアムなど教養観光への取り組みなども始まり、観光資源が一層多様化している。

それにもかかわらず、これらの観光資源が相互に密接に機能して展開してきたとは言えず、温泉場の宿泊客増加には繋がっていないのが現状である。その要因は、外的な交通条件の不利にあるのではなく、行政当局や温泉業者、温泉地域を構成する地域住民が、共生の精神で出来ることから実行に移すと言う姿勢に欠け、一方では補助金に頼った観光施設建設に意を注いできた結果でもあり、さらには冬のカニのシーズンに大きく依存してきた

旅館業者の経営体質にあったとも言えよう。

本論で述べたように、これらのすぐれた観光資源・観光対象を観光客に紹介し、案内して理解してもらうようなきめ細かな地域を挙げての対応、もてなしの姿勢に幾分かの立ち遅れがあったことは否めない。そこで、荒湯源泉地帯の環境保全・景観整備をはじめ、既存の観光資源の見直しとその活用を促進するようなソフト面からの対策が重要となる。まず、温泉地ガイドシステムを立ち上げ、地域社会が一体となってホスピタリティをもって滞在客に接すれば、湯村温泉が発展しないはずはないと言えよう。

#### 注・参考文献

- 1) 環境省「平成 13 年度温泉利用状況」による。
- 2) 国土交通省都市・地域整備局 (2004):『平成 15 年度地域づくり活動出合いの広場フォーラム報告書』日本開発構想研究所、67 頁。
- 3) 温泉町 (1993):「湯村温泉の移り変わり」同町、5 頁。
- 4) 前掲 2)。
- 5) 内務省衛生局 (1886):『日本鉱泉誌中巻』同局、466 頁。
- 6) 温泉町史編集委員会 (1996):『温泉町史第 3 巻』温泉町、503 頁。
- 7) 前掲 6)。
- 8) 原爆症に苦しみながらも、温泉芸者として日々を暮らしている主人公 (吉永小百合) を取り巻く人間模様を、山陰の風土を織り込みながら描いたドラマであり、多くの脇役陣の好演技も評判となった。
- 9) 温泉町 (2003):「温泉町のまちづくり」同町、7 頁。
- 10) 温泉町 (2002):「湯村温泉ライトアップ整備事業の概要」同町、14 頁。
- 11) 前掲 9)
- 12) 前掲 9)
- 13) 温泉町 (1993):「温泉町湯区における地熱水胚胎に関する調査・研究」同町、23 頁。
- 14) 前掲 13)
- 15) 国土交通省総合政策局観光部 (2003):「温泉地の満足度アンケート調査 (中間報告) 集計結果～湯村温泉」同省。
- 16) 山村順次 (1998):『新版・日本の温泉地—その発達・現状とあり方』日本温泉協会、239 頁。

- 17) 湯村温泉町づくり協議会(2000):『平成11年度温泉町湯村温泉まちづくり協議会結果報告書』同協議会。57頁。
- 18) 布山裕一(2002):「温泉旅行の実態と志向—第43回旅と温泉展アンケート調査結果概要(2)」温泉、70巻8号、4～7頁。  
温泉地に常設して欲しい業務及び実施したいサービスについてのアンケートで、観光ガイドがトップの50.6%を占め、散策の案内が42.4%で2位にランクされている。
- 19) 「リフレッシュゆむら」支配人の話による。
- 20) 温泉町(1989):『「温もりあふれる里」温泉』同町、94頁。  
町民へのアンケートで、今後の町政推進の重点について、農業振興44.1%について、保健・医療施設の充実40.3%が指摘されており、観光レクリエーションの振興22.2%を大きく上回っていた。

# 宮城県東鳴子温泉における湯治場の地域変容と活性化 Regional Changes and Activation of Higashinaruko Health Spa in Miyagi Prefecture

小堀 貴 亮\* 山村 順 次\*\*  
Takaaki KOBORI Junji YAMAMURA

キーワード：温泉地 (spa)・湯治場 (health spa)・地域変容 (regional change)  
活性化 (activation)・東鳴子温泉 (Higashinaruko spa)

## 1 はじめに

日本における湯治場の全国的展開については、すでに約 30 年前の高度経済成長期において分析がなされており (山村 1975)<sup>1)</sup>、その後の地域変容と地域振興に視点をあてた研究も、最近発表されている (山村 2002・2003、宮城県 2003)<sup>2)</sup>。また、個別の湯治場における地域変容と現状・課題についても、筆者らによって研究が進められつつある (山村 1998・2002、小堀 2003、小堀・山村 2004、山田 2004)<sup>3)</sup>。

今日、高度経済成長期やバブル経済期に経営拡大を図ってきた大規模旅館の多い観光 (歓楽) 温泉地が、苦境に直面している。そのような観光温泉地を中心にして、虚偽の温泉利用問題が噴出したのも<sup>4)</sup>、温泉資源と観光経営とのバランスを欠き、温泉地経営の理念に乏しい観光温泉地がいかに多いかを物語っている。

その一方で、小規模な療養・保養温泉地は、その国民経済的意義というよりは、天然温泉と心身を癒してくれる温泉地環境を満喫できる場、高齢化社会を迎えての健康づくりの場、家族連れでの保養の場としての意義が著しく大きく、国民の目は変化しつつある現代的湯治場に注がれている。事実、旅行者が「湯治」と銘打ったツアーを催行し始めたり、旅行雑誌や情報誌でも、湯治の文字がいたるところ

で見られるようになった。

そして、こうしたニーズに対応する方途を目指し、地域的特性を活かしつつ努力している温泉地も多くなっている。本稿で取り上げた宮城県鳴子町東鳴子温泉は、まさにその好例をなす。筆者のひとり山村も、早くから東鳴子温泉に注目して、地域変容に関する継続的な研究をしてきた<sup>5)</sup>。ここに、東鳴子温泉の形成過程と地域構成を概観した後、最近の資料を分析して入湯客の地域的特性の変化を明らかにし、次いで地域住民の地域活性化への取り組みを踏まえた地域振興のあり方をまとめることにしたい。

なお、ここで言う湯治場とは、必ずしも湯治客のみを相手とするだけではなく、保養客・観光客を受け入れつつも現代的湯治場づくりを目指している温泉地である。

## 2 形成過程と地域構成

東鳴子温泉は宮城県鳴子町内にあり、鳴子・川渡・中山平・鬼首の各温泉地とともに鳴子温泉郷を構成しているが、温泉郷の中心をなす鳴子温泉から東へ約 1.5 km の田園地帯に位置し、小規模な温泉集落を形成している。

鳴子町は玉造郡に属し、大和朝廷への石英・水晶の玉を貢ぐ産地として知られ、出雲玉造 (瑪瑙)・河内玉造 (玉沙) とともに、

\* 別府大学 (Beppu University) \*\* 千葉大学教育学部 (Chiba University)

日本3大玉造のひとつであったが、『続日本紀』の837(承和4)年の条に、玉造塞の温泉石神(川渡温泉)が記されており、古くから温泉が存在していたことを知りうる<sup>6)</sup>。

旧大口村に属する川渡温泉は歴史が古いのに対して、川渡に近い同村内の東鳴子温泉は開発が比較的新しく、江戸時代には鷹ノ巣・田中・赤湯の各温泉があった。鷹ノ巣温泉は中世以降に成立したと言われ、隣接した田中温泉は温泉湧出年不詳であるが、鷹ノ巣の湯守高橋新助が幕末の1834(天保5)年になって開湯した<sup>7)</sup>。赤湯(赤梅に由来)は江戸時代中期にはその記録があり、1772(明和9)年の『封内風土記』に「赤湯は熱湯なり。疝氣、寸白虫(婦人疝氣)を治す」と記され、脚気の川渡、瘡の鳴子に次いで知られていた<sup>8)</sup>。仙台藩主や岩出山城主の遊樂地でもあり、幕末の1863(文久3)年、仙台藩主伊達慶邦は夫人とともに赤湯で湯治をしたので、この頃から赤湯が「御殿湯」とも呼ばれるようになったと言う。

1886(明治19)年の内務省衛生局発行『日本鉱泉誌 上巻』<sup>9)</sup>によれば、各温泉の浴客数は赤湯(塩類泉)4,503人、田中(炭酸泉)1,065人、川渡(炭酸泉)4,962人、鳴子の滝ノ湯(硫黄泉)2,568人などと記され、赤湯が東鳴子の中心となっていたことが明らかである。明治中期の『勝境名区遊覧案内』には、玉造郡温泉村八湯(玉造八湯)として、川渡・田中・赤湯・旧車・新車・河原・鳴子・中山の8温泉が挙げられ、各温泉には3~4カ所の共同浴場があり、東鳴子のおもな温泉宿は田中に高橋新助、赤湯に高橋勘七・片倉常治・大沼綾治の名が記されていた<sup>10)</sup>。

大正時代になると、内湯を有する旅館もあり、共同浴場は旅館の共同経営であった。浴客数は大幅に増加し、内務省の統計では、赤湯温泉は10ヵ年平均で1年当たり2万4,817人、田中温泉は5ヵ年平均で1万6,381人を数えた<sup>11)</sup>。ちなみに、鳴子温泉は12万7,536人、川渡温泉は3万4,152人であり、東

鳴子温泉としては川渡温泉と肩を並べる状況であった。

昭和前期の『温泉案内』<sup>12)</sup>には、田中・新田中・赤湯温泉について、次のような記載がある。田中湯は炭酸泉・弱食塩泉・単純泉・アルカリ泉(重曹泉)の4種類の泉質があり、温度は60~100℃の高温泉である。いずれもリウマチをはじめ、多くの疾病に効能がある。温泉湧出口は鷹の巣の湯と田中の湯の2カ所あり、普通の浴槽のほか蒸し湯や滝湯が設置されていた。新田中湯は荒雄川に臨む位置に新設され、湯量も豊富で浴場は10数個ある。赤湯も50~60℃の高温の単純泉・炭酸泉・弱食塩泉で、泉質はバラエティに富み、各種疾病の効能が記されている。いずれの温泉も療養向きと性格づけられており、自炊制(1日の室料40~80銭)が中心であるものの、赤湯と新田中湯は宿料1円80銭~5円で賄い付の旅籠形態も導入されていた。旅館は田中温泉では田中温泉旅館、新田中湯では高友、赤湯では大正館・丸宮・伊藤・勘七・遊情館・大沼屋・明正館の名があり、旅館が増えている。

第2次世界大戦後、東鳴子の温泉旅館は戦前と変わることなく湯治場として機能してきた。1960年代以降の高度経済成長期に、鳴子温泉が観光化を遂げる中で、旧川渡村長や鳴子町長を務めた田中温泉の旅館主は、湯治場の重要性を強く認識しており、自炊湯治場としての東鳴子温泉のイメージアップを図り、自らも自炊棟の増設を進めてきた<sup>13)</sup>。

ここで、自炊機能の変化を旅館の収容人員からまとめたのが、表1である。1975(昭和50)年の時点では、20軒の旅館中4軒が自炊のみ、10軒が自炊中心の旅館であり、湯治場としての機能が著しく強かった。20年後の1995(平成7)年でも、旅館数は14軒に減少してはいるが、自炊機能に大きな変化はなく、湯治市場の維持とすでに現代的湯治場づくりへの地域構成員の意識が醸成されていたことを知りうる。

表 1 東鳴子温泉における自炊機能の変化 (1975・1995年)

年次	1975年					1995年				
	旅館数	收容人員(人)				旅館数	收容人員(人)			
		自炊	旅籠	計	%		自炊	旅籠	計	%
自炊のみ	4	100		100	5.4	3	199		199	14.5
自炊>旅籠	10	925	464	1,389	74.4	5	574	253	827	60.1
自炊<旅籠	2	108	142	250	13.4	3	64	120	184	13.4
旅籠のみ	4		126	126	6.8	3		166	166	12.0
計	20	1,133	732	1,865	100.0	14	837	539	1,376	100.0
%		60.8	39.2	100.0			60.8	39.2	100.0	

(注) 1975年は『鳴子町史下巻』、1995年は鳴子町観光協会の資料により作成。  
旅籠は賄い付き旅館を意味し、この地方特有の呼称である。

ここで、東鳴子温泉の地域構成を見よう(図1)。東鳴子温泉の西部を構成する赤湯に旅館が集中して温泉街をなし、田中湯には收容規模の大きな自炊中心旅館がある。赤湯の旧道沿いに一般商店や飲食店・土産品店などが密集し、その他の地区では道路沿いに点在している。温泉街の背後には急崖が迫り、ス

ギやヒノキが植林されており、緑いっぱい  
の快適環境を醸成し、反対側には荒雄川が形成する平坦地があり、水田や住宅が広がっている。このような田園景観が広がる閑静な東鳴子温泉は、自炊旅館や旅籠旅館の存在とあいまって、まさに今後の保養温泉地づくりに最適の温泉地であると言えよう。

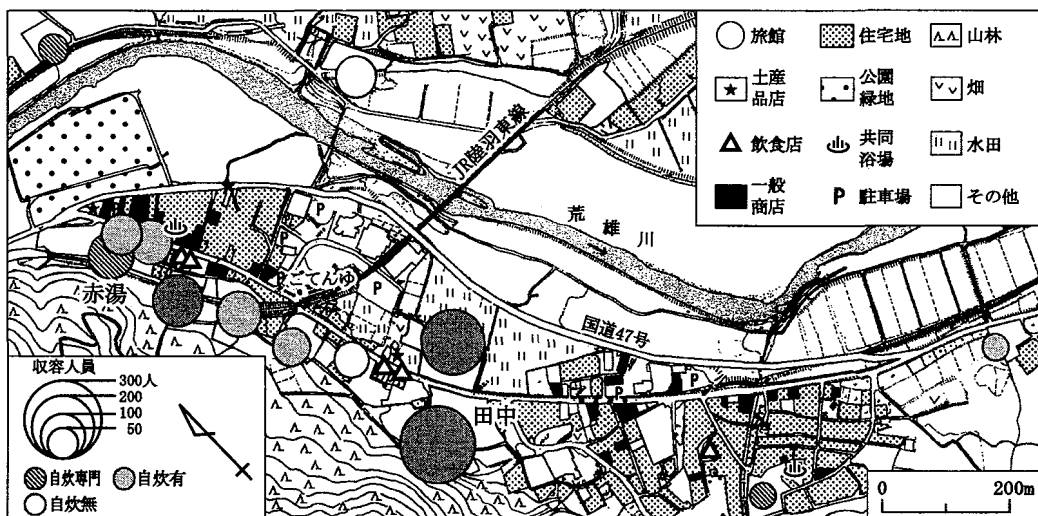


図 1 東鳴子温泉の地域構成 (2003年)

(注) 実地調査と鳴子町の資料により作成。

### 3 入湯客の地域変容

東鳴子温泉の湯治場の地域変容を明らかにする指標として、ここでは入湯客の性格変化、市場構成の変化を分析する。まず、自炊湯治客の多くが集まった1967(昭和42)年

のA旅館をはじめ、2000(平成12)年のB旅館、2002年のC旅館の宿帳を整理したのが、表2である。高度経済成長真っ只中において、A旅館は2万2,000人余りの延自炊湯治客を集め、その湯治市場構成は宮城県内

表2 東鳴子温泉における湯治客・観光客の地域的特性の変化 (1967・2000・2002年)

年次	1967年 (A)				2000年 (B)				2002年 (C)									
客層 客数 地域	湯治客			観光客		湯治客				湯治客			観光客					
	実数 ①	延数 ②	% ②/① 泊	実数	%	実数 ①	延数 ②	% ②/① 泊	実数 ①	延数 ②	% ②/① 泊	延数	%					
宮 城 県	石巻市	201	2,009	9.1	10.0	434	11.0	111	688	8.6	6.2	8	34	10.0	4.3	26	10.0	
	気仙沼市	78	854	3.8	10.9	88	2.2	61	465	5.8	7.6	12	49	14.4	4.1	34	13.0	
	仙台市	83	851	3.8	10.3	490	12.5	119	784	9.8	6.6	8	20	5.9	2.5	33	12.6	
	古川市	57	715	3.2	12.5	229	5.8	23	119	1.5	5.2	7	10	2.9	1.4	21	8.0	
	塩釜市	24	265	1.2	11.0	83	2.1	54	249	3.1	4.6	2	3	0.9	1.5	8	3.1	
	多賀城市	16	121	0.5	7.6	32	0.8	34	161	2.0	4.7					2	0.8	
	岩沼市												1	2	0.6	2.0		
	名取市																1	0.4
	市部計	459	4,815	21.6	10.5	1,356	34.4	402	2,466	30.8	6.1	38	118	34.7	3.1	125	47.9	
	栗原郡	172	2,140	9.6	12.4	130	3.3	53	250	3.1	4.7	1	2	0.6	2.0	2	0.8	
	桃生郡	124	1,433	6.4	11.6	84	2.1	113	660	8.2	5.8	3	14	4.1	4.7	6	2.3	
	遠田郡	122	1,311	5.9	10.7	181	4.6	38	193	2.4	5.1	4	13	3.8	3.3	16	6.1	
	加美郡	96	1,241	5.6	12.9	124	3.1	64	168	2.1	2.6					4	1.5	
登米郡	97	1,217	5.5	12.5	59	1.5	81	369	4.6	4.6	2	25	7.4	12.5	17	6.5		
牡鹿郡	97	1,191	5.3	12.3	154	3.9	63	455	5.7	7.2	3	24	7.1	8.0	3	1.1		
宮城郡	78	837	3.8	10.7	22	0.6	147	920	11.9	6.3	1	1	0.3	1.0	3	1.1		
黒川郡	53	676	3.0	12.8	19	0.5	10	87	1.1	8.7	3	22	6.5	7.3	1	0.4		
本吉郡	53	567	2.5	10.7	23	0.6	71	490	6.1	6.9	1	14	4.1	14.0	8	3.1		
志田郡	42	435	2.0	10.4	27	0.7	31	68	0.8	2.2					5	1.9		
玉造郡	24	224	1.0	9.3	130	3.3	2	17	0.2	8.5	5	30	8.8	6.0	1	0.4		
柴田郡												1	5	1.5	5.0			
郡部計	958	11,272	50.6	11.8	953	24.2	673	3,677	46.2	5.5	24	150	44.1	6.3	66	25.3		
県計	1,417	6,087	72.2	11.4	2,309	58.6	1,075	6,143	77.0	5.7	62	268	78.8	4.3	191	73.2		
岩手県	221	2,524	11.3	11.4	400	10.2	75	402	5.0	5.4	5	32	9.4	6.4	12	4.6		
秋田県	197	2,349	10.5	11.9	315	8.0	2	20	0.2	10.0					4	1.5		
東北3県	22	261	1.2	11.9	136	3.4	45	216	2.7	4.8	1	2	0.6	2.0	9	3.4		
北海道	8	145	0.7	18.1	51	1.3	2	16	0.2	8.0					1	0.4		
東京都	40	575	2.6	14.4	484	12.3	85	529	6.6	6.2	4	7	2.1	1.8	12	4.6		
関東地方	29	302	1.4	10.4	171	4.3	146	609	7.6	4.2	6	20	5.9	3.3	25	9.6		
その他	2	38	0.2	19.0	72	1.8	21	58	0.7	2.8	4	11	3.2	2.8	7	2.7		
合計	1,936	22,281	100.0	11.5	3,938	100.0	1,451	7,993	100.0	5.5	82	340	100.0	4.1	261	100.0		

(注) 東鳴子温泉の3旅館 (A・B・C) の資料を集計して作成。この表での湯治客は自炊客であり、観光客は賄付き客である。観光客の中には数泊の滞在をする人もいる。東北3県は青森・山形・福島県。

が72%（うち郡部50%、市部22%）に達し、東北地方を加えると95%を占めた。特に、栗原郡・石巻市が多く、その他では桃生・遠田・加美・登米・牡鹿の郡部が上位にランクされ、仙台平野北部の農村地域と三陸海岸の漁村地域と強く結合していたことがわかる。

一方、同じ旅館の観光客市場構成では、宮城県が58%（郡部24%、市部34%）、東京都の12%を含む関東地方が17%（自炊4%）を示し、1泊の短期滞在観光市場は、すでに関東地方へと拡大していた。

平均宿泊数は11日におよび、当時、自炊で1日当たり部屋代600円のほかサービス料60円と入湯税20円を加えて680円（夜具・丹前付きでは1,200円）という格安料金であり、長期滞在が可能であった。賄い付きの旅籠であれば、食事代1,000円などを追加して2,300円となり、料金は倍増した。

近年の2000年時点のB旅館の例でも、自炊湯治客は延1万8,000人を数え、宮城県内が77%（郡部46%、市部31%）と著しく高率であり、30年以上前と変わっていない。自炊宿泊の場合、1泊3,500円程度であり、出前の食事を注文することも出来る。これは2002年のC旅館の自炊湯治客の場合でも同じである。もちろん、旅館によって市場構成比に若干の地域的差異はあるが、平均滞

在数は半分の5泊程度に減っていることは、近年の社会経済情勢を反映したものである。すなわち、農家や漁家が兼業化し、十分な余暇が取れない傾向にあり、またかつては娯楽が乏しかった農漁村から青壮年層の入湯客が多く来訪していたが、今日では農漁村環境が一変するとともにその数を減じ、湯治客の高齢化が一層進展してきたことを物語っている（表3）。特に、60代以上の比率は、30年間に45%から64%へと増加しており、旅籠客を含めたC旅館でさえも51%を示している。

次に、東鳴子温泉の1974（昭和49）年と2001（平成13）年の自炊湯治客と旅籠観光客の季節性の変化を見ると（図2）、大きな変化が起きていることが明らかとなる。すなわち、1974年では約15万人の宿泊客のうち、自炊湯治客が約70%（10万5,000人）を占め、農閑期の冬季に農民が著しく集中し、これに漁民が加わっていた。観光客は数が少ないものの、通年にわたって均等に来訪していた。1975年2月に、A旅館で聞き取りをした結果では、40人中保養目的が19人と半数を占め、病状では神経痛・リウマチ14人、胃腸病2人、腰痛3人、その他2人であった<sup>14)</sup>。ここに、農漁民の重労働後の骨休めの場として、東鳴子温泉の湯治場が機能しているのであり、旅籠を利用する湯治客もかなりいた。

表3 東鳴子温泉における湯治客の年齢構成の変化（1967・2000・2002年）

年次 年齢 客数	1967年 (A)		2000年 (B)		2002年 (C)	
	延数	%	延数	%	延数	%
20代以下	86	4.3	27	1.5	21	10.1
30代	194	9.7	35	2.0	15	7.2
40代	316	15.7	61	3.4	19	9.1
50代	514	25.6	169	9.6	46	22.1
60代	651	32.4	563	31.9	55	26.4
70代	} 247	12.3	694	39.3	42	20.2
80代以上			218	12.3	10	4.8
計	2,008	100.0	1,767	100.0	208	100.0

（注）東鳴子温泉の3旅館（A・B・C）の資料により作成。A・B旅館は自炊旅館。  
C旅館には旅籠観光客も含む。



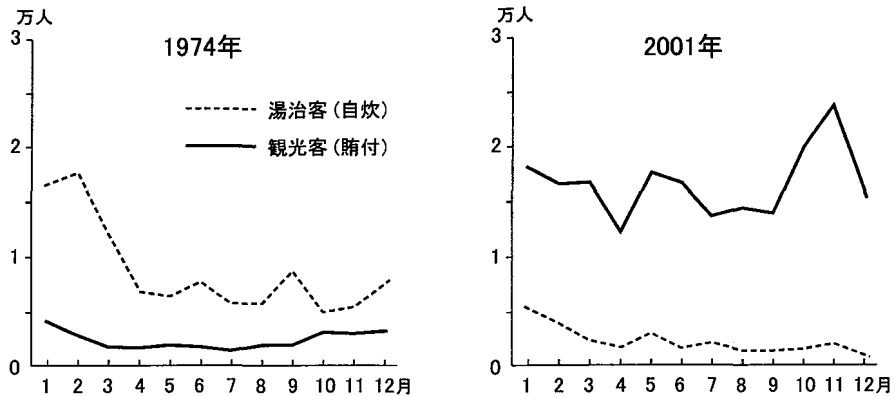


図2 東鳴子温泉における自炊湯治客と観光客の季節性の変化(1974・2001年)

(注) 鳴子町の資料により作成。

これに対し、2001年では23万人の宿泊客のうち、自炊湯治客は12%(2万6,000人)に過ぎなくなり、観光客は88%へ急増して逆転した。その季節も、秋の紅葉シーズンにピークがあり、通年的に客を集めるようになった。ここに、東鳴子温泉においては、長期滞在用の自炊施設を擁しつつも、都会の短期滞在保養客を多く受け入れるようになりつつあり、旅館業の新たな展開を読み取ることが出来よう。

#### 4 温泉地域振興策

以上のように、東鳴子温泉は閑静な地域環境下であり、なによりも観光化がもてはやされる時代にあっても、自炊湯治客をはじめ保養客を大切にもてなす経営感覚を、各旅館が共通して認識してきた歴史がある。各旅館は自炊専門・自炊と旅館併設・旅館専門のように、経営形態に若干の違いはあるものの、現代的湯治場を目指して、新たな持続可能な温泉地域を構築しようとの理解は共通している。地域を挙げての体制が整っていることは、今後の地域振興策を実行していく上で最大の武器となる。

以下に、東鳴子温泉の具体的な地域活性化・地域振興策を提示することにした。

①まず、温泉地活性化のもとになる温泉資源

について見よう。2001年現在で収容人員約1,300人に対して、温泉湧出量は毎分約1,500リットル(自噴率63%)<sup>15)</sup>であり、収容人員1人当たり毎分1.2リットルとなる。これは1リットルが一応の基準となるので、温泉資源性に恵まれていることになる。また、狭い地域でありながら、利用源泉47本中、自噴源泉が41本もあり、動力源泉6本を加えて、そのほとんどが42℃以上の高温泉である。さらに、泉質が多様であり、単純泉・塩化物泉・ナトリウム-炭酸水素塩泉・硫化水素泉などがあり、1旅館で異なった泉質を有するところもある。これらの温泉の性格の違いをアピールして、各旅館の浴場を開放した「温泉めぐり」を始めることである。

また、これに関連して、東鳴子温泉のシンボルとして、和風木造の「御殿湯」共同浴場をJR御殿湯駅前の広場に早急に建設する必要がある。

②次いで、滞在客メニューのひとつとして、滞在客(もちろん日帰り客でも良い)に対して、地域内外の観光ポイントを温泉地ガイドが無料(ガイドの必要経費は観光協会などが負担する)の案内し、地域住民と客の触れ合いを促進することである。特に、保養を目的に滞在している湯治客を外に出し、散策をすることで健康増進に繋がるとともに、地域理

解を深めることにもなる。そのためにも、温泉地の景観保全を進め、通りや町並みに潤いがある空間を創出することが望まれる。

地域ガイドの例として、「歴史・伝統産業見学3時間コース」として、温泉石神社（川渡）・温泉神社（鳴子）・尿前の関跡や漆器工房・こけし工房などを案内し、最後に滝湯共同浴場に入るのも一案である。さらに、マイクロバスを使って、周辺の自然環境のすぐれた地域へ案内するコース（実費）も検討されると良い。

③すでに始まっている鳴子温泉郷の「温泉療養プラン」は、高く評価される<sup>16)</sup>。町立鳴子温泉病院と旅館側との連携プレーのもとに発足したこの制度について、東鳴子温泉が中心的役割を果たし、その一層の普及を図ることが望まれる。この制度を継続していく上で、温泉入浴と効能との関係を科学的に明らかにする努力が不可欠となろう。

④地域の連帯感を醸成する上で、2003年11月に「東鳴子ゆめ会議」が実施した2泊3日の「現代湯治入門 東鳴子温泉3日間ツアー」は、まさに地元民と客との触れ合いの場づくりであり、参加者も生活臭のある人間の魅力を再発見したとのことで、好評を得たのであった<sup>17)</sup>。こうした企画を単発的なイベントとして終わらせるだけではなく、日常的に実施していくことが大切であろう。

⑤東鳴子温泉は日本有数の湯治場・保養温泉地である。しかしながら、環境省の国民保養温泉地には指定されていない。1960（昭和35）年にいち早く、奥鳴子・川渡温泉が指定を受けたにもかかわらず、当時の東鳴子温泉には一部に歓楽施設があったことから除外されたと言う。現在、環境省は国民保養温泉地の見直しを図る方針であり、各温泉地が創意工夫を凝らし、率先して保養温泉地づくりに取り組むことを前提に、これを支援することになろう<sup>18)</sup>。いまこそ、国民保養温泉地のモデルとなるべく、具体的計画案づくりに全力を傾注すべきである。

本稿の一部については、総合観光学会第5回学術研究大会（2003年11月、於別府大学）において発表した。

#### 注・参考文献

- 1) 山村順次（1975）：『日本温泉地の地域的展開と開発』日本地域開発センター、72頁。
- 2) 山村順次（2002）：「湯治場の現代的意義と課題」総合観光研究、第1号、21～31頁。  
同（2003）：「日本における湯治場の変容と地域振興」温泉地域研究、創刊号、1～10頁。  
宮城県（2003）：『増補改定 温泉の保健的利用の手引（事例中心）』同県、231頁。
- 3) 山村順次（1998）：「岩手県湯田町における温泉地の地域振興とその課題」千葉大学教育学部地理学研究報告、第9号、1～12頁。  
同（2002）：「長野県鹿教湯療養保養温泉地の変容」千葉大学教育学部地理学研究報告、第13号、1～10頁。  
小堀貴亮（2003）「大分県湯平温泉における湯治客の実態」日本温泉地域学会第1回研究発表大会発表要旨集、13～14頁。  
小堀貴亮・山村順次（2004）「別府市鉄輪温泉における湯治場の地域変容」温泉地域研究、第2号、49～54頁。  
山田等（2004）：「実践コミュニティとしての湯治場」日本温泉地域学会第3回研究発表大会発表要旨集、3～4頁。
- 4) 朝日新聞2004年8月20日付（朝刊）によれば、7月23日発行の週間ポスト誌で白骨温泉入浴剤投入がスクープされて以降、温泉騒動が起きた温泉地は、以下のようである。作並・喜多方・磐梯熱海・那須・藪塚・水上・伊香保・名栗・石和・箱根・湯河原・白骨・館山寺・弁天島・芦原・有馬
- 5) 山村順次（1977）：「鳴子温泉郷における湯治客の地域的特性」千葉大学教育学部紀要、第26巻第1部、245～256頁。  
同（1997）：「宮城県鳴子温泉郷の発達と入湯客の変化」温泉、第65巻10・11号、30～33頁。
- 6) 鳴子町史編纂委員会（1974）：『鳴子町史 上巻』鳴子町、286～287頁。
- 7) 前掲6）306～309頁。
- 8) 前掲6）311～313頁。
- 9) 内務省衛生局（1886）：『日本鉱泉誌 上巻』同局、237～246頁。
- 10) 片山友彦（1902）：『訂正増補 勝境名区遊覧案内』大倉書店、155～156頁。
- 11) 内務省衛生局（1923）：『全国温泉鉱泉ニ関スル調査』同局、365頁。
- 12) 鉄道省（1940）：『温泉案内』博文館、320

～ 321 頁。

- 13) 前掲 5)
- 14) 前掲 5)
- 15) 宮城県温泉協会 (2001) : 『みやぎのいでゆ 創立 30 周年記念誌』同協会、125 頁。
- 16) 菊地荘悦 (2003) : 「鳴子温泉郷の温泉療養プラン」日本温泉地域学会第 1 回研究発表大会発表要旨集、15～16 頁。
- 17) 大沼伸治 (2004) : 「生活力を活かした地域づくりー東鳴子温泉現代湯治 3 日モニターツアー」日本温泉地域学会第 3 回研究発表大会発表要旨集、13～14 頁。
- 18) 環境省 (2004) : 「温泉の保護と利用に関する懇談会・中間報告」同省。

# 都市型温泉施設の現状と温泉観光地の課題

## Present State of Urban Spa Facilities and Problems of Spa Resort

前田 勇\* 姜 淑 瑛\*\*  
Isamu MAEDA Sook-young KANG

キーワード：都市型温泉施設 (urban spa facilities)・温泉観光地 (spa resort)・東京 (Tokyo)

### 1 はじめに

#### (1) 研究の背景

現代社会においては、都市化の継続的進行とともに自然との接触機会が減少し続けている。さらに、さまざまな社会的・心理的原因によるストレス増大による肉体的ならびに精神的悪影響が各所にみられ、生活習慣病患者の増加に拍車をかけるなど、大きな社会問題となっている。日本ではこれらに加えて、高齢化と長寿化の傾向がさらに進んでおり、健康への関心は高齢者はもとより、社会の各層にも急速に広がりを見せている。健康に対する関心の高まりは、食生活をはじめとする日常生活場面はもとより、日常生活場面と非日常生活場面の双方にかかわる余暇活動にも、さらに非日常生活場面で行われる観光にも、多大な影響を与えている。各地にスポーツジムなどの健康増進施設が開設されるようになって久しいが、近年では都市部の各所に小規模なマッサージ施設が雨後の筍のように誕生しており、ホテルなど宿泊施設では健康・美容関連施設を館内の付帯サービスとして重視する傾向が強まっている。

このような社会状況をふまえて、2003年春から初夏にかけて、東京都内各所に相次いで大規模な温泉施設が開業した。これらの施設は、従来の類似施設を規模的に大きく凌駕しているだけではなく、採り入れている館内サービスや営業形態などにそれぞれ特徴を有しており、疲労回復・ストレス発散・健康増

進のいずれかとの結びつきを強調し、人気を集めている。

これらの都市型温泉施設への関心の高まりが、各地の温泉地を訪れようとする意欲を刺激することも期待できるが、軽視できないのは、時間的・経済的の両面あるいはいずれかの面で余裕のない都市部の人びとが、地方の温泉地を訪れる代りとして利用することも、短期的には十分予想されるのである。都市型温泉施設の温泉観光地への影響と対応課題を検討するにあたって、まず大規模な都市型温泉施設の現状を把握することが必要である。

#### (2) 研究の目的

都市型温泉施設の意味について整理したうえで、2003年3月から6月にかけて、東京都内に開業した3つの「大江戸温泉物語」「東京ドームシティ・ラクーア」「豊島園庭の湯」の大型都市型温泉施設の現状を分析し、それらの施設が温泉観光地に及ぼす影響について考察を加えることを研究の目的とした。

#### (3) 研究の方法

一般利用客として実際に施設を訪れ、施設と利用の状況全般を直接体験するとともに、観察した利用調査と関係者に対するヒアリング調査を行った。利用調査は、各施設の開業時期と約半年を経過した時期との2回実施し、意見交換を綿密に行った。また、関係者に対するヒアリング調査は、経営者または運営責任者に対して行い、事前に研究目的を説明し、資料提供を求めた。

\* 立教大学観光学部 (Rikkyo University) \*\* 立教大学大学院 (Graduate School of Rikkyo University)

## 2 都市型温泉施設の意味・歴史・分類

### (1) 都市型温泉施設の意味

都市型温泉施設は、「都市部に設置され、大浴場を中心に、休憩施設および各種の健康回復ならびに美容増進施設・飲食施設・娯楽演芸施設等を併せ備えた温泉施設」ということができる。

### (2) 発端と歴史的概観

都市型温泉施設として日本で最初のものは、1911（明治44）年に兵庫県宝塚に開設された「宝塚温泉（後に宝塚ファミリーセンターと改称）」であると考えられており、同温泉は温泉施設において少女歌劇団ショーを提供するという企画で注目を集めた。この少女歌劇団ショーは大人気を博し、2年後の1913（大正2）年に宝塚歌劇団として独立し、1927（昭和2）年には日本最初の本格レビュー「モンパリ」の上演に成功を収め、その後現在にいたるまで、多くのファンを獲得し続け、90年余の歴史を刻んでいる。

最近の研究によると、宝塚温泉の成功の影響を受け、別府温泉をはじめ、全国約20カ所もの温泉施設に、類似した“少女歌劇団”が編成・配置されていたことが明らかになった。別府温泉では、1925（大正14）年に鶴見園女優歌劇が誕生し、施設内温泉プールで人気女優が泳ぐことが話題を集めた<sup>1)</sup>。

第2次世界大戦後、1950年代半ば頃から、全国各地に「銭湯」ではない温泉施設が登場する。最初に「ヘルスセンター」の言葉を用いたのは、1952（昭和27）年に新潟県月岡温泉に設置されたものであった<sup>2)</sup>。その後、大衆余暇社会の到来を背景に、1966年の常磐ハワイアンセンターのような大型施設が各地に開設され、“ヘルスセンター・ブーム”と称される状況を呈した。

1980年代に入ると、「ヘルスセンター」に代って「ラドン温泉」「健康ランド」などの名称を用いた温泉施設が続々と誕生するようになった。一方では、温泉観光地活性化の手

段としてドイツ型温泉保養館「クアハウス」の名称を使った温泉施設が導入され、1982年以降、各地に開設された。1990年代に入ると、水道水を使った「銭湯」を大幅に改良し、多種類の温泉施設に休憩等の機能をもつ「スーパー銭湯」と称される施設が登場する。大手企業のチェーン経営によるタイプも生まれ、2003年には東京都内に大型3温泉施設が相次いで開業した。

### (3) 分類

都市型温泉施設は、施設・機能面では、「休憩・慰安型」「健康・美容型」「レジャーランド型（温泉テーマパーク型）」「温浴・体験型」などに分類できる。料金では、以前からある東京都内の温泉施設は1,000円台であり、大型の温泉施設は2,000円以上である。

## 3 都市型温泉施設の現状

### (1) 研究対象施設

都市型温泉施設の存在を広く認知させた「大江戸温泉物語」「東京ドームシティ・ラクア」「豊島園庭の湯」の3施設は、いずれも1日千人以上の利用客を想定した大規模な温泉施設である。

このような大規模都市型温泉施設が相次いで開設された背景には、人びとの健康志向と利便・快適志向の高まりを、絶好なビジネス機会と判断した企業の存在がある。

「大江戸温泉物語」の場合は、東京都が造成した「台場（江東区青梅）」の一部分の土地を都から10年間借用した“新規・時間限定事業”であり、住宅販売会社を中心に流通・飲食関係企業群から構成される新会社が開設し、運営を行っている。これに対して、「東京ドームシティ・ラクア」は、野球場を中心にさまざまな娯楽と飲食関係事業を展開している東京ドームが、遊園地に隣接した土地に開設したものであった。また、「豊島園庭の湯」は約70年の歴史をもつ遊園地を運営してきた私鉄会社が、隣接していた日本庭園を利用する形で開設したものである。

これら3施設の共通点は、公共交通機関によるアクセスが容易な場所に立地していることであり、最寄駅から徒歩5分以内で到着できる。

## (2) 施設などの概要

各施設の「コンセプトあるいはキャッチフレーズ（事業者によるもの）」の項目別に整理すると、表1のようである。なお、表には「箱根小涌園ユネッサン」を参考として加

えた。これは、箱根小涌谷に立地しており、箱根小涌園を運営する(株)藤田観光が、温泉施設の再編成に際して、2001年に開業した施設である。都市型温泉施設の原型となったと考えられ、とくに「精算システム」での他施設への影響は明らかである。

いくつかの項目について補足説明を加えれば、以下のとおりである。

表1 3つの都市型温泉施設と箱根小涌園ユネッサンの概要

指標	大江戸温泉物語	ラクーア	豊島園庭の湯	箱根小涌園ユネッサン
コンセプト キャッチフレーズ	江戸をテーマとした日帰り温泉テーマパーク	都会の真中でリフレッシュを楽しむ	バーデンと天然温泉	地中海神話に彩った温泉テーマパーク
所在地	東京都江東区青海	東京都文京区春日	東京都練馬区向山	神奈川県足柄下郡箱根町二ノ平
運営開始時期	2003年3月1日	2003年5月1日	2003年6月28日	2001年1月1日
源泉名	大江戸温泉（地下1,400mより湧出、34.5℃、ナトリウム-塩化物強塩温泉 pH7.5）	小石川温泉（地下1,700mより湧出、41℃、ナトリウム-塩化物強塩温泉 pH7.5）	豊島園庭の湯（地下1,445mより湧出、33.8℃、ナトリウム-塩化物強塩温泉 pH7.5）	箱根小涌谷温泉
入館・利用料金 （消費税・入湯税別、ユネッサンは含めた金額）	2,700円 （中学生以上） 夜間・深夜割増有	2,300円 （中学生以上） 休日・深夜割増有	2,000円 （中学生以上） 深夜割増有 会員制（割引料金）有	3,500円 （湯～とびあの利用可、森の湯利用には1,000円をプラス）
精算システム	通行手形にプリントのバーコード	ICチップ組込リストバンド（含キー機能）	バーコード・ロッカーキー付リストバンド	ICチップ組込リストバンド（含キー機能）
主要施設	男女別大浴場・露天風呂・砂風呂・岩盤の湯（有料）、足湯（浴衣着用）、マッサージ・エステ施設（有料）、飲食・娯楽施設、土産販売店	男女別大浴場・露天風呂・サウナ、館内着着用の男女共用リラクゼーション施設、各種のエステ施設（有料）	男女別大浴場・露天風呂・サウナ、水着着用によるバーデゾーン、リラクゼーションルーム、マッサージ・エステ施設（有料）、飲食施設、健康商品売店	「神のエーゲ海」「古代ローマ風呂」「トルコ風ハمام」「死海風呂」など多種の施設から構成、マッサージ・エステ施設（有料）、飲食施設有
特徴	カラー浴衣（計19種類）選択、さまざまな娯楽・飲食・物販施設有、大規模旅館の2次会を楽しむ雰囲気に近い	館内着で利用するリラクゼーション、エステ関係施設が整っているリフレッシュ型施設、飲食施設は館内に多種	温泉プール・野外ジャグジーからなるバーデゾーンがあり、日本庭園が散歩できる健康回復・増進型施設	入浴施設「森の湯」と水着着用温泉施設「湯～とびあ」「箱根小涌園ユネッサン」で構成、温泉テーマパーク型レジャー施設
利用者イメージ	遊ぶ人	休む人（含女性）	くつろぐ人	

（注）各温泉施設の資料により作成。

### ①コンセプトあるいはキャッチフレーズ

「大江戸温泉物語」は施設名称のように、「江戸」をテーマとした“日帰り温泉テーマパーク”であることを明確に打出している。「温泉テーマパーク」という呼称そのものは、「箱根小涌園ユネッサン」がより早く使用しており、一般に用いられるようになったのには、「大江戸温泉物語」の影響が大きいとされる<sup>3)</sup>。これに対して、「東京ドームシティ・ラクア」は立地としての“都心部”と利用目的としての“リフレッシュ”をアピールしており、想定した利用客層と動機などを強く意識している。一方、「豊島園庭の湯」は、施設そのものを簡潔に示した内容である。

### ②源泉

いずれも地下1,400～1,700mまで掘削し、34～41℃の源泉を確保している。泉質はナトリウム-塩化物強塩温泉であり、pHは7.5ほどである。なお、東京都の地下水汲上げ総量規制の適用を受け、江東区にある「大江戸温泉物語」は1日50トン、文京区の「ラクア」と練馬区の「豊島園庭の湯」は各150トンに制限されている。

### ③精算システム

利用客にICチップを組込んだリストバンドを渡し、ロッカーキーとして使用してもらうとともに、館内での諸支払い時にも利用し、出館時に一括清算する方式を最初に導入したのは、「箱根小涌園ユネッサン」であった。「大江戸温泉物語」などの各施設は、これをひとつの参考として、安全性・確実性、想定した利用客層への適合性を検討した結果、それぞれに若干異なった仕組みを採用している。一般に言えば、利用客の年代を高い層に想定した施設はバーコード型、より若い層を想定した施設はICチップ組込み型をそれぞれ採り入れているようである。

### (3) 開業から現在までの状況<sup>4)</sup>

#### ①「大江戸温泉物語」

特徴のひとつとして、館内着としてカラー浴衣(16種類準備)を採用しており、入館

時に自由に選択することができる。同施設は、大浴場への入り口にあたる場所に、「櫓」を中心に江戸の雰囲気再現した広場がある。周辺には、さまざまな飲食・物販施設が配置されている。また、屋外部分に大規模な足湯施設を設け、浴衣で利用(寒季には別途貸与の館内着を上に着用)して、ビルの谷間で家族や仲間と一緒に、足湯を楽しむことができる。

現在までの利用状況によると、利用客の80%が関東地方から訪れており、東京が全体の50%を占める。団体客の割合は約30%である。利用客層は、曜日・時間帯によって異なり、平日の昼間は中高年齢者および若年層のグループ利用が多く、週末は家族客の割合が多い。全体としての平均滞在時間は約5時間であり、館内が最も込む時間帯は、午前からの利用客と午後早い時間の来館者が共存する13～14時である。

予想年間利用客は100万人であるが、当初設定した利用客数・年間売上目標ともに、ほぼ達成できる見通しである。費目別構成としては、入館料が47%、エステなどの館内消費が10%強で、飲食と物販がそれぞれ30%、10%強を占めている。競合施設は、テーマパークを含む文化施設一般ととらえている。

#### ②「東京ドームシティ・ラクア」

市街地のビル内に開設されたラクアは、大浴場・露天風呂とともに、館内着着用の男女共用リラクゼーション施設(ヒーリングバーデ)および多様なエステ施設が特徴である。開設にあたって、日中から夕方にかけては25～35歳の女性客、深夜客は男性ビジネス客が中心となるものと想定していた。しかし、実際には成人層一般に利用が広がっており、深夜にも女性客が多いため、1ヵ所だけの女性専用スペース(オンドル式休憩施設)の利用度が高く、かなり混雑することもある。

時間帯別利用客をみると、午前から16時

頃までは近距離からの高齢者層が圧倒的に多く、性別では男性1に対して女性3の割合である。夕方から深夜にかけては、仕事帰りの客が多く、性別では当初の予想よりも女性客が多く、男女比がほぼ1:1である。平均滞在時間は約4時間半で、ピーク時間帯は午前から昼にかけての利用客が集中する14～15時となっている。また、女性客の利用が多いことを反映して、ヒーリングバーデ利用者は入館者の35%を占め、エステ関係の売上げも当初目標を大きく上回っている。

### ③「豊島園庭の湯」

同施設は、副都心・池袋からの私鉄電車、東京都内を巡回する地下鉄線のそれぞれの駅前に位置している。しかし、基本的に都内住宅地であるため、当初から近くの住民を安定的利用客とすることを営業目標としており、利用時に簡単な手続きで入会できる会員（利用料金割引が特典）の獲得に力を入れている。

開業時から、近辺の住民をはじめとする全世代家族客を利用客としており、実際にも平日は中高年齢女性とOL層の利用が多く、性別では男性3に対して女性7の比率である。開業以来、毎週定期的に利用している90歳代の女性客がいるという。一方、週末は家族および個人の利用客が多く、性別では男性4に対し女性6の比率で、女性客が過半数を占めている。なお、開業半年後の2003年12月以降は小学生以下の入館を禁止している。

同施設は、水中歩行を楽しむための温泉プールと、施設の名称となっている日本庭園を眺めながら入浴できる大浴場を特徴としており、各種マッサージと休憩施設・飲食施設・健康関連商品販売施設を配置している。

平均滞在時間は4時間で、ピークは午前からの来館客と午後からの利用客とが共存する14～16時となっている。女性客の割合が高いことから、館内でのマッサージ・リフレクソロジー利用比率は予想を大きく上回っている。入館者の13%強という数字は、同様の施設の中で最高位の水準にある。同施設

は、同様に住宅地に立地し、より低廉な価格で営業することを特徴としている「スーパー銭湯」を最大のライバルと考えている。

### (4) 全般的概評および今後の計画

3施設の開業から2003年末までの利用状況を見ると、それぞれに潜在ニーズの受止め成功している。各施設とも、ほぼ当初の予想通りの営業成績を収めており、さらに“うれしい誤算”が生じている部分も多い。各施設の対象客層および利用形態は、それぞれやや異なっており、競合よりも相互補完の関係にある。総体として、社会的話題性を高め、都市型温泉施設一般に対する需要拡大に役立っていると評することができる。注目すべきことは、いずれもが予想以上の女性客を確保している点であり、とくに都心部に立地する「東京ドームシティ・ラクーア」は、勤務する女性の夜間利用が多いことに特徴がある。その背景には、医療・福祉関係、流通業をはじめ、さまざまな業務に従事している女性が肉体的回復や精神的発散を求める散在的ニーズの存在があり、それが都市型施設の開業によって顕在化されたものと考えられる。各施設でのマッサージ・リフレクソロジー利用比率の高さは、その端的な表れである。

各施設は、開設以来の営業実績をふまえて、それぞれ拡張を図りつつあり、すでに実行されているものもある。

「大江戸温泉物語」の場合は、前記したように“時間限定事業”であるために、事業拡張にとくに積極的である。すでに2004年3月より全国各地の温泉の湯を集め、施設内で体験入浴してもらうとともに、その温泉のPR活動を行う「参勤交代の湯」と称する新企画を採用している。新企画実施の仕組みは、関係団体に協力を求めて「全国名湯普及促進委員会」を設置して主催・運営を依頼し、各湯元は協賛金を委員会に支払い、各湯元からタンクローリー車を利用して温泉湯を毎日24トン搬送している。これは、1湯あたり10～15日間開催し、年間で24カ所を順



次紹介するというもので、館内ではパネル展示・パンフレット配付を行うとともに、産品販売や温泉への旅行案内も行うものである。

また、「豊島園庭の湯」は「露天型ジャグジー」を増設するとともに、日本庭園を望む場所に「高温サウナ」を新設する予定である（ともに2004年8月完成予定）。さらに、家族客などの入浴と宴会型需要に対応できる和室別棟新設を進め（2004年11月完成目標）、利用客層と利用形態の拡大を図っている。

#### 4 温泉観光地に対する影響

大規模な都市型温泉施設は、それぞれ現在の疲労回復サービスに加えて、医療施設との連携も検討しているが、利用客の圧倒的多数はレジャー志向であり、専門医療的プログラムは敬遠されやすいと予想される。しかし、マッサージ・リフレックソロジーなどの体験によって、健康の回復や増進のための温泉施設利用に対する一般的な興味・関心を高める下地となるものと期待することができる。

ここに各温泉観光地は、遠方までわざわざ足を運ぶだけの価値があると感じられる固有の魅力を確立し、明確に表現することがさらに求められることになる。温泉地としての魅力は、温泉そのものはもとよりであるが、宿泊施設に加えて温泉地としての環境や諸条件がある。近年、温泉の泉質と効能に対する関心が高まっているが、温泉地としての魅力には、温泉効能を十分に発揮させるための、温泉地としての環境や諸条件の整備が大きくかかわっていると考えることができる。

それらは、①自然環境と地形・景観、②地域としてのアメニティレベル、③地域の観光資源・施設配置状況、④飲食施設・店舗な

どの配置と対応レベル、⑤地域としてのエンターテインメントの質と量、⑥事業関係者や地域住民の対応などである。それらが有機的に結びついている場合には、都市型温泉施設をはじめとする代償施設の利用では満たされない、温泉観光地ならではの固有の魅力が認識されるのであり、各地方の温泉観光地の誘客力として作用することが期待できる。

1990年代初頭から続いている経済活動不活発の影響を受けて、日本国民のレジャー活動は全般的に低迷傾向が続いており、とくに国内観光は対前年比マイナス3.3%（2003年）で、7年継続して市場が縮小していると報告されている<sup>5)</sup>。成長が期待できる新市場を表現するキーワードは、「健康・安全・癒し」であり、その具体例として“温泉施設”があげられている。

温泉観光地関係者は、それぞれに自分たちの温泉地の特徴が何であり、都市型温泉施設にはない固有の魅力が何であるのかを再認識し、それをさまざまなチャンネルとメディアを通して積極的にアピールすることが求められている。大規模な都市型温泉施設の相次ぐ登場は、このことの重要性を改めて示唆したものと受け止める必要がある。

#### 注・参考文献

- 1) 倉橋滋樹（2004）：「少女歌劇の花咲き乱れ」。日本経済新聞（2004年4月16日号）
- 2) 諸説があるが、ここでは（財）日本交通公社編（1984）『現代観光用語事典』での記述を参考にした。
- 3) 同施設の経営者の説明による。
- 4) 2003年12月までの状況。ヒアリング調査は2003年12月19～25日の期間に実施した。
- 5) 社会経済生産性本部編（2004）：『レジャー白書2004』同本部、116頁。

# 温泉の現地観察会の実施とその意義

## Excursion in Spa and its Significance

古田 靖志\*  
Yasushi FURUTA

キーワード：博物館 (museum)・温泉の教育活動 (educational activity in spa)  
現地観察会 (outdoor observation)

### 1 はじめに

日本には多くの温泉が存在するが、動力ポンプによる源泉の揚湯、源泉から離れた場所への引湯、源泉の集中管理などにより、温泉利用者<sup>1)</sup>が源泉の湧出を目の当たりにできるような温泉地や温泉施設は極めて少ない状況にある。せいぜい火山地帯にみられる“地獄”と呼ばれる温泉湧出地帯や、草津温泉の湯畑や湯村温泉の荒湯のように、大規模源泉が温泉地のシンボルとして存在するような場所、または法師温泉や蔦温泉などのように浴槽の底から源泉が直に湧き出しているような場所に限られている。

自然湧出源泉を目の当たりにすることができるごく限られた温泉地以外では、温泉利用者が出会うことのできる“温泉”は“浴槽の中のお湯”に限定される。それでは、温泉が湧き出してから浴槽内に蓄えられるまでの一連の過程が見えないばかりか、湧き出したばかりの源泉はもとより、源泉や源泉付近にみられる温泉固有の自然事象を見つめる機会も逸してしまうことになる。そこで、「温泉とは何か」といった自然科学的な見極めがかなり困難になっている。さらには、浴槽内のお湯が源泉からどのように変化しているか（人為に起因するものも含む）といったことを見極めることも容易ではなくなる。

古田 (2003) が全国の 400 人を対象に行っ

た温泉の認識に関するアンケート調査の結果では、温泉湧出の原理に関わる内容、温泉固有の自然事象に関わる内容、泉質に関する内容、温泉の利用に関する内容、掲示が義務づけられている「温泉の成分、禁忌症及び入浴上の注意事項掲示証」に使われている用語に関する内容などは、いずれも被験者の理解度が低く、温泉利用者に自然事象としての温泉の姿や温泉利用の現状が正しく認識されていないことが明らかにされた。

近年、温泉ブームの陰で温泉利用に関する様々な問題が表面化しているが、温泉利用者が温泉に関する正しい知識を身につけ、温泉を取り巻く状況を的確に見極める能力を持ち合わせることであれば、こうした問題の解決につながるのではないかと考えられる。その具体的な方途としての「温泉の教育普及的なアプローチ」の必要性がクローズアップされよう。

ところが、効果的かつ効率的な教育普及活動が期待できる学校教育の場では、温泉そのものの理解に関する内容が扱われないばかりか、温泉を理解するために必要な学習内容が現行の学習指導要領への移行時に大きく削減され (古田, 2001)、温泉の教育普及という面ではむしろ衰退している状況にある。また、社会教育の場などでは、様々なテーマでの講座や講演会が開催されているものの、温泉を

\* 岐阜県博物館 (Gifu Prefectural Museum)

テーマにしたものは学会関連事業の公開講座としての位置づけのものや温泉関係者向けの講習会として位置づけられたものなどに限られる傾向にあり、一般の温泉利用者の聴講チャンスは決して多いとはいえない。書籍等についてみれば、温泉現象や泉質などについて平易に解説している温泉の普及書は少なく、温泉利用者が書店の店頭でそのような良書と出くわして、手にするチャンスも多くはないと考えられる。

筆者が勤務する岐阜県博物館では、このような状況を鑑み、関心の高い自然事象のひとつであるにも関わらず正しい認識がなされていない「温泉」について、岩石や化石などと共に地学分野における教育普及の対象テーマとして取り上げ、講演会や特別展、現地観察会などの教育普及活動を位置づけてきた。このうち、温泉をテーマとした講演会や特別展の開催については、すでに古田（2002）がその概要を報告している。本稿では、特に温泉の現地観察会（以下、温泉現地観察会と呼ぶ）について、その概要や成果について報告するとともに、今後、各地の温泉地において、このような試みがなされるための活動モデルとして提示できればと考えた。

## 2 温泉現地観察会のねらいと取り上げたい内容

### (1) 温泉現地観察会のねらい

温泉現地観察会とは、実際に温泉地を訪れて様々な温泉現象（泉源の形態、源泉の性質、温泉華の形成状況、温泉生物の生息状況など）や温泉活用の状況（泉源から浴槽までの温泉水の一連の流れのシステム、浴槽内での衛生管理など）、温泉地の歴史や文化（旅館などの歴史的建造物・温泉街の町並・共同浴場・湯治場文化・温泉地の特産品など）を目の当たりにしながら体験的に学ぶ温泉の普及活動である。温泉に関する個々の要素を学べるばかりでなく、「温泉地」というひとつのユニットの中で、温泉の有り様を見つめることができる機会でもある。

このような観察会において、温泉現象や温泉活用の状況、温泉地の歴史や文化などを詳しく観察することにより、温泉の自然科学的な理解を深めるとともに、温泉地が有する歴史・文化とあわせて、温泉活用の現状の正しい認識を深めることがねらいである。

### (2) 温泉現地観察会で取り上げたい内容

上述のねらいを達成して、温泉の教育普及活動としての成果を得るために想定される観察内容を表1に示した。

表1 温泉現地観察会で取り上げたい内容

A 温泉現象	B 温泉活用の現状	C 温泉地の歴史・文化
①泉源 a 泉源の形態や状況 例) 自噴泉（間欠泉・噴泉・噴気孔などを含む）、動力揚湯泉	①泉源 a 泉源の場所と施設 例) 泉源位置・泉源やぐら b 掘削や動力揚湯の状況	①温泉街 a 温泉街の立地環境 例) 国立公園内、観光地内 b 温泉街の特徴 例) シンボリックな泉源や共同浴場・歴史的建造物群・階段や石畳や広場を基調とした温泉街
②源泉 a 源泉の知覚的特徴や泉質名 例) 色・味・臭い・触感・浮遊物	②引湯 a 引湯の状況 例) 配湯・引湯パイプ・引湯距離	②温泉地文化 a 温泉文化の継承 例) 外湯の習慣・湯治場文化
③温泉華 a 温泉華の種類 例) 石灰華・珪華・褐鉄華・硫酸塩華 b 温泉華の生成形態 例) “湯の花”・スケール・沈殿物・石灰華ドーム・噴湯丘・噴泉塔	③集中管理システム a 集中管理のしくみと施設 例) 集湯タンク・配管図	③温泉地名物 例) 入浴用湯の華・炭酸煎餅 温泉たまご
④温泉生物 例) バイオマット・温泉環境適応生物	④浴槽管理 a 循環設備や衛生管理 ⑤温泉の利用 例) 道路や屋根の融雪・足湯・ティラピアやスッポンの養殖	

(注) 筆者作成。

表1に示した内容の観察に加え、せっかく温泉地での観察会であるので、最後に参加者みんなで温泉に入浴し、温泉の湯を体感しながら参加者で温泉について和気あいあいと交流し合う場も設定する。

### 3 温泉現地観察会の実施

#### (1) 温泉現地観察会を行う温泉地の選定

温泉現地観察会は、岐阜県博物館が行う博物館講座の一環として位置づけている。参

加者は現地集合のため、岐阜県内の温泉地のうち現地へのアクセス上不都合な温泉地を除き、できる限り表1の内容が観察できる条件の整った温泉地の選定を試みた。2002(平成14)年度は下呂市小坂町の湯屋温泉および下島温泉を、2003年度は吉城郡上宝村の平湯温泉を、また平成2004年度(10月に実施予定)の温泉地としては、下呂市の下呂温泉を選定した。その観察可能な内容は、表2のようである。

表2 温泉現地観察会に選定された温泉地での観察可能な内容

湯屋・下島温泉 (2002年度)	平湯温泉 (2003年度)	下呂温泉 (2004年度予定)
主に「A温泉現象」「B温泉活用の現状」の観察を重視した選択	主に「A温泉現象」の観察を重視した選択	主に「B温泉活用の現状」「温泉地の歴史・文化」の観察を重視した選択
A-①-a	A-①-a	A-②-a
A-②-a	A-②-a	B-①-a
A-③-a	A-③-a	B-②-a
A-③-b	A-③-b	B-③-a
B-①-a	A-④	B-④-a
B-①-b	B-①-a	B-⑤
B-②-a	B-②-a	C-①-b
C-①-a	B-⑤	C-②-a
	C-①-a	
	C-②-a	
	C-③	

(注) 筆者作成。表中の記号は表1の記号に対応。

#### (2) 下島・湯屋温泉における観察会 (2002年5月および11月実施)

##### ① 温泉地の概要

岐阜県下呂市小坂町には湯屋温泉・下島温泉・濁河温泉の3つの温泉地があり、小坂温泉郷と呼ばれている。このうち、特に下島温泉と湯屋温泉は古くから胃腸病に効く湯治場として知られ、各旅館には飲泉所があり、飲泉がさかんに行われている(飲泉許可県内第1号)。両温泉地は含二酸化炭素-ナトリウム-塩化物泉の源泉は遊離二酸化炭素の含有量が非常に多く、昔から地元では「サイダー泉」として親しまれている。この源泉を利用

した温泉粥は、ご当地の名物となっている。源泉に含まれる鉄(II)イオンの劣化によって、浴槽の湯は茶褐色を呈する。両温泉地ともに、環境省の定める国民保養温泉地に指定されている。

下島温泉は5本の源泉から毎分491リットルの源泉が湧出している。泉質は、含二酸化炭素-ナトリウム-塩化物泉およびナトリウム-炭酸水素塩・塩化物泉、湯屋温泉は含二酸化炭素-ナトリウム-塩化物泉で、泉温はいずれも25℃未満の冷鉱泉である。日帰り温泉施設のために、新しく大深度掘削をして得られた源泉は間欠泉である。炭酸カルシ

ウムのスケールを発生させ、泉源付近には木の葉を取り込んだ石灰華を形成している。

湯屋温泉には9本の泉源があり、源泉はいずれも25℃以下の冷鉱泉で、泉質は含二酸化炭素-ナトリウム-塩化物泉である。温泉地全体の湧出量は毎分136リットルとや

や少な目である。数件の旅館が静かな温泉街を形成している。

## ② 観察の対象

下島温泉および湯屋温泉における温泉現地観察会の観察対象を表3に示す。

表3 下島温泉および湯屋温泉での観察対象

A 温泉現象	B 温泉活用の現状	C 温泉地の歴史・文化
A-①-a ・「ひめしゃがの湯」の間欠泉泉源の様子（湧出音で観察）	B-①-a ・「ひめしゃがの湯」の泉源の場所と施設の確認	C-①-a ・国民保養温泉地としての温泉地の環境の観察
A-②-a ・含二酸化炭素の飲泉体験 ・ナトリウム-炭酸水素塩・塩化物泉の観察と入浴体験 ・含鉄泉の色の変化の観察	B-①-a ・大深度掘削によるボーリングコア観察 B-②-a ・泉源から「ひめしゃがの湯」までの引湯パイプと引湯経路の観察	C-③ ・温泉粥の試食（希望者）
A-③-a ・リムストーン状のスケールの観察		
A-③-b ・木の葉を含む石灰華とその産状の観察 ・石灰華の採集		

(注) 筆者作成。表中の記号は表1の記号に対応。

## ③ 観察会の実施

博物館講座として、5月の他、11月にも県教育委員会の主催で下島温泉および湯屋温泉における温泉現地観察会を行った。いずれも同様の内容（所要時間約2時間）で、湯屋温泉飲泉所→下島温泉「ひめしゃがの湯」の泉源付近→「ひめしゃがの湯」周辺というコースで、表3に示したような内容の観察を行った。

二度の観察会は、いずれも定員いっぱいの参加があり、温泉への関心の高さを伺うことができた。これまで、温泉の泉源や石灰華などの温泉固有の自然をじっくり見たことのない参加者がほとんどで、温泉を違った視点から見つめることができ、温泉の理解が深まったと好評であった。さらに、飲泉体験や解説を聞きながらの楽しい入浴体験も好評であっ

た。このような博物館行事を、来年度もぜひ継続してほしいとの声もあがった。

## (3) 平湯温泉における観察会（2003年10月実施）

### ① 温泉地の概要

平湯温泉は奥飛騨と信州を結ぶ安房トンネルの岐阜県側入り口付近に存在する温泉地で、古くから保養地として栄えてきた。温泉街はすべて国立公園内という絶好の自然環境に立地し、環境省の国民保養温泉地に指定されている。

焼岳を熱源とする火山性の温泉で、50以上の泉源の多くが高温泉を湧出し、その数は県内屈指である。主な泉質はナトリウム-炭酸水素塩・塩化物泉、ナトリウム-塩化物・炭酸水素塩泉などで、やや緑褐色の濁りを呈

している。近年オープンした「ひらゆの森」では、県内では珍しい白濁した硫黄泉の源泉が湧出している。

温泉街のいたる所に源泉があり、源泉付近には温泉沈殿物が見られる。また、源泉が注

がれるような場所には、ごく普通に色とりどりのバイオマットが認められる。

### ② 観察の対象

平湯温泉における温泉現地観察会の観察対象を表4に示す。

表4 平湯温泉での観察対象

A 温泉現象	B 温泉活用の現状	C 温泉地の歴史・文化
A-①-a ・「つるの湯」の自噴泉の観察 A-②-a ・ナトリウム-炭酸水素塩・塩化物泉の観察と飲泉および入浴体験 A-③-a ・源泉付近の石灰華の観察 A-③-b ・木の葉を含む石灰華とその産状の観察 ・石灰華の採集 A-④ ・バイオマットや自然繁殖したティラピアの観察	B-①-a ・温泉街の中の源泉めぐりと源泉の施設の見学 B-②-a ・各源泉から各旅館までの引湯パイプと引湯経路の観察 B-⑤ ・温泉を利用した道路や屋根の融雪施設の見学 ・足湯の見学および体験 ・温泉を利用したスッポンの養殖の見学（希望者）	C-①-a ・国立公園内の国民保養温泉地としての温泉地の環境の観察 C-②-a ・平湯ビジターセンターの見学 C-③ ・入浴用湯の華の観察 ・温泉たまごができるしくみの観察 ・温泉たまごの試食（希望者）

(注) 筆者作成。表中の記号は表1の記号に対応。

### ③ 観察会の実施

実施にあたっては、平湯温泉協会（内方文男会長）の協力を得ることができ、駐車場の手配や施設利用の便宜を図って頂いた。また、同協会の沖本憲嗣氏に現地案内の講師役を務めていただくことができ、地元の人ならではの興味深い説明に関心が集まった。

所要時間2時間で、平湯足湯広場→つるや商店前→平湯館の飲泉所→湯平の湯源泉→つるの湯源泉→平湯の湯→ナガセスッポン（希望者）というコースで、表4に示したような内容の観察を行った。奥飛騨温泉郷での現地集合にもかかわらず、ほぼ定員いっぱいの参加者があり、前年の観察会にも参加したリピーターの参加が目立った。

平湯温泉の観察会では、普段めったにみることができない様々な温泉現象を観察するこ

とができ、温泉の違う一面を理解できたと大変好評であった。

### (4) 下呂温泉の現地観察会（2004年10月実施予定）

10月に下呂温泉において地元の川上裕惟氏（下呂温泉株式会社社長、下呂温泉博物館館長）にも講師をお願いし、温泉現地観察会会長予定している。湧出した源泉は集中管理システムによって管理されているため、温泉現象の直接観察には不向きではあるが、今日的な温泉利用の現状や温泉の歴史文化を観察するには適した温泉地であると考えられる。また、2004年4月にオープンした下呂温泉博物館の見学も予定しており、数々の温泉資料によって温泉の自然科学的な側面や文化的な側面を理解することができる。

表5 下呂温泉での観察対象

A 温泉現象	B 温泉活用の現状	C 温泉地の歴史・文化
A-①-a ・アルカリ性単純温泉の観察と足湯や入浴体験	B-①-a ・飛騨川の川原の泉源めぐり B-②-a ・各泉源から各旅館までの引湯パイプと引湯経路の観察 B-③-a ・集中管理システムの観察	C-①-b ・共同浴場、温泉寺のある温泉街の見学 C-②-a ・下呂発温泉博物館の見学

(注) 筆者作成。表中の記号は表1の記号に対応。

#### 4 まとめ

今回は、温泉の教育普及を意図して行う温泉現地観察会において、「観察対象として取り上げたい内容」を表1に例示するとともに、この観点に基づいて行った小坂温泉郷と平湯温泉の2カ所での温泉現地観察会の実施例、および下呂温泉での観察会の計画をモデルケースとして紹介した。

小坂温泉郷と平湯温泉における観察会参加者は、いずれも高い関心のもとで、これまで全く認識していなかった温泉の一面について理解を深めることができた。また、観察会に同行された地元温泉協会などの人々も、「こうした観察会は自分たちの温泉地の魅力づくりや活性化にもつながるもので、できれば定期的にミニ観察会のようなものを地元で行っていきたい」と感想を述べられた。このように、評判は上々であり、温泉の教育普及活動としての成果を実感するにとどまらず、温泉地の活性化への一方途としての役割をも垣間見ることができた。

全国のさまざまな温泉地についても、表1の観点から温泉地を見つめてみると、それぞれの温泉地で何が観察できるのかを明確にすることができる。そのため、講師の確保さえ

できれば、温泉の教育普及を意図した温泉観察会を容易に開催することが可能である。同時に、自分たちの温泉地の魅力の再発見にもつながる可能性が高く、温泉地の活性化への意図も交えて、今回の実施例をモデルケースとして、多くの温泉地においても同様の観察会を試みられることを提唱したい。

本稿の骨子は、日本温泉地域学会第2回研究発表大会（2003年11月6日、於東鳴子温泉）で発表した。

#### 注・参考文献

- 1) ここでいう温泉利用者とは、入浴などで温泉施設を利用する人を指す。
- 2) 古田靖志 (2003) : 「温泉利用者に温泉はどのように理解されているか」第56回日本温泉科学会大会要旨集、190～195頁。
- 3) 古田靖志 (2003) : 「温泉の普及を意図した温泉観察会の試みー温泉地で温泉固有の自然を見つめる」日本温泉地域学会第2回研究発表大会発表要旨集、3～4頁。
- 4) 古田靖志 (2001) : 「温泉という一視点からみた理科教育」日本理科教育学会49回東海支部大会研究発表要項集。
- 5) 古田靖志 (2002) : 「博物館が行う温泉の教育普及活動」第55回日本温泉科学会要旨集、16頁。

## 基調講演

### 温泉地域づくりのあり方—花咲くよりも根を肥やせ—

中谷健太郎（由布院温泉亀の井別荘社長）

#### 司会（寺田徹）

中谷健太郎先生は、あらためてご紹介するまでもなく、皆様よくご存知の方なのですが、今日の由布院温泉の発展のため、地域のリーダーのおひとりとして、ご尽力された方でございます。今日は、「温泉地域づくりのあり方—花咲くよりも根を肥やせ—」という演題で、中谷先生よりご講演を賜ります。それでは、先生よろしくお願い致します。

#### 中谷健太郎

昨日から一緒にお酒を飲ませて頂きまして、日本温泉地域学会らしいスタートでしたが、由布院を選んで頂きまして、ありがとうございます。何を着て来ようかと考えたのですが、昔、由布院の会議の中で、県庁に来ていける仕事着はなかるうかというテーマで、4、5年頑張ったことがあります。その時生まれたのが、この服です。県庁に着て行けるかどうか問題なのですが、仕事着としては大変楽です。能書きを言えば、その辺の草で、こういう着物を作ったのですね。これはラミー、チョマのたぐい、麻のたぐいで作った服です。着れば着るほどヨレヨレになるので、ヨレヨレを良いと思わなければ1日でも着ておれない服なのですが、こういうものが由布院で人様をお迎えする時には、正しい服ではないかなど、アルマーニもあるのですが、着ないで参りました。

13時10分から30分、つまり40分までということで、1分立ちました。馬鹿なことを言っていると、時間がどんどんたちます。ちょっとほっとしたのは、由布院からの発信というふうに、確かそのへんに題がなっていると思います。由布院に学ぶ、と言われると

困ったなと思って、由布院にそう簡単に学ばないで下さい、というテーマでしゃべろうと思っていたのですが、それをしゃべれば3時間になりますので、単なる発信にして頂いて、本当にありがとうございます。

こうやって、今日皆さんをお迎えしましたが、そのあたりにずっと由布院の仲間たちが集まって来てくれております。早起きをしない人も、頑張ってきて来てくれています。こうやって、よその人の間に僕らの仲間が入ると、俄然別の空間になります。そこで、ちょっとワクワクしております。だいたい、顔をもう見飽きた連中ですから、同じ仲間だけでつるんでいると、しょうも無いことを言って、気分がだらけてくるのですが、こうやって皆さんの間に入りますと、一段と由布院の仲間もすっきりした顔付きになっておりますので、そういったことに、温泉観光の地域活性の根っ子があるような気がします。

それから、私は話がどこにいか分からないような癖がありまして、私が話をすると大体最後にだらだらとなって、「分かりましたか」と言うと、「分かりません」ということになるので、私は、非常に絶望しまして、「分からなければ、玉の湯の薫平さんとこ行って、聞いてください」と言うと、薫平さんとこ行って、「あ、帰りによって分かりました」となる…。つまり、私が何を言わんとしてきたのか、薫平さんが整理して、私よりはるかにきちんとしゃべると言う、そういう伝統を持って20年やってきております。でも、今日はどういう訳か薫平さんがそっちに座っているんで、薫平さんに聞いてくれという訳にはいかないんで、私が何かつとめなきゃいけないのですが、もう3分経ちました。



それですね。私の話よりいくらか良いのは、この原稿に書いた活字ですね。やっぱり一生懸命考えて、いらんとこを抜けますから…。しゃべるより活字が良いので、本日は、本でいいますと、大目次大会とお考え頂いて、30分で読めるとなると目次しかないですよ。目次だけ読みますから、あと、この本を面白そうだと思いますら、どうぞ、泊りがけでいらして下さい。お風呂上りで、焼酎を飲めば、全巻が読める、そういうしきたりになっております。

で、この会場は国の施設でした。国の施設だったのですが、皆さんご存知のように厚生省関係や色んな所、中小企業系なども混じってのことでしたけれども、まあ国も、基本を絞ると言う時に、僕らの仲間がこれを引き受けて、民間に移ったその設備です。で、夕べ、ここにお泊りの方があったかどうか知りませんが、大きな温泉が出来ております。その大きな温泉は、由布院の中の盆地あっちこちに大きな温泉、パブリックな温泉をつくって行こう、その温泉から温泉をたどって、ずっと散策しますと言うと、保養のための訓練を兼ねる、そういう一角にしよう、盆地からかなり遠いこの土地に、国にお願いして大きな温泉をつくってもらいました。ですから、温泉をつくってもらう時に、唯一つけた条件が、泊まらない方、つまり外部からも入れるような、そういう仕組みにして欲しいと、そういうことを申し入れた訳です。そういうところに、皆さんにお泊り頂きました。

あと、パラパラ予告編を申し上げます。これはね、月刊観光に出たものですが、僕だけじゃなくて、観光協会長の志手淑子さんのも載っています。この頭に、「仲間から皆へ、由布院観光が走る」と書いてあるのですが、これは最初に私どもが申し上げたように、仲間とだけ手を組んで町をつくる、あるいは温泉にいらして下さいお客様とだけ手を組んでいくというだけの生き方が、一番ネックに

なっているのではないかと。どうも仲間から皆へという風に、僕らの考えをどう切り替えていくのがいいのかが、問われている。それが一番村の中で得意なのが、観光業者じゃないか思います。まず、観光業者が、自分達の仲間という意識から仲間を超えて、皆へというふうに意識が変わっていく、そういう場をつくる、自らが立っていくために、どうしたらよいかを、ゴジャゴジャと書きました。これは、優秀観光地づくり賞という運輸大臣賞を頂いた時の記念のペーパーですけど。

次に書いたのが、騎兵隊に囲まれたアパッチ村。賞を頂くとすることは、他の町が相当ひどい状態になっているのではないかと。私には、この町の由布院温泉が騎兵隊に囲まれたアパッチ村に見える。ジョン・フォード監督のアパッチ砦は、北米軍の騎兵隊が勇敢なアパッチ軍に襲われる映画ですが、わが由布院温泉では、それが逆転している。ネイティブの由布院族と、つまり私達ですが、強力な資本系の勢力に襲われているのです。それならば、由布院を訪れるお客様は、資本系勢力の軍人、軍隊なのか、むしろそんなことはありません。由布院に限らず、世に観光客と呼ばれる方々は、資本系が疾走する競争社会の方で、それを逃れて、生命系がゆらゆらとただよう社会へ移動してくるのです。その人たちをお迎えするために、わが由布院温泉は生命系の町であり続けようと戦っているのです。

で、誠に世界は資本系の勢力に満ち満ちており、私達の戦いは、いまや親から子へ、子から孫へと、長期戦の様相を呈してきております。これが基本的に私は現在感じていることです。危機感であると同時に勇気凛々、2幕3幕お楽しみにということでもあります。つまり生命系のものが町をつくり、生命系の町をつくり続けることで、資本系の競争社会から逃れてくる人は必ず増えてくる。その人たちのために、ここの空間が切り取られてしまっていて、生命系の町がいつの間に資本系に変

わってしまうことが、いま一番厄介なことです。あと、いろいろいっぱい書いてありますが、省略します。

マーケットをつくらないと。例えば、由布院、いま380万位の人がいらしておりますが、観光の年商額は200億程度、波及効果を入れると300億を軽く超えると試算されております。それで農業生産が最頂目でみて16億、悪くても14億、この数字は私が40年前に帰って来た時に比べますと、観光はちょうど倍、約100億弱だったのが、ほとんど200億です。それから農業が28億でしたから、もうほとんど半分です。一方が半分になって、一方は倍になったのです。それでいて、町は増えないといって、今度は他所の町と合併する訳です。しないと予算が詰められるという状況の中で、外から資本が、どんどん入ってきたのです。自由主義を謳歌しています。

いまや町の中は入ってくるな、資本よ入ってくるな、というような非常に消極的な方向に向かっています。入ってくるなという向こうに何が見えるかという、ジリ貧しか見えない。だから、入ってくるなということではなく、ソ連のような妙な社会主義でも、中国のような社会主義でも、総理や首相が飛行機に乗ってまで、「どうぞ資本よ、うちに来てくれ」というようにふるまって資本を集める世界情勢の中で、「由布院だけは来てくれるな」というので、これから先、消極的なことで環境を守っていけるのか、クエッション・マークが付きます。

だからいま、まず出来るのは、簡単にブレーキさえかければ、アパッチ状況が止まるか、そうではない。足りないのは、ブレーキが足りないのではなく、ハンドルが足りない。ハンドルではっきりこっちへ行こう、次はこっちだというふうに、きっちりとハンドルを明確にすれば、ブレーキと同時にアクセルをかけられますから。一方でブレーキを踏みながら、一方でアクセルを踏んでいくとい

う、まあ、生きていてやりがいのある状況にあると思います。こんなことをここでは言いたくて、いろいろと書いています。

ということで、目次は終わります。次に入ります。あとほど、良い原稿が出てきますので、お楽しみに。昨日、ちらっと風景の話がでたので、風景の話をします。人はここに住んでいる。ここにぶらりと住んでいるのではなく、さまざまな命に結ばれて住んでいる。鯨が海、ミミズが土に結ばれているように、人も地球の個々にしっかりと結ばれている。時に個々の亜流に手を加えて、一気に変えてしまったりする人もいるが、それは命の結び目を変えていることであるから、個々全体の生き物のバランスを壊すことなく、お互いにバランスをとり結びあって生きているものたちにとって、バランスの崩壊は深い不安感をまくに間違いない。風景の話はここから始まる、といろいろ書いてあります。僕は学問をやっていませんので、感覚的に風景という文字という言葉だけからしか、風景は考えられない。

風景は景観とは違う。景観は単に見える景色であるけれども、風景は風の景色です。空気が動くさまを風と言い、動かない時は風と言わない。動きこそが風の本性である。他所から吹いて来た風が個々の土や水の温度を整え、木や草を奮い立たせ、新しい生気をくんで、また他所に吹いていく。後に命の結び目がみずみずしく立ち上って来る。その結び目の文様ははつらつとして、しかも整っている。それが風景である。風が土地のさまざまな命をしっかりと結んで、みずみずしく見せるから、風の景色は命の景色になる。命もまた、動きが本性であり、風の景色と命の景色はピッタリとかさなる。風景に責任を持つ町でありたいと思って30数年がたちました。命に責任を持つ町でありたかったからです。その一点で、福祉も医療も農業も観光も商業も教育も、何もかもが一つになりました。命が喜ぶ風景を作ることが町づくり仲間の願い

であるとすれば、あなたも間違いなく、仲間の1人です。云々、云々、以下略…。

テーマは、一風二音三光です。一が風、二が音、三が光。あとは省略します。

あとはね…。普通のことを書いたのが、月刊ホテル旅館なのですが、新しい道筋が見え始めて3回目の正月を迎えました。今年もその形は変わらない。3年変わらなければ本物でしょう。滞在型保養温泉時代の到来です。2泊ないし3泊のお客様が増えてきました。これがですね、なかなか説明してもうまく通じない。とんでもないことが、いまゆっくりとおこっています。目から鱗の世界であると同時に、当たり前の世界でもあります。それがまるで凍りついたガラスに温泉をかけたように、ゆらゆらと目の前に立ち現れて、見えてきました。

30数年前仲間と3人でドイツの保養温泉に滞在した時のことを云々、云々ということがありまして、2泊3泊というゆっくりとした滞在の町をつくるのが唯一の住んでいる人と外から来る人と共通の場と結ぶ可能性があります。これをやらないと、1泊して帰ることと、もうわしらは関係なくここで頑張っている人と結ぶ結び目がなくなってしまうから、働いている僕ら自身、観光業者自身も「えーいらっしやいませ」と翌日は「さようなら」、また「今日はまたいらっしやいませ」、翌日「さようなら」では、魂の拠り所を失うのですね。

そういう生き方をしたくない、と思ったのが30数年前です。いまやっと少し由布院の手がやっと届くかな、届かないかなというあたりをうろちょろしているのが、2泊、3泊のお客様の移動です。わずかに2泊、3泊です。ヨーロッパのドイツやハンガリーといったところのように2週間か3週間にはほど遠い。程遠いけれども、実際に私たちが商売でやっていますと、程遠い中で、状況は激変しますね。第一、板場がご馳走をどうだと威張って、ご馳走を出せなくなる。そうすると、勘弁し

てよ、一晩ならご馳走は良いけれど、二晩もやられたら、勘弁してくれとなります。

部屋が上等ということは、これも困るのです。もう部屋上等の中に鍵をかけられた状況になって、入ってからもうたまらんです。下駄はいてさっさと外に出るというのは、ごく自然の動向となっています。散策、町の中を歩くということは、JTBの原さんがおっしゃっていた時速4kmの町づくりみたいなものです。何のことはない。3泊、4泊と言うことがはっきりした目的になれば、必ず歩く町っていうのはついてくる。はっきり、目的にしていらないですね。

長い間、何となく滞在、泊食分離てなことを言っていたのですが、本当に自分ところの例えれば泊まりの玄関を小さくして、裏から大きな玄関つけて、実際中を全部フリーにして、風呂もここみたいに、大きな風呂があるのに、これは他の人が入るんだというふうには、本当にふん切れたのかどうかは、非常にあやしい。いままでは大きく変わっております。サービスもどんどん変わっています。着物を着て入り口で、「いらっしやいませ」と座るのは、4泊も5泊もして、いまリピーターは60%位いますが、リピーターの人たちにとってみれば、ビックリします。「いらっしやいませ」と座っているなんて、それよりの立った方が、なんか握手でもして、気の利いたワンピースでも着ていた方がはるかによい。どんどん、変わっています。

32分、あと8分です。これは中々良いのですね。由布院温泉の冒険。これは地域文化に書いたものです。これは僕が今日読んでるのは、河合隼雄という文化庁の長官をやっておられる方ですが、あの人は、下書きをご自分で書かないですね。偉い人ですから、色んなところで挨拶をします。職員が書いたのを読むのですが、読むのが芸だと決めているのですね。中身はいいのです。読む芸でお伝えしたいのですが、ちょっと河合先生ほどうまくいかないのです、ご勘弁してください。

由布院温泉の貢献、ただ今の由布院は今年も賑わっています。日曜や祭日には観光客が町にあふれ、新しい土産品通りを車が押し開いて通る。一步はずれば、実りの田んぼを風が吹き抜け、村人の取り入れ作業もはじまっているが、そこには温泉観光のさんざめく色合いがじんわりとしみこんでいるのです。人口1万2,000人の盆地の町に、年間390万の観光客が訪れ、その内の100万人が泊まっていられる。云々、云々。いっぱいありますが、昭和37年の頃とか、大正13年の頃とかがあって、大正13年の頃、設備の落差に打ちのめされました。これはその前にです、あちこちの先進温泉地は、とっくの昔にバス・トイレ、パー、エレベータ、大浴場、大宴会場、送迎バスまで取り揃えて、全力疾走を始めていた。その落差は、私たちが打ちのめしたけれど、そこから始めることになった私の旅館人生は、先達温泉地が築いてこられた完全装備という名の設備投資をまるで、氷の彫刻を溶かすようにこともなく、動かしていった時間であったかも知れない。

というのを受けて、設備の落差に打ちのめされていた私たちが立ち上がって、朝焼けの方向を目指したのは、由布院温泉発展策に出会った時からです。大正13年林学博士ドクトル本多静六先生講話と題されたその冊子は、初めてきく保養公園としての温泉地のイメージがしっかりと、ほとんど絵地図のような細やかさで提言されていました。

博士の大正13年という時代に仰天し、保養温泉という奇妙な軸に戸惑いながら、ドイツのパーデンをめざせという博士の指示にしたがって、走り始めたのでした。調査、聞き取り、勉強の時間をすごし、旅費を積みたてる年月を越えて、私たちは研修に旅立ったのは昭和46年の初夏の日、ジープのお尻に1日に5ドルの旅の英語版を突っ込んでのことでした。と言うふうに、じゃかじゃか書いてあります。

そうですね、えーと新しい話題はというと、

滞在型の保養温泉村という村の形がようやく定まったことです。新しい変化が由布院温泉に起きています。泊食分離の傾向をうけて、料理が変わり始めました。ずらりと並べて、贅を競うことが光を失い、新鮮でほどよい風情の献立が輝きを増している。望まれない類の応接はしない。新しく時間流しの技が登場している。退屈な時間をゆったりとした新しい応接の技である。1泊2食の枠を超えて、あふれ出る企画の展開は、実地でご体験を願うほかはありません。そこに、歓楽とは異なる新しい暮らしの観光を発見なさるでしょう。

最後に、山積みの問題。現地研修の結果、見えてくる問題はきっと山積みで、商店街には、人と車がみだれあふれ、店には土地柄と無縁の商品が占め、観光の売り上げが年間200億円を越える勢いの中で、農業の総生産が14億円で留まったままなのです。ゴミや下水は能力いっぱい抑えこまれ、老人、子供の福祉、医療、教育、文化、交際までもが破綻へ向かって、うごめいています。由布院を見るなら、そのそのままで見きって欲しい。そして、どうかそれぞれの地に新しい温泉地をつくって欲しい。山積みの問題をしっかりとふまえて、私たちは新しい温泉地づくりに取り組んでいきたい。何を望んでいるか、これが勝負を決める。これが地域づくりの中身だと思います。というところで、あと3分になりました。

これで終わります。それです、ようこそ、本当にいらっしやいました。山積みの問題を書いています、大体約30年、私たちが行ったのは35、6年前だったと思うのですが、帰ってきて何を言うとか、と皆から完全に無視されたのが滞在型保養温泉地づくりでした。5、6年後に大地震が来て、このままでは由布院が情報被害で潰れると言う状況で、それから、急に映画祭や音楽祭や辻馬車を走らしたり、絶叫大会を始めたり、あらゆることをやってきました。情報発信について、

その情報の中身が滞在型保養温泉地をすべて飲み込んでいましたので、30年たって、ちょうど今年が色んな催しの30周年になります。音楽祭30周年、音楽祭30周年、などなど。願わくは、湯布院町と言う自力でつくってきた町づくりの湯布院町の最後の30周年にならないで、続いていくことを、町村合併もめげないで、独自の生活感を見えているこの範囲で、カチンと手を組んでいける勢いが元になることを祈っております。以上で終わりますが、あと1分あります。何かありませんか。

### フロアー

私は詩人で、個人で参加しております。岩本でございます。あの、私もちょっと先生がいらした東宝系と関係があったのですが、サラリーマンをやっておりました。実は中谷さんの精神の根底の中に、何かこういう事業をやられる背景に、映画づくりと映画をつくる映画シーン、シーンマーケティングですか、そういうものがあったかかどうか。いわゆるいろいろな材料を使って、いろいろシナリオを書いて、結果として、由布院という名画が出来たのかな、というような見方をしたら、失礼でしょうか。

### 中谷

失礼どころか、飛び上がって、喜びますが、あの実はそういうことは無くて、ただ帰ってきたら、我がふるさとが寂しい町であって、必ずしも豊かでない小学生時代の友人がいっぱいいて、私の母や父が世話になったオジサンやオバサンたちも相変わらず、貧しいけど

もノンビリと生きている状況がありました。その人たちと一緒に、こうやって一緒に面白いというか、自分で出来ることをやる人がいて、その人が喜んでくれると嬉しいというのが、映画の基本ですよ。

とくに演出の方で言いますと、自分はカメラを回せないし、素晴らしいカメラ撮影してくれるカメラマンがいて、その人と一緒に組むと嬉しい。役者さんで、僕は役者が出来ないのですが、素晴らしい演技をしてくれる役者さんがいて、ぜんぜん僕とは違う人なんです。その人がやって感動して涙を浮かべてくれると僕はしゃにむに嬉しい。そういう自分に出来ないことをやってくれて、しかもその人が喜ぶのをみると、とても嬉しいと言う感覚は、まあ映画づくりと非常に似ていると思います。

それから帰ってきて、すぐに思ったのは、板場にあれ違うこれ違うと言うと、板場が怒りまして、包丁を畳の上につき刺して、帰って行った。その時のセリフが、「お前がおぎやおぎやとオシメをかえている時からオレは包丁を握っているのだ。馬鹿野郎」と言われたので、あ、これはもう撮影所そっくりだなと思って、私の撮影所の美術のジイ様に「てめえがおぎやおぎやと言っている頃から、オレはトンカチを握っている」ということを言われたことがあったので、それ以来、非常に親近感を持っております。(拍手)

### 司会

「中谷先生、大変に貴重なお話をありがとうございました」

## シンポジウム

### 温泉地の地域づくり－由布院温泉からの発信

コーディネーター：浜田真之（株式会社 地熱代表取締役）

パネリスト：志手淑子（由布院温泉観光協会会長）

〃：首藤勝次（長湯温泉大丸旅館社長）

〃：石川理夫（温泉評論家）

**【浜田】** 第2部のシンポジウムを始めさせていただきます。私は司会を勤めます株式会社地熱の浜田と申します。パネラーの方々を御紹介いたします。まず夢想園社長の志手淑子様でいらっしゃいます。そのお隣が、石川理夫さんです。温泉評論家で、日本国中のあちこちの温泉の的確な評論・評価を通じて、真の温泉とは何か、人間が癒しを求めるということに非常に造詣の深い方でございます。一番左の方が首藤さんです。長湯温泉の日本一の炭酸泉の仕掛け人と言ったら良いのでしょうか。地域おこしに非常な尽力をされて、今は大分県議会の議員でもあります。

早速ですが、志手様から10分くらい、自分たちの町づくりに関わるこれまでの出来事なり、考えなりをお聞かせいただけますでしょうか。

**【志手】** こんにちは。由布院温泉観光協会の会長をしております志手でございます。中谷さんが先ほど基調講演でおっしゃってましたが、由布院は40年近く模索して、今日があるわけですが、成功したこともあれば、失敗したこともあります。今もって努力している途上の観光地であると、私は思っております。

私は昭和36年（1961）、隣の別府市からお嫁に来ましたが、その頃の観光客は40万人で、今は400万人と言われてますから、交流人口が10倍くらいに伸びて、これは凄いなと思っています。

うちの旅館は高台にあって、前が真っ暗なものですから、それを湖と間違えたお客様が

おられました。朝起きたら田圃でね、びっくりして「私はここは湖だと思った」と。それくらい灯もないし、寂しい町だったのです。どうして、こんなところにお嫁に来たのだろうかと、友達もいないし本当に悲しかったですよね。でも、いろいろな試行錯誤の結果、今日こうして沢山のお客さんが見えて、沢山の問題を抱えているということにもなったわけですけど、私も寂しくて堪らなかつたけれど、同業者のお友達と付き合っているうちに、微かな希望が見えてきた。何とか此処で、この仕事で生きてみたいということが段々明確になってきたんですね。

夫たちは宣伝に行ったり、いろいろやっていたけれど、ちゃんとした方向性が決まったのは、昭和46年（1971）のヨーロッパ50日間の無銭旅行でした。一带どういったところが自分たちのお手本になるのか、日本国内にはその見本がなかなか見当たらないということでの決断でした。

それには、大正13年（1924）の本多静六先生の由布院温泉発展策という冊子が見つかって、その中にドイツのバーデン地方に学ぶべきである、由布院というところは地形から考えても、緑を大切に町全体が公園であるような観光地を目指すべきだ、そして木はどういった木を植えろとか、柿の木を植えろとか、金鱗湖はこのまま地域として保全しろとか、その方策が実に細かく書いてあったのです。

それを心に留めて、由布院に似通った緑の多い山間部のバーデン地方のバーデンワイ

ラーという観光地を見つけました。その市長さんにも会って、市長さんから「あなたたち、ほんの何年か先を考えてはいけない。観光地の計は百年先を考えなければいけない、いまあなたたちはその百年のほんの一步を踏み出したただけだ」ということを聞かされ、非常に感銘を受けました。

その時、今日ここにいらっしゃる中谷健太郎さん、溝口薫平さんと私の連れ合いの3人が行って、希望だけは本当に膨らみに膨らんで帰ってきた。私の連れ合いなんか、帰って来ましてから1ヵ月ほどまるで気がどうかなくなってしまったのではないかと思うくらいに何にもしなくて、毎日その時覚えたパイプを燻らせて由布院盆地を眺めて考えていたんですね。やっぱり、この町がどんな町になって欲しいか、あまりに外国から受けたショックが大きくて、そのことを色々考えていたんだろうな。あんなに夢中になって、一体何考えていたんだろうなと一寸聞いてみたい。彼、20年程前に天国に行ってしまったけれど、今彼が由布院を見たら、どんなことを思うかと。結局、由布院は滞在型の温泉観光地を目指すという、その時に学んだことがすっかり心の中に留め置かれたわけですね。以来30年間、この基本を崩さずに今日まで来ているということが、今日の由布院観光を作ったと思っております。

滞在型と一口に言いますがね、滞在型と言うことは、その町に魅力がないといけない。飽きちゃいますよね。私なんかよく観光地に行って、非常に立派な宿の中に喫茶店からお土産品店から、コールからすべて揃っている。1日はいいんですけど、2日も3日もとてもその中にいる気にならない。第1、町に出ても町は寂しくて何も無い。旅館以外何も無い。よくありますよね。そういうところに、本当にいる気にならない。やはり2日、3日いても、1週間いても、ずっとここにしようよと。そういう町になるためには、商店も元気でなくてはいけないし、緑が豊かに保

たれていなければいけない。何よりも、住んでいる人も生き生きしていることが、一番大事だと思うんですよ。そのためには、商業、農業、すべて産業がうまく繋ぎ合わさって、町が生き生きしているということだと思うんですね。

私たちは、宿屋ですから宿から出発して、何とか農産物を結びつきたい、商店を結びつきたいということで、微力を尽くして参りましたが、それは必ずしも上手くは行かなかったとは言えていない。それは、今日の由布院を見て頂ければ、よく分かると思います。

やはり、観光の人たちも、商売人も、作物を作る人も、何よりも行政の方が結び合わせに真剣になって頂く。農協は勿論ですけど。皆が自分たちの暮らしがどうあるのが本当に一番好いのか、真剣に考えて頂く。どこかにすがるといではなく、今、合併でも自主自立と言われますけれども、自立することを住んでいるひとり一人が考えていくべきだと。それが生きていくことの楽しさ、素晴らしさに繋がっていくと、そういう具合に思っているわけでございます。

**【浜田】**ありがとうございます。町づくりは、単に観光を旅館だけが担っていくことはできない。自分の仲間や、さらにその外にいる方とか、いろいろな地域の中の人々が上手く生きていける、そしてその中でその活気のある町を作っていく。自分だけ上手く行くという発想だと、回り回って駄目になってしまうのではないかと。1人は大勢のため、大勢は1人のためという発想で、それが結局由布院全体の町の押し上げになり、また40万人から400万の観光客を呼び込むような契機になったと、私はいま感じ取りました。

ただ、40万から400万になったことで、つまり逆に成功したがゆえの難しい問題が発生しているのだらうと思いますけれど、沢山の温泉地を見て来られた石川さん、何かコメントを頂けますでしょうか。

**【石川】**よく前から言ってきたのですが、

自分も1人の利用者の立場で温泉を考えた場合、非常に危惧を感じるんですね。日本人は温泉が好きだ好きだと言って、寄って集って、人気が出てくるとそこにワッと押し寄せる。黒川の方もお悩みだと思いますし、乳頭温泉郷でも、エージェントの方が乳頭を目玉にして来ることに對して、それを少しセーブしようという動きが出ている。人気のあるところはそのような形で、利用者による一種の温泉の大量消費という形が、あまりにも蔓延していて、結局温泉を育てているその土地自身を、温泉自体を日本人は見てこなかった。私たち利用者が軽視してきたのではないかという危惧がありました。

だから僭越ですけれど、温泉選びということをいつも提供する時に、温泉宿を選ぶ前に是非温泉地自身を選んでくださいと前から申し上げているんです。以前はきょとんとされて、やっぱり宿だろうと言うような反応が多かったんです。最近は大いぶさそうではなくて、温泉を守り育て、その土地で生まれた温泉地自身の総合的なものを見直そうではないかという動きが出ていると思います。

その中で、由布院から発信されたものを私たちがどう受け止めて、その中から参考になるものをどう抽出するのかなどと思います。由布院から我々が教訓化・一般化できるものは何かと考えますと、先ずコンセプトを明確にされたということが大きいと思います。お話にありましたように、由布院の場合の参考例というのは参考例であって、あくまでも由布院らしいものを作るということであつたと思います。由布院としての温泉保養地を作るといふ、はっきりとしたコンセプトを立てたことが大きいと思います。

その上で、次にあれこれの方策より前に、恐らく由布院の方たちは、温泉地づくりは人づくりだと、皆さまが言ってらっしゃることを明確にして、温泉地を作られていったことが非常に大きいと思います。

他の温泉地を見ても、個々の宿の方達は悩

んでいらっしゃるのですが、本当に共同でやるということがないんですね。よく私は、源泉自身は十湯十色とずっと言ってきたんですが、自分たちの持っている温泉は、みんな微妙に違うわけですね。温泉自身が固有に持っているものを、地元の方がどのように誇りに思うか、先ずよそ者の目で自分たちの温泉を評価できるかが、大きかったと思います。恐らく由布院も最初にリーダーになられた方達はそういうよそ者、外部の視点というのを二重の意味で持っていらっしゃって、自分たちの良さを再評価したんだろうと思います。

それから、あくまでも宿屋・温泉産業だけで自己完結せずに、地場の総合的な産業や生産活動とつなげていこうと、農村地帯というこの独自の中に由布院があるということを非常に意識していらっしゃった。これは、他の温泉地でも大いに参考になることではないかと思います。

その中で、先ほど中谷さんは風景という言葉をおっしゃって、自分たちならではの自然、成り立ち、風景を大事に守り育てようとしてきた。これがないと、どこに行っても金太郎飴の温泉地になってしまうと思いますので、その点も大事じゃないかなと思います。コンセプトをはっきりさせてリーダーを育て、人づくりに励む中で、上手に行政の方とのつかず離れず、上手にお互いの持ち場での施策づくりを大事にされてきたのだらうと思います。これまで行政依存型の温泉地が多かった中で、そうではないあり方、共存共栄型の温泉地を目指したのだと思っています。

もっと大きいのは、いま志手さんもおっしゃいましたように、昨日観光総合事務所などで案内頂いた米田さんの発言にもありましたが、自分たちだけではなく町全体の方への、地元の他の人への発信作業にとっても気を配っておられると思いますね。ひとつの大きな宿だけが繁栄するのではなく、一将なり還流をさせていくという意識があったと思います。

人を呼ぶということは、自分の温泉地に本



当に誇りを持っている方達でないとできない。自分たちが気持ちよく健やかに過ごせる場所である、土地であるということをも温泉地づくりの核になさっているところが、他の温泉地でもいろいろと参考になるのではないかと思います。

ただ由布院の成功なり、由布院からの発信は、由布院という個性のある温泉地のものであるわけです。私は15年ぶりにここに来ました。あまりに由布院が有名になると、すぐ依怙地者ですので有名な温泉地はできるだけ行かない、もっと小さくて知られてないところで、お湯の良いところを紹介しようというスタンスでガイドブックを作ったりしてきました。改めて由布院に来て、昨日連れて行って頂いて見た闇夜の久しぶりの夜の蛍、光の落とし方に非常に心配りがありました。由布院ならではの景観というものが、感じられました。他の小さな温泉地、1軒宿のところでも、自分たちの独自の景観風景というのは何なのだろう、温泉が出てくれたその土地の良さは、何なのだろうということ自分たちが認めて、そのことを源泉の良さとともに発信していただければ、日本の温泉地の三千数百カ所、共同湯だけのものを入れれば、八千くらいあると思いますが、そういう温泉地の魅力の前に、私たちが常に行きたくなくなると言うことだろうと思います。

**【浜田】**ありがとうございます。幾つか重要な考え方を抽出していただきました。温泉の大量消費、これはあまり好ましいことではないと思うのですが、温泉地を本当に育てていくときには、そこにコンセプトを明確にする、例えばこの由布院の場合であれば、保養温泉地としての考え方を作る、そして核となる人材の集まりがあり、そこから広がっていった人づくりがあり、さらには外部との交流もある。そういった考え方を幾つか取り出せると思うのですが、この場合、私は1つ補助線を引いてみたいと思っております。その時に、由布院だけからの情報ではなくて、一番端に

おられる首藤さんのように長湯温泉という、また別の所から新たに温泉地を作り、また育てていった方に、できれば由布院と違った意味、あるいはまた重なる意味、違うところ、同じところ、そういうところをお話し頂ければと思います。

**【首藤】**御紹介いただきました首藤でございます。直入町はここから大体一山越えて車で1時間くらいのところに位置してまして、かの熊本県の黒川温泉までが1時間くらいですから、トライアングルに位置している温泉地なのです。直入町は、町村合併の昭和31年(1956)に7,012人というのが最高の人口でありまして、それからどんどん過疎化と高齢化の波に洗われて、今2,850人ということになっています。人口だけを見ると、正に文字通りの寒村なのでありますが、ただ交流人口が非常に多いと言うことで、町には活力が漂っていると自画自賛しているわけなんです。この3年間くらいで、大体交流人口が倍以上になりまして、年間70万人を数えます。

私は昭和51年(1976)に京都の方から故郷の直入町に帰ってきましたが、一番最初に感じたことは、さつき志手さんもおっしゃっていましたが、とにかく寂しい村でありました。それに加えて、村の中に入って見るとですね、自分たちの温泉地は非常に長い歴史がある、温泉がふんだんに湧いている、温泉があればいつか観光客の皆さんは帰ってくるという、安易な発想が地域に蔓延しておりまして、正に鯨の回帰を信じていた漁民のみたいなものでした。しかし、ついに鯨は帰ってこなかったというそんな時期が、実は50年くらい続いたんですね。

そういう非常に強い閉塞感の中で、何が原因なのかと考えると、正に意識が凝り固まって自分たちの世界しか見えていないから、自分たちのポジションが分からない。これは大変なことだということで、近くではなくて遠いところの、異国の異文化に触れて、同

じような温泉を持っている地域がどういう戦略を打って、どう伸びているのか、どう魅力的になっているのかを先ず皆さんに見て貰おうと、そうすれば少し意識が解きほぐされてくるのかなという思いがありまして、平成元年（1989）にドイツのバードクロツィンゲンという長湯と同じような炭酸泉を持った町との交流が始まったわけです。

今年で15周年で、これまでに、人口の1割以上もの延べ380人の町民がバードクロツィンゲンに渡りました。

ドイツとチェコ、この辺りのヨーロッパの伝統的な歴史的な温泉地を見て、正に異文化に触れて一番ショックだったのは、ほんの少ししか離れていない温泉地であるにも関わらず、それぞれが非常に魅力的な個性的な温泉文化を構築していて、自分たちらしい顔をしていたことでした。つまり、直入町はみんなでそういう風にして見つけた方向性は、「国際的な視野に立った個性的な温泉地形成」という言葉に凝縮されるのかも知れません。そういう温泉地づくりをやっていく価値のある温泉地であるということ、自分たちのひとつの自信にしてきた15年間であり、そのひとつひとつが蓄積されて、今の直入町の魅力が出来上がったのです。

そして、それを証明するかのように、年々都会の方々、また温泉好きな方々がいらして、交流人口がどんどん増えているということが、方向性は正しかったことを証明してくれているのかなという思いがいたしております。

特に向こうに行って一番私たちが感じたのは、日本が経済の急成長を遂げている間に、いわゆる観光地が大型化し、その中でホテルも温泉地も大型化して行って、自分たちの地域にしかない伝統文化を全部そぎ落とし、大型の観光バスをどんどん送りつけて、お金さえ儲かれば何とか温泉地で生きていける、これでこれで良いというような安易な考え方が蔓延した30年、40年間だったのではない

か。

直入の場合は幸いにして、その間違いというか、怖さに気が付きました。昨日、甘露寺先生に測定していただきまして、「首藤さん、こんなに素晴らしい炭酸泉だって思わなかった。けばけばしい温泉地が多い中で、ここに入ると本当に癒される、非常に優しい雰囲気を持っているし、その泉質の素晴らしさと言ったら、もう特筆ものだ」と。これを町民の皆さまの前で講演していただきました。日本には、これほど素晴らしい炭酸泉はないということを教えていただき、それでまた地域は自分たちの温泉に対して「さらなる誇りと勇気」を頂いたような気がしています。

この炭酸泉を核にして、飲むと健康に良いとか、血管が広がって高血圧や心臓病に効くとかいった、他の所の泉質では真似の出来ないような戦略が打てる、皆さんに楽しんで頂けることの確認が出来たことは、非常に大きかったですね。

行政との接点の話が出ましたが、25年間私は町役場に務めておりましたので、町の政策として、町中に4つの飲泉所を作りました。温泉を飲みながら散策をし、健康を保持するということを政策として取り上げてきたという個性づくりが、非常に大きな成果を生んだわけです。

もうひとつは、長湯と言うところは昔は自然湧出でしたから、旅館が自分のところに内湯を持っていることは、ほとんどなかったんですね。外湯、いわゆる公衆浴場を利用していただけなんです。その当時は、町営の公衆浴場が3つか4つ大きいのがあったんですけど、見ているとですね、湯治をしながら、宿に泊まって時間帯になると、1日に2回も3回も下駄を鳴らして外湯を巡って歩く。それがまた楽しくて、土地の人たちとの語らいがあったり、旅人との出会いがあったりする。私たちはこれを外湯巡りの文化と位置づけたんですけど、外湯を巡ることによって、温泉地特有の気の漂いを再度作り上げていき

たいなと思っています。

甘露寺先生もおっしゃいましたけれど、温泉が出ている温泉の湧出地と温泉地の違いは何かというと、正に言葉では言い表せないような魅力のある気の漂いみたいなものが、温泉地特有の雰囲気としてあるんですね。入ってみると、その場で分かる人たちは癒される。その癒しをさらに上手く創出ができるような環境づくりのひとつが、私は外湯巡りの文化であるということで、この飲泉文化と外湯巡りの文化を再構築していこう、長湯温泉ならではの他の温泉地では真似の出来ない個性ある文化になる、そういう視点で温泉地づくりをやってきました。来られたらお分かりになると思うのですが、そういった戦略というか、方向性が功を奏して、皆さまに沢山おいで頂いています。

仕事の中での出会いで、実は一番最初に湯布院町の溝口薫平と中谷健太郎の両氏に会って、ドイツに行く前でありましたけれど、すごいカルチャーショックを受けました。それからずっと、今考えてみるともう25年くらい、いつも手を引いて頂いて、広域観光といえますか、人と人の繋がり、出会いによって直入町が育てられてきた場面が、要所要所にあります。そのことによって、長湯も面白い展開をしてきたということが出来ます。

**【浜田】**ありがとうございます。地元の宝をどういうふうにして発見していくのか、こういう逸話を聞いたことがあります。

昔、ポーランドのクラコウというところにセケルの息子イサクという律法のラビがいたそうです。この人がプラハの都に行くと、橋のたもとにある宝を掘ってこいという夢を見ました。それがあまりに強く3日3晩続くので、つい本気になってその橋のたもとに行ったそうです。すると、都ですので王宮の側に警護の兵隊がいて、迂闊に近づいて掘ったり出来ない。うろろろしているうちにその隊長が来て、「お前、何をしている。」、いや実はこれこれこういう夢を見たんでここまで

来たんですと答えた。すると、その隊長は「なんという馬鹿な人か、そんな夢のためにわざわざ靴を磨り減らしてここまで来たのか。俺もそう言えばな、似た夢を見たことがある。それはクラコウのセケルの息子イサクという男の暖炉の後ろに宝が眠っている。その宝を掘れば、大金持ちになれるという夢を見たことは何度もあるけれど、俺はそんな馬鹿な夢は信じない。」と隊長はイサクに話をした。イサクは大喜びで自分の田舎に帰って、暖炉の後ろにある宝を見つけて掘り出して、大変良い暮らしをした。

これは、日本にも味噌買橋というほぼ同じ話があるのですが、どうやら遠い未知の土地に行くと敬虔な旅をして始めて、自らの内なる心が分かる。ただ不思議なことに、これを伝えてくれる人は自分たちの同僚とかではなくて、宗教とか国を異にした外国人が、それを教えてくれるということが、どうも宗教学的な事実としてはあると、エリアードという人の本で読んだことがあります。

首藤さんや中谷さんや志手さんからお話を伺っていますと、外国に行ったからと言って、その物真似をして良いと言うわけではなくて、自分たちの心の中にあった思いが、それに触発されて出てきた。そういう形でもって、内なるも異邦人が明確になってきた。何か似たような精神的遍歴を経てきて、町づくりが出来てきたように、私には思われました。

では、実際に宝を見つけてどういうふうにしていくのか。具体的には飲泉所があって、散策をする、外湯巡りをする、気の漂いが出てくる。すると、歩く以上はその辺の環境とか景観の整備というのが、必然的に付いてくる。実際、由布院では多分そういう景観を作っていく際に、外から来る方々との交わりを考えて作られたと思うのですが、由布院のこの風景を作るために、私たちはどういう努力してきたか、あるいはこういうことはしないようにしてきたとか、お知恵があったらお話しいただけますでしょうか。

**【志手】** 由布院盆地には 100 軒くらいの旅館があるわけですが、皆さん小所帯ですね、5 室から 10 室、せいぜい大きくても 20 室、そういった資力のない中で魅力を作るというのは、どうあったらいいんでしょうか。小さな資本であっても、緑を植え込むことによって、そこに落ち着き、それから爽やかさ、高級感という言い過ぎなんですけど、なんとなく品質の高さを感じるということがあったと思うんですよね。私たちのコンセプトと言いますかね、滞在型保養温泉地の看板を掲げて以来ですね、最初お手本になる旅館があったわけではありますけど、周辺に緑を植えて何とか資力の少なさを補うと言いますか、それは少ないお金で最大の効果を生むものだということのを的確に皆さんが学んで、そういう佇まいにしていった。

「村の風景を作る」冊子がありましてね、お店を作る時でも、必ず周囲には木を植えましょう、道路からはちょっと引きましょうとね。まっすぐ見えるのではなくて、ちょっと見え隠れするような佇まいを作りましょうとかね。いろいろなアイデアが、きちんと写真入りで紹介されております。皆さん、お歩きになって分かると思いますけれど、資本のない中で、そういった個々の人の地道な努力というものが、どこの家でも緑を植えることがごく普通になってきて、由布院全体の緑を、今の由布院の良さを作っているのではないかなという気がいたします。

**【浜田】** 緑を作るという小さなことが、共同体への参画という意識を育てている逆の面もあると思うんですけど、温泉地がある程度大きいと必ずしもそういう風にはならないと思うんですよ。何か地域で話し合いとか何かで色々人とづくりの工夫をなさっているいでしょうか。

**【志手】** 大型のものは由布院に入りにくいになっています。うるおいのある町づくり条例というものが平成 2 年（1990）に制定されました。これはプロジェクト X を御覧なつた

方は良くお分かりかと思いますが、民間だけではなくて行政の方が非常に頑張っていたでいて作ったもので、かなり効果があると思うんですけどね。大型の進出の場合には、必ずこの千平米という条例に引っかかりますので、いろんな制約を受けながら、いろんな条例に則った施設を作る時には、当然この緑の問題が入って参ります。進出してくる場合には、かなりこれがチェックポイントになっていると思いますね。従来の人には、長年の間に緑を植えるという基本的理念が浸透しておりますから、ことさらに今声高に言う必要もないと思いますけど。

**【浜田】** 成功した非常に魅力のある温泉地には、外部資本それこそ大量消費という形で、食い荒らす格好で入ってきやすくなってしまふ。そういうところは、首藤さん辺りは行政マンとして長い経験を持っておられますので、いま湯布院の条例による縛りをおっしゃっていただきましたけれど、こういうものに対してはこういう施策が有効ではないかと、こういう考えを持っているのだということころは、ございますでしょうか。

それ以外に、何か外部資本の蚕食と言いますか、食い荒らしに対して、どう魅力ある温泉観光地を守っていくか。あまり守るといってと守勢に入ってしまうんですけど、何か考えておられるところがありますでしょうか。

**【首藤】** うちの町はですね、温泉地の中央に川が流れていて、周辺にずっと旅館が建ち並んでいるんですが、旅館の数は 13 軒しかない。どちらかという、観光関係の産業の皆さんが、そこで集結しているというような町ではないんですね。例えば、年金暮らしのおばあちゃんが一人住まいしてたりといったような形で、昔ながらの暮らしの中に公衆浴場があつて、温泉があつてというような形で、暮らしの見える本当に素朴な地域なんです。そういった意味では、うちの場合、幸いにしてというか、開発の余地というか、進出の余地というか、そういう土地がない。

それと、ひとつ怖かったのは、先ほども甘露寺先生の話をしていただきましたけれど、温泉がうちの最大の武器というか宝でありまして、これが濫掘によって水位が下がってきたり、炭酸ガスのガス濃度とかガス圧が下ってきているから、これは保護しなければいけないということで、今日、由佐先生もお見えであります。大分県の温泉審議会の方で全体を特別保護地域に指定をしていただいて、半径 150 m 以内は掘れませんよという規制を設けました。そうすると、入ってくる意味も余地もないということで、守られているのですね。

ただ、課題としてはですね、例えば先人がチェコのカルロビバリのような温泉地になりたい、丘があって川があって非常に綺麗な景観がある、それはチェコの皆さん方はそういう景観とか環境とかを自分の力で残そうと、意識して町づくりをやってきているわけですね。ところが、うちの町はたまたまお金がなかったとか、行政が気が付かなかったとか、そういったような偶然の経緯でもって手が入らなかっただけであって、そこに意識が育ってなければ、残っている姿は同じであっても、もし違う勢力やベクトルが動き始めると、皆がそっちに流れていってしまうという可能性がある。そういった意味では、例えば小さなナチュラルトラスト運動をやって、ここは絶対的に河川改修をさせないぞとかですね、小さな経験を積み重ねながら、今皆さんとともにそういうことの大切さを考えています。正に、まだ始まって間もないというような部分なのですけれど、そういう意識づくりが地域の中に必要だと常々感じてますけどね。

【浜田】町並みとか環境保存を保存すると言うことは、私的権利の制限になりますので、非常に難しいとは思っているのですが、昔の日本でも、知覧とか角館とか、あるいはヨーロッパでも地方の町を見ていると、景色が揃っている。これは、考えてみればその材料で作って、その限られた工法で作ってし

まったがゆえに、建築物が大体同じような体裁を持つようになった。

日本の場合は木造で取り壊しやすかったせいもあったのか、建物の景観という意味では、なかなか守りたいものになっていると思うのですが、石川さん、景観の問題で何か御提言はありますでしょうか。

【石川】いま、首藤さんから指摘がありましたように、結局温泉の原点とは、ひとつは温泉地であり、もうひとつは源泉だと思っすね。最近ようやく源泉、源泉と急に言うようになりましてけれど、先ほどの景観の意味では、なぜ 300 万人も由布院に来るのか、なぜあれほど多くの方々が黒川に来るのか、乳頭に来るのかを考えた時、癒される景観というのはひとつの普遍性があるような気がするんですね。

いくら良いお湯だと言っても、何か自分が感動する場所の風景とか景観がある。青森ならではの景観、九州ならではの景観、それが保たれているというのが、非常に大事だと思っています。だから、十湯十色の景観というものをもっと温泉地が意識していたださなければならない。結局、それは地元の方は当たり前と思っているので、外部の視点、内部の方でも外部の視点が必要かなと思います。追加ですけど、由布院の方のお話ややってこられたことを見ていると、限界容量を良くわきまえていらっしやるのが、非常に大きいと思います。

言うまでもなく、右肩上がりの時代は終わったわけですし、もうそんなに来なくて良いじゃないか、そういう発想の中で由布院の方も緩やかなソフトランディングを考えておられるのではないかと。由布院は規模が大きいので、300 万人のどのくらいが適正なのか分かりませんが、1 軒だけの温泉、10 軒だけの温泉地ならば、別に何十万人目指せということではなく、ヨーロッパ流に言えばベッド数に合わせた客室、そういう持続可能な、源泉の湯量に見合ったものが必要なのではないかと。そ

ういう意識になっていくと、日本の温泉地の風景やあり方も変わるのではないかなと思っています。

**【浜田】**非常に良い御指摘だと思います。由布院の方々も、これ以上来たらどうなるだろうという危惧は持っておられると思います。

冷徹な数字もあるのですが、皆さま直感的に、ああこれ以上は無理なのだろうとお分りになっているのだと思います。そして、日本の数ある温泉地も同じように、自分たちの温泉という宝の持っている力を明確に認識されることが大切ではないか。

大江戸温泉物語を例にすると、あそこはテーマパークという別の要素で、温泉が成立しているんだろうと思います。それは温泉に癒しを求める場所とは少し違うだろうと思いつながりながらも、ああいった大都會の温浴施設と、こういう温泉地の温泉というのは違うと思いつながりながらも、ここの300万、400万という観光客の中には相当オーバーラップしている部分があるのかもしれない。そうすれば、むしろ源泉の良さを見つめて、温泉保養観光地としてやっていく場合に、このまま右肩上がりして由布院が成立していくとは、実は私も思っていないのですが、その辺は実際にやっておられる志手さん、いかがでございましょうか。

**【志手】**御覧頂くと分かるように、由布院というのは播鉢形の盆地でございましてね、他の地域のように、観光地がどんどん大きく膨らんでいくことは、地形的に無理なんですね。

今の混雑ぶりを見てますと、由布院のコンセプトがあるわけですからね、滞在保養型、それぞれの施設は非常に小所帯ではあるけれど、そこに入って癒されるというか、このコンセプトにきちっと合ったお客様がいらっしゃられることが、一番由布院にとって理想だと思うんですね。

全国には、大きくて設備が沢山あって、豪華絢爛でというホテルを好んでいる方も、大勢おられると思うんですね。そういう方は、由布院なんかにお出でかけ下さるのはご遠慮

頂いて、その方に向いた観光地に行っていたら。由布院は小さいながらも魅力があって、質も高く風も心地よく散歩も出来て、そういうところを目指しているわけですから。今日のこのシンポなんかもそうですけどね、いろんな機会を通じてですね、町の明確な意志を、由布院のコンセプトを外に情報発信する。由布院はこういう観光地ですよ、こういう観光地が好きな方はどうぞ入して下さいとね。そういうことによって、お客様の自然淘汰という変な言い方ですけど、由布院を好むタイプのお客様に来て頂く、そのために、常に情報発信をし続けねばならない。そう思い続けて、あらゆる機会を選んで情報発信をやっているわけでございます。

**【浜田】**ありがとうございます。由布院の元々の本来のあり方、由布院の風と言っているのでしょうか。風俗とか風土と言った意味も含めて、風を守っていきたいということだと思います。

ここで、会場の方々からも質問を受けて、ディスカッションをしたいと思います。首藤さん、石川さん、質問を受ける前に是非これを言っておきたいということがありましたら、どうぞお願いします。

**【石川】**先ほど首藤さんもおっしゃいましたが、由布院、黒川、長湯という今温泉観光業界でも鉄のトライアングルのような強力な三角地帯がここにあるわけですが、由布院の方は温泉地づくりに広域のネットワーク作りということをずっと意識しておられると思うのですが。

私も正直に言って、九州の某温泉から温泉地づくりで良い案がないか、東北で良い案がないかと言われても、そんなにそこだけの案が幾つもあるわけではない。だから、今日のこの話のようなコアになるものが何なのかということになるのですが、出来たらこれからの温泉地は、ネットワークで持続可能な源泉に見合った範囲で、発展を考えるべきではないかと思っています。

大分まで出る来るのであれば、出来るだけ相性の良いところを訪ねる。そのためには、大分県の複数の温泉地で個性のある温泉地の共通パンフレットづくりをする。1泊目はここ、次は山間のここ、とそれぞれの個性でネットワークで売り出す、アピールする、そして利用者が再発見をする。そういったことが大事ではないかと思っています。

**【首藤】** 私はですね、温泉地とか観光地の原点と言うのは、そこに住んでいる人たちが、先ず自分たち暮らしぶりとか、自分たちの財産に対して誇りを持つということだと思っています。何が宝であるのか、自分たちの持っている財産が何なのか、それが分からずにないものを作っていくという、それが経済最優先の戦略であったりして、振り返ってみたら自分たちの根っこ部分がまったくなかったという例が、この40年、50年の中にあっただのではないか。

そうではなくて、そもそも温泉地や観光地が栄えてきた原点は、その土地に住んでいる人たちが、自分たちの環境とか暮らしぶりを誇っていた、例えばすごい気持ちの良い温泉に入っていると、外から来た人たちが、また通っていく人たちが、「気持ちよさそうですね。」と声を掛けて、「いや、気持ちいいからあんたも入ってみないかい。」と言葉が交わされる。地元が誇りを持っていた部分に、外の人が凄く憧れて、一夜で良いから荷を解いて、ここに滞在してみたいというところから、還流するエネルギーが生まれてきたのではないか、それが私は原点だと思うんですね。

一番大切なのは、自分たちの誇るべきものは何かということをきちんとつかみ取っていく力がなければ、どんなに素晴らしいものを持っていても、すぐに他の人に買われたり、奪われたりすることになっていく。この原点をきちんと忘れてはいけないのではないかという思いが、ずっとしていています。

つい最近、国土交通省が温泉旅行者を対象にした7万人くらいの大規模なアンケート

をした中で、岐阜県の福地温泉とこの由布院温泉が素晴らしい成果を収めていたということが、紹介されておりました。その分析結果を見ても、昔のように料理とか温泉とか風景とか、すべてに平均値であるところが、みんなに愛されているのではなくて、突出した魅力を持っているところに皆さんが関心を寄せているという。こうした方向は、由布院なり私たちもそうでありませうけれど、宿の素晴らしさとかそれから料理の素晴らしさとかは、時代と共に訓練と共に積み重ねて変えていくことはできるかもしれない。ただ、自然環境とか温泉とかいったようなことは、変えようたって変えようがないわけですね。だから、その部分を地域の人たちがきちっと受け止めていかないと、とんでもない方向に行くのではないか、このことを強く意識していかなければいけないのではないかと思っています。

最後に、私はドイツやチェコの方と色々な勉強をさせて頂く中で、日本の観光行政があまりにも遅れてきた、そこに大きな原因があるなど感じているんです。特にバーデンバーデンなんかの世界の最高の温泉地リゾート地として魅力を磨いているその背景には、その中心になっている観光局の中に建築のプロがいたり、環境のプロがいたり、経営のプロがいたり、素晴らしいスタッフが何年間という町づくりをやっている。

ですから、日本のように2、3年すると観光課長さんが税務課にいたり、またそこから新しい課長さんが来たりということで、町づくりのプロであるべき行政が観光に対して非常に薄っぺらであるという、何かその辺りに大きな問題がありそうで、これは今から日本の行政のひとつの大きな課題だと思っています。地域もちろん、組織力、地域力、人間力を付けていかなければなりませんけれど、この場合は行政がうまく地域の運動なり希望をですね、政策化していく。政策化していくということは予算が付いていくわけですから、

この辺りを抜きにしては理想的な展開は図れないのではないかなという思いがしておりますし、その辺りは行政でも大きな課題になってくるだろうと申し添えておきます。

**【浜田】**最後に個々の温泉地の問題から日本の観光行政そのものの遅れという大きなテーマが出されました。ここで、時間が約20分ございますので、質疑応答をしたいと思います。

### 会場からの質問その1

大分大学の姫野と申します。志手さんと首藤さんとに3点ほど質問があるんですけど、教えて下さい。

私は大分大学の工学部で都市計画を専攻し、大分市に住んでいます。由布院も長湯も外から見ていると行政とのスクラムが上手に組めていて、それで町が活力ある良い方向に向いているように思われます。その中で、具体的にこういってことで協力して欲しい、もっとこの部分の力を付けて欲しいといったこと、それと行政だけではなくて、私たち大学人、学問もしくは研究している人たちが協力できるとすればどういふことがあるのか、ということをお聞きしたい。これが第1の質問です。市町村合併で危惧されてくるその行政との関わりの部分も、お聞きできればと思います。

もうひとつがですね、景観のお話がでておりますけれど、由布院は町づくり条例があるとお聞きしましたが、この町づくり条例は、基本的には外からの資本に対するものがメインかと思うんです。外から入ってくる段階で審査をするその審議会は、行政だけではなく、いろんな形が全国にはある。行政の中だけでやっている場合と、住民と一緒にやる場合と、もしくは住民だけという場合もあるんですけど、由布院はどのタイプを取られているのかをお聞きしたい。これが2点目ですね。

さらに、これは由布院だけではなく長湯の

方でもそうだと思うんですけど、町づくりと言いますか、地域づくりが百年の規模だとおっしゃったように、町づくりは息を長くして続けていくべきことなどは重々承知しています。一緒に動く人たちの中でコンセンサスを図ると言いますか、同じベクトルにコンセプトって話を石川さんがされていましたが、そのコンセプトを共有してですね、長く持ち続けて、それを同じ方向を向きながらみんなで長年かけて頑張っていく、由布院はそういった中でご苦労があったことを、そしてこれから地域づくりをしようとする人たちにアドバイスがあればお聞きしたい。この3点をよろしく願いいたします。

**【志手】**先ず行政に協力して貰う。民間って非常に問題がありますね。特に生産者との結びつきにおいて限界を感じます。日本の農業政策って、ずっとお上主導でやってきて、それが地元で農協に浸透しているという構造から、農村の方はなかなか意識が変わりません。私どもがいくら地産地消で作物を作っても、少数多品目で好いから、あなた達のできる範囲で作って下さい、そうすれば使う方はこれだけの市場があるんだから大丈夫ですってね、ここ30年も言い続けて来ているんですが、なかなかこの縦型の思考から農村の方が抜け出せないですね。この結び合わせは、行政にしかできないと思うんですね。町役場が農協と手を組んで、地元の地産地消に向けた具体的な仕組みを作って下さらない限りは、非常に限界を感じております。

この結び合わせの仕組み、消費する側というのはもう条件が整っているわけですから、生産を上げて消費と結びつける、是非この仕組みを作ってほしい、私たちとしては一番お願いしたい部分ですね。

市町村合併については、観光協会として昨年アンケートを行いました。64%は単独で行きたい、16%が合併したいということだったんですね。

湯布院は既に大分郡3町の法定合併協議



会ができておまして、合併の方向に向かって進んでおりますけど、私どもは単独で行きたいという気持ちを捨てきれずに、この3分の2の人と一緒にあって、一生懸命何とか独立していけないかということを探索中でありまして、いろんな人にも働きかけています。

審議会についてはですが、これはもういろんな方が入っています。町づくり審議会には行政の方ももちろんですけど、議会、民間の各種団体、農協、私たち観光協会も入っておりますのでひとつの考え方に偏ってしまうということはありません。この点、公平な審議会であると思っています。

それから、息長くどうやって継続可能な観光地を作っていくか、そのコンセンサスはということでしたけれど、先ず実績を作って周囲を納得させていく意外にないと思います。由布院では、いろんな商店だとか、いろんなお宿が努力をしまして、それが外からのお客様の共感を呼んだと、全国でアンケートで評価が非常に高くできています。

いずれにしてもあくまでひとつ一つの地道な実績が評価を呼ぶということで、それ以外にはなかなか理論で押しても、コンセンサスというようなものは纏まりにくいと思いますね。やはり作ってきたことによって評価される、そういうことが一番大事じゃないかと思えます。

**【首藤】**実は市町村合併の話から今志手さんがおっしゃったように、日本の政府は明治から140年間経っているんですけどね。トップダウン型の行政システムの中で、日本がいわゆるそういう流れで結束をしていったからこそ、経済成長があって、これだけ復興したというのは間違いのない事実であろうと。ところが、裏から見てみると、特に地方自治体、地方というのは、国がどういう方向を言うてくれるのかをいつも待っていて、自らがどういう風に立ち上がっていったら良いのかという、自主性とか主体性とかいったものがまっ

たくそぎ落とされてきた。だから、あなた方の知恵で、あなた方の考えでやっていいですよというような問いかけをされた時に、地域はまったく答えを出せない。

これは例のふるさと創生の時に、全国の自治体がソフト戦略で皆さん方の地域を甦らせても好いですよと1億円貰っても困るところが99%で、それくらい地域の獨創性とか企画力とか実践力がそぎ落とされてきたということは、歴史が証明していると思うんですね。私は、今回の町村合併の中で、机上の数字合わせで財政が行かれなくなってきたから、2つ3つが一緒になれば何とかかなるのではないかという発想がもしあるとすれば、これは大きな間違いであろうと思っています。

これで財政難をくぐり抜けるというのは、5年持てば好いなという思いがしているんですが、その前に国がもつかどうかということも心配なんですよ。一番大切なのは、市町村合併の中では数が多いとか少ないとかということよりも、誰がコーディネーターをやるのか、どういう町づくりを進めるかということと地域の住民の皆さん方と一緒に歩めるような土壌があれば、これは強い。絶対に甦ってくると思うんですね。

なぜかという、国は、地方が持っている知恵とか企画力に支援をしようという気運にありますから、私は正直言って、知恵さえあれば、潜在能力さえあれば、それを上手くコーディネートすれば、国と直接に繋がって良い予算が帰ってくる、交付されてくると思っていますから、そういった意味では、この合併問題というのは、議員定数がどうだとか、それぞれの借金がどうだとかを論じる、そこら辺は役人がうまく調整すれば良いわけで、それよりも大事なのは一緒になった時に、どういう作業が出来るのかという夢と希望の部分、この部分の議論が全国的にほとんど抜けています。

もうひとつの活用の仕方としては、私は、

あまり皆さんに言っていないけど、例えば大きな地域になってくると、周辺部というのは中心部から離れているから血が通わないではないか、サービスが行き届かないではないかという話がありますが、これは逆でね。今ITがこれだけデジタル化されて、いろんな予算をつぎ込んで環境作っていかうとしていいる時に、旧小学校区ないし旧町村の単位で、既に中谷さんがよく言っているフロート、支所をね、沢山作ってやる、三千万くらいの支所を作ってそこに機械を1台置いたら、役所の仕事はほとんどできるんですよ。そうすると、そこに農協の購買部が入ったり、商工会が入ったり、観光協会が入ったりすれば、そこだけが昔の役所のように立ち上がってくる。

そういう発想を皆がしなくて、今回の町村合併は1点集中だと思っている。どこかに大きく依らなければ、機能しないではないか、例えば竹田・直入にしてみると、竹田市に全部集中させないとこれからの行政はやっていけないと考える人が多いんですが、そうじゃない、散らばるからこそ面白い、今だから散らばれる。そういう意味では、それぞれの地域が自分たちの地域をこうしたいという主義主張ができるようなシステム作りが、大事ではないかなという思いがしています。

自分たちの地域とか政治はその地域に住む人たちのレベルを越えるような地域は作れない、政治も作れない、だとすれば自分たちのレベルを上げていくしかない。これが私は原点だと思っています。

それから、地域住民とのコンセンサスの問題では、志手さんが実績という話をされましたけど、私も正にその通りだと思います。御前湯っていううちの外湯の拠点なんですけれど、実は中谷健太郎さんの紹介で富田さんが思い切って作ってくれた。私はこれ素晴らしい作品だと思っていますけれど、これを作るまでに、実に10年間掛かった。予算なんてすぐ取れました。何が大切かという、こう

いうものがうちの町に立ち上がるのが必要なのかということとをみんなと議論するために10年掛けたんですね。

それで、ここにある温泉をどういう風に活かすのか、どうしてこういう形にするのか、先人達がドイツの温泉館を夢見て果たせずに死んでいったというそういう思いまでも、60年後に花開かせたいというストーリー性を求めて、300人がドイツへ行って、こういうものを作りたいと言うまでに、相当なソフト戦略を渦巻かせてきた。この辺りの努力が大切なのであって、ハードを作ってしまうことは、すぐに出来るのですよね。出来ないのは、地域住民の皆さん方、本当の10年先、50年先を見据え、大切なのは何か、残すべきは何か、伝えるべきは何か、正にあのチェコのカルロビバリにあるあの飲泉所、コロナードみみたいなものが何百年も残っている、ああいう思想というのが一体どうやって育まれていくのかを考えてやっていかないと、日本のこれからは本当に価値あるものをなくしてしまうのではないかなとという思いがしているわけでありませう。

**【浜田】**他に御質問ございませんでしょうか。

## 会場からの質問その2

草津温泉の菊地と申します。

今日はいい話を沢山伺わせて頂いて、参加した意義は非常に大きかったと感謝しております。揺れ動いている時とか、揺れ動く方がいた時のことを振り返ってみても、40歳前後の方が問題意識を持って、その地域の将来像を考えて取り組んだということが、何かひとつのポイントだなという気がするんですね。

草津にいと、偉い人は一生懸命やったり、外部から来た我々はやきもきするんですが、それじゃ、40歳前後の方はどうか、ちょっとあまりピントがぼけているような気がしてならない。我々が言っても、なかなかそんなことは動きませんよということになる

んで、何かその世代の方が将来を考えていく場合に、今危機感を持って取り組まなければいけないというような気持ちにならせるためにどうしたら良いか、3人の先生にヒントになるものをお聞かせ願いたい。

**【志手】** 沢山人材がいるのにな、何で私のようなおばあさんが協会長をしているのはどうしてか不思議に思われるでしょうけど、次の世代を育てるのは、女性の方が向いていないかというのが、中谷観光協会前協会長の御発案でね。もうあたしはそんなの適任じゃないって、本当に乗り気ではなかったですけど、無理矢理に引っ張り出されたのは、後継者を育てると言うことだったんですね。私は色々分からないものですから、先輩に聞くだけでしてね。観光協会の事業は事業委員会でさせたんですよ。事業委員会のメンバーは若手で作らせた。6つの事業委員会があります。たとえば情報委員会というのは由布院の情報をインターネットで流すことをですね、おもてなし委員会これは女性だけで、お母さん達だけで、おもてなしはすべてお任せ下さい。これはもうお母さん方だけでやっている。

それから歳事企画というのは由布院のイベントを彼らが率先して実行しています。親類クラブもあるし、ランドデザイン委員会というのは由布院のデザイン、景観、風景そういったものすべてを、交通問題も入っているという具合に。アートという芸術を担当するものもあります。すべて、これは若手なんです。

事業委員会作って事業させることによって、本当に若手が育った。

今、合併問題でも推進力になって問題を考えているのは若手です。そういう意味で、私のような者が会長の位置に座ることによって、若手が育ったことは由布院にとって非常に意義深いことだし、私も少しは役に立ったかなと思っています。

**【石川】** 温泉地の人間ではないので、責任が持てないんですが、余談ですがなぜお前は温泉評論など怪しいものをしているかと聞かれ

て、僕は返答に窮するのです。自分の転機は、確か出版社にいたときに色々ありまして、今でいう会社清算みたいなものですが、30代に半ばに転機が来ました。やはり、次の世代に責任を持つ時に、何かこれまでと違ったことをしたいという層が、私たちが温泉地づくりで会う方達も、丁度今御質問にあった世代の方が多いのです。人生の世代を繋ぐ間の人たち、そういう人たちが話とはとても合うような気がします。

**【首藤】** 私はですね、これ本当に実践例なんですけれど、私は今でも溝口さんのお話になったこと忘れられません。一番最初に出会った時に、町づくりに対してこう言われました。他の人が出来ることは自分はやらない。その人が出来ることは、その人にきちっと任せていきたい。町づくりに対する協調性が生まれていく。由布院全体としては、うちの人たちが欠点があっても決して悪口を言わない。他所から悪口を言われたら、その悪口に対してみんながどうして悪かったんだろうかということを考えていく。ここら辺の精神土壌の作り方、正に溝口さん、中谷さんお2人が40代で、私が25か26歳だった。こういうお話を聞いた時に、すごい哲学を持っておられる方々がおられるなど、ショックを受けまして、それが今の由布院の根っこだったのかなという思いがいたしております。

長湯はドイツとワイン貿易とか、文化交流とか、人材交流とかいろいろなことをやって、15年続いています。ワインを向こうから輸入して、昨日何人かに飲んでいただきましたけれど、ひとつだけ、口幅ったいですけどね、そこでマザー・テレサの言葉に出会いましてね、町づくりはこれだなと。

マザー・テレサの特集をやっていた機内誌を見て、「暗いと不平を言うよりも、自ら進んで明かりを灯しなさい。」というマザー・テレサが一番愛した言葉に続いて、「誰かがやるだろうということは、誰もやらないということを知りなさい。」、つまりみんながこれは

良いことだから誰かがやるよと、そういうことは運動体として絶対に前に進まないから、気づいたあなたがやるべきです、誰かがやるだろうということは、誰もやらないということを知りなさい、これが正に町づくりを実践に移す、実践現場で汗する人間が体得が出来るキーワードだと思っているんです。そういったところから、これまでの町づくりが、由布院ももちろんですが、いやその後をとことこ付いていく人間の今支えになっている言葉のひとつですね。

**【浜田】** もっともっと質問をお受けしたいので

すが、時間がなくなってしまいました。もし今日のシンポジウムを聞いて、50代以上の人は後輩を育てるように努力していただき、40代の方は誰かがやることを率先して自分でやるようにしていただき、それ以下の人は自分が40代になったら、あるいは今でも何ができるか、さらに自分の可能性というものを、この話を聞いて触発されれば幸いです。

どうも、ありがとうございました。

(浜田真之記)

## 書評①

### 日本温泉科学会 西村 進編：『温泉科学の最前線』

ナカニシヤ出版 236頁 2004年4月

2,000円(本体)

最近、温泉に関する話題となると、レジオネラ属菌による感染症の発生、長野県の白骨温泉における入浴剤混入事件に端を発する温泉の不当表示問題など、日本の温泉への信頼を失わせる事件が多い。このような問題の背景には、温泉の衛生管理や法規上の問題ばかりでなく、一般に、温泉を限りある自然資源として捉える立場の欠如がある。そこで、温泉に関する研究、すなわち、温泉の成因、火山や地震との関係、温泉の掘削技術、温泉医学などの基礎的研究とその普及が必要となる。日本温泉科学会は、温泉科学に関する研究では60年以上の長い歴史を持った学会であるが、その広報・国際交流委員会(西村進前委員長)を中心に、初めて表題のような普及書を出版した。

内容は大きく、1. 温泉と科学、2. 温泉と地学、3. 温泉と生物学・医学に分かれ、それらはさらに、1) 青い温泉水はどのようにしてできるのか、2) 温泉のつくる石、3) 温泉は地面のぞき窓、4) 大深度温泉井の開発について、5) 岩盤中の大深部掘削井の揚水テスト、6) 温泉と地震、7) 火山活動と温泉のかかわり合い、8) 温泉に棲む生物、9) 温泉のレジオネラ、10) 温泉の医学情報あれこれ、11) 21世紀に期待される温泉に分けられ、それぞれ10名の専門研究者により分担執筆されている。

内容は専門的な分野も含めて広範囲にわたるので、すべてを理解するのは困難であるが、読者は興味ある分野、トピックから読み始めるのもよいであろう。たとえば、第1章

を読むと、天然の温泉の濁りや色が出るメカニズムが説明されていて、浴槽に人工的に入浴剤を入れて色を付けたり、白濁する仕組みを理解するためのヒントが得られるであろう。また、第9章を読むと、レジオネラ属菌が比較的どこでもよく見られる細菌(バクテリア)であるが、検出や培養、殺菌が難しいことなど、微生物についての理解を深めることができる。第10章では、温泉はアトピー性皮膚炎に効果があるかなど、温泉医学についてわかりやすく述べられている。

さらに、より深く温泉について理解を得ようと思えば、温泉に特有の岩石や鉱物(第2章)、温泉の研究が地球の内部構造の解明に役立つこと(第3章、6章、7章)、温泉掘削技術の進歩と有限な温泉資源との問題(第4章、5章)、温泉の成因(第6章、7章)、温泉特有の藻類やバクテリアなどの微生物の存在(第8章)、炭酸泉の効能(第11章)などと読み進めるのもよい。

いずれにしても、温泉の科学は総合科学であり、境界領域を含む学際的分野であるので、これらを理解するためには、最低限の基礎的な知識、予備知識が必要である。したがって、本書においても、どうしても難解な部分があるのもやむを得ないことかも知れない。さらなる普及書の出版が望まれる。

最後に、苦言を呈すれば、一部に誤植や図の脱落、文献の欠落や不統一などが見られるので、早めに改訂されることを期待したい。

(長島秀行)

## 書評②

### 山村順次著：『世界の温泉地 発達と現状（新版）』

（社）日本温泉協会、271頁 2004年5月

3,500円（税込み定価）

山村順次著『世界の温泉地 発達と現状（新版）』（271頁）が、（社）日本温泉協会から刊行された。旧版は1990年6月、大明堂の発行であった。今回の新版は、14年ぶりの増補改訂である。内容的には、その後の調査結果が付加されており、頁数が倍増している。以下、主に本書の良い点を整理して、書評としたい。評者は、日頃から無いモノねだりの書評には、眉をひそめる立場にある。

①口絵カラー写真の充実：本書の特色のひとつは、何といたっても見事な口絵カラー写真である。新版では国ごとに整理されており、世界の実に23カ国、185枚の写真が掲載され、圧巻である。写真は、ごく一部の歴史景観図を除いて、筆者が撮影したものであり、臨場感に溢れている。②23カ国に及ぶ調査対象国：旧版では13カ国の温泉地を取り上げていたが、新版では新たに10カ国が加わった。西ヨーロッパのドイツ・フランス・イタリアなどをはじめ、東ヨーロッパのチェコ・ハンガリー、南北アメリカの国々、ニュージーランドやアジアのトルコ・中国・韓国など、多くの温泉地が紹介されている。③図表の多用：本書は手作りの地図や表が実に多く、図表を通して地域事象を巧みに表現している。特に、温泉集落の地域構成図などは、著者の独壇場をなす力作と言えよう。④実態調査：海外研究の場合、往々にして観察が調査手法となるが、本書ではデータ分析をはじめ、きちんとした現地調査や野外観察が行われている。宿泊客数の変化や宿泊客の季節性などは、現地で入手した資料が大いに生かされている。⑤総論と各論：本書は国ごとにまとめているが、最初に国全体の総論、次に各論としてその国の代表的温泉地を取り上げて分析している。総花的な温泉地の紹介記事は多いが、本書は学術的で真摯な研究姿勢を貫いてい

る。⑥発達と現状：研究・調査の方法として、温泉地の発達（歴史）と現状分析が行われている。特に、著者は歴史的な分析にも人一倍力を注いでいる。⑦地域分析・温泉療養システムの究明：地理学は、地域性の究明をその中心課題としており、地域のあり方とか、その将来性などは軽視する傾向にままたった。本書では、各温泉地の温泉療養システムを意欲的に取り上げたり、地域振興についても追求している。⑧参考文献：本書は参考文献が充実している。現地調査で得た成果の他に、日本でも入手可能な文献が紹介されており、後学には参考になる。⑨40数年に及ぶ研究成果：巻には、温泉教授とか、温泉博士・温泉名人などを自称するものが実に多い。著者は温泉地を対象とした論文で、日本最初の博士号を得た研究者と言っても過言ではない。これまでの著作は10有冊に及んでいる。本書は当然のことながら、長年に及ぶ研究者生活の一里塚に過ぎないが、その真摯な研究態度が随所に現われている。徹底した現地主義、研究調査の優れた分析能力などである。⑩世界の温泉地に学ぶ：本書はたえず日本の温泉地のあり方を求めて、調査・分析・執筆が行われている。終章は「世界の温泉地に学ぶ」であって、外国の温泉地の利点を整理しながら、日本の温泉地の方向性を探ろうとしている。

振り返って、レジオネラ菌問題・ニセ温泉問題・温泉旅館経営の不振など、日本の温泉地を取り巻く環境は相変わらず厳しい。評者が考えるに、温泉業者や地方行政の温泉関係者は、勉強不足だと思う。景気の悪さを嘆く前に、そして温泉のセクションに就いたなら、まずこの『世界の温泉地』を読み、温泉地のあり方を自問自答して欲しいものである。

（浦 達雄）

## 温泉地情報

### 下呂発温泉博物館

古田靖志（岐阜県博物館）

2004（平成16）年4月30日、岐阜県下呂市の下呂温泉街に『下呂発温泉博物館』がオープンした。これは、長年にわたって下呂温泉の旅館やホテルなどに温泉を供給したり、伝統的な共同浴場などを経営している下呂温泉株式会社（川上裕惟代表取締役社長）が設立したもので、温泉に関する自然科学的資料や歴史的資料、文献・書籍などを収蔵・展示する温泉専門の博物館（博物館法による博物館類似施設に該当）である。

この博物館は下呂温泉湯之島地区の温泉街にあり、白壁土蔵造りの平屋2棟からなる趣のある建物が、温泉街によくマッチしている。延床面積は193㎡で、2つの展示室と図書スペースを配している。附属施設として、屋外に下呂温泉の湯（アルカリ性単純温泉）を引いた足湯・歩行浴用の浴槽を備え、館内から自由に出入りして利用することができる。

展示は「温泉の科学」・「温泉の文化」・「温泉博士の部屋」・「おもしろ温泉チャレンジ」・「ようこそ下呂温泉へ」の5つのコーナーからなる。「温泉の科学」のコーナーでは、温泉の湧く仕組みやさまざまな温泉現象・温泉沈殿物・熱水鉱物・温泉生物・温泉の効能などを、ジオラマ・模型・写真パネルや数々の実物資料をもとに紹介している。「温泉の文化」のコーナーでは、温泉番付・温泉絵図・温泉案内・パンフレットなどを垣間見ることができる歴史・民俗的資料、温泉文化を色濃く継承している共同浴場・湯治場・露天風呂などの写真パネル、温泉を利用したさまざまな商品などを紹介している。「温泉博士の部屋」のコーナーでは、温泉に関する書籍や学術雑誌などを取りそろえており、入館者は自由に閲覧することができる。「体験コーナー」

では、温泉水のpHや塩分を測定したり、温泉の浮世絵づくりに挑戦したりすることによって、温泉を楽しく体験的に学ぶことができるのである。「ようこそ下呂温泉へ」のコーナーでは、下呂温泉の歴史的背景や温泉湧出のしくみ、温泉の集中管理システム、下呂温泉名物などを紹介したり、下呂温泉街をわかりやすく立体地図で紹介している。これらの5つのコーナーにおける展示資料総数は約400点で、書籍等は数百冊に及ぶ。

温泉博物館を設立した下呂温泉株式会社の川上裕惟社長は、「自分たちの温泉街に、温泉について幅広く理解してもらえるような施設ができれば、観光客はもとより、温泉地を支える人々や温泉街の将来を担う子どもたちの温泉理解や温泉への愛情が深まり、“温泉で温泉地を活性化する”という、地道ではあるが本質的な活性化への方途が見いだされるのではと考えた」と、設立の意義を語られた。

4月の開館以来、多くの来館者でにぎわっており、下呂温泉の新たな観光スポットとして、また温泉地を支える地元の人々や温泉地の将来を担う子供たちへの温泉の教育普及施設としての役割が期待されている。

#### 〔下呂発温泉博物館〕

所在地：〒509-2207

岐阜県下呂市湯之島543-2

電話：0576-25-3400

FAX：0576-25-6622

入館料：中学生以上400円

小学生200円

開館時間：午前9:00～午後5:00

休館日：毎週木曜日（祝祭日は翌日）

\*ホームページもご覧ください（下呂発温泉博物館で検索できます）。

## 学会記事

### ●日本温泉地域学会第4回研究発表大会案内

来る11月29日(月)・30日(火)の両日、日本温泉地域学会第4回研究発表大会が神奈川県箱根町強羅温泉で開催されます。

今回は、5月に実施された由布院大会総会での会員の意見を取り入れて、従来の「統一論題」と「シンポジウム」を合体させ、現在の温泉問題に関するフォーラムを行うことにしました。フォーラムに先立ち、中央温泉研究所長・甘露寺泰雄会員の基調講演「温泉浴槽の衛生管理」があります。続くフォーラムのテーマは「温泉地における浴槽管理の現状と課題」とし、4名の報告者の発表を踏まえ、議論をすることにします。もちろん、従来どおりの温泉地視察会や「自由論題」の発表もあります。会員各位多数の参加を望みます

以下に、大会のスケジュールを掲載します。

### 日本温泉地域学会第4回研究発表大会スケジュールとプログラム

開催温泉地：神奈川県箱根町強羅温泉

協賛：箱根強羅観光協会・箱根温泉蒸気井管理協議会・箱根町

開催日：平成16年11月29日(月)～30日(火)

会場：老人福祉会館「やまなみ荘」3階(強羅駅裏手)

受付：11月29日(月)12:00～13:00

11月30日(火)9:30～

参加費：一般会員・賛助会員2,000円、学生会員1,000円、その他1,000円(資料代)

懇親会：会場は「やまなみ荘」です。会費5,000円(学生会員3,000円)

**\*大会参加者は、学会事務軽減のために、参加費(全員)と懇親会費(懇親会参加者)を前もって下記学会事務局振替口座に払い込んでください(11月15日まで)。**

**郵便振替口座番号：00190-6-462149 加入者名：日本温泉地域学会**

宿泊：宿泊については各自で申し込んでください。下記の旅館を希望される方は、「日本温泉地域学会員」であることを伝え、申し込んでください。

宿泊施設名	電話番号	税別宿泊料金(2~3名1室)	提供数
紀州鉄道箱根強羅ホテル (単純硫黄泉)	0460-2-2229	8,000円(4名:7,000円、1名:10,000円)	1~4名20室
メルヴェール箱根強羅 (単純硫黄泉)	0460-7-7600	10,000円(4名:9,000円、1名:13,000円)	1~4名5室
翠光館 (塩化物泉)	0460-2-3351	10,000円(4名:9,000円、1名:13,000円)	1~2名2室 3~4名4室
静峰閣照本 (酸性硫酸塩泉・炭酸水素塩泉)	0460-2-3177	10,000円(4名:9,000円、1名:13,000円)	1名3室 2~4名5室
国民宿舍箱根太陽山荘 (酸性硫酸塩泉)	0460-2-3388	5,500円(4名:5,500円)	2~4名5室 セルフサービスのため学生に限る



## 研究発表大会スケジュール

11月29日(月) 12:00～13:00 受付  
13:00～16:00 強羅温泉と周辺地域視察会(強羅温泉-大涌谷-箱根ビジターセンターなど)  
16:00～17:00 休憩  
17:00～19:00 懇親会(学会会場・やまなみ荘)

11月30日(火) 9:30～ 受付  
10:00～12:00 自由論題研究発表5件  
12:00～12:10 記念撮影  
12:10～13:00 昼休み  
13:00～13:30 基調講演「温泉浴槽の衛生管理」  
13:30～13:40 休憩  
13:40～15:20 フォーラム「温泉地における浴槽管理の現状と課題」  
報告4件  
15:20～15:40 休憩  
15:40～16:40 討論

交通 : JR 東京-小田原-箱根湯本-強羅。または小田急新宿-箱根湯本-強羅。  
箱根湯本から箱根登山鉄道で終点の強羅駅下車。会場は強羅駅裏手すぐ。

## 研究発表大会プログラム

11月29日(月)

自由論題 発表時間:20分(発表15分、質疑5分)

座長:池永正人(長崎国際大)

10:00～10:20 小堀貴亮(別府大)・山村順次(千葉大):高度経済成長期における湯治場の地域的展開

10:20～10:40 浦達雄(大阪明浄大):別府温泉郷における旅館経営の変容

10:40～11:00 休憩

座長:長島秀行(東京理科大)

11:00～11:20 山村順次(千葉大):温泉資源性の変化と温泉地経営

11:20～11:40 寺田徹(日本温泉協会):天然温泉表示制度の現状と課題

11:40～12:00 寺尾禮二(株・テラオ):完全オゾン殺菌処理による温泉水の有効利用

12:00～12:10 記念撮影

12:10～13:00 昼休み

基調講演

13:00～13:30 甘露寺泰雄(中央温泉研究所所長):「温泉浴槽の衛生管理」

13:30～13:40 休憩

## フォーラム

「温泉地における浴槽管理の現状と課題」

報告時間：25分（発表15分、質疑10分）

司会：石川理夫（温泉評論家）

- 13：40～14：05 布山裕一（日本温泉協会）：都道府県の温泉浴槽管理の現状と課題
- 14：05～14：30 佐々木寿男（宮城県庁）：宮城県の温泉浴槽管理の現状と課題
- 14：30～14：55 濱田眞之（株・地熱）：温泉浴槽管理のあり方
- 14：55～15：20 飯出敏夫（温友社）：利用者からみた温泉浴槽管理
- 15：20～15：40 休憩
- 15：40～16：40 総合討論

- 懸案の日本温泉地域学会選定「日本温泉地域資産」の1次選定作業が終わりました。本号に掲載のとおりです。選定の経緯については、本文中に記しています。今後とも、第2次・第3次と選定を進めていく予定です。会員各位のご意見をお寄せください。

今回の選定にあたり、日本温泉地域資産選定委員会の石川理夫委員長をはじめ、飯出敏夫・浦達雄・寺田徹・長島秀夫・布山裕一・濱田眞之・山村順次の各委員のご尽力に感謝します。また、池永正人・石井栄一・市原実・大山琢央・菊地荘悦・首藤勝次・進藤和子・谷口清和・遊湯土湯温泉協同組合の各会員からも選定候補の回答をいただきました。御礼を申し上げます。

- 日本温泉地域学会の温泉地域への貢献事業のひとつとして、「温泉観光士」養成温泉学講座が実現することになりました。詳細はすでに会員各位へ文書で送付いたしました。草津町・群馬県中之条行政事務所のご支援によって、本学会員8名の講師陣による第1回草津「温泉観光士」養成講座が、10月28日（木）～30日（土）の2日半をかけて行われます。コース修了者には日本温泉地域学会から「温泉観光士」の認定証が贈られます。インターネット上の草津町役場または日本温泉地域学会のホームページでも、概要を見ることができます。

今後とも、各温泉地でこの講座を開催していく予定です。希望の温泉地があれば、学会事務局へお知らせください。

- 日本温泉地域学会第3回研究発表大会は、5月25日（火）・26日（水）の両日、由布院温泉（会場：七色の虹）で開催されました。発表プログラムは「温泉地域研究」第2号に掲載してあります。

大会の運営にあたり、湯布院町・大分県・直入町・由布院温泉観光協会・湯平温泉観光協会など、多くの地元関係温泉観光機関や関係者のご支援とご尽力を賜り、また、別府大学の中山昭則・小堀貴亮両会員の事務方への助力もあり、無事に終了しました。

由布院温泉発展の功労者のひとり、中谷健太郎氏の含蓄のある基調講演（本号に掲載）やシンポジウムに参加した方は、地元関係者を含めて120ほどにのびりました。また、懇親会後の予期せぬ「ホテル鑑賞会」は、会員に大きな感激を与え、ホスピタリティのなんたるかを印象づけられました。

以上、由布院大会の成功を報告し、関係各位に厚く感謝の意を申し上げます。

# 日本温泉地域資産の選定について

日本温泉地域学会会長  
山村 順次

2003年5月に日本温泉地域学会が設立され、本学会の使命として、資料に基づいた実証的な研究を踏まえて、温泉地域が環境保全を図りつつ、持続可能な発展をとげるように側面から助力し、また広く温泉と温泉地に関する知識の普及を図ることなどが確認された。

そのひとつとして、私は早速、世界温泉遺産にならって日本温泉遺産選定の必要性を感じ、その案を常務理事会に諮った。しかし、すでに日本温泉遺産の名称は使われており、そこでも一応の選定がなされていたことが明らかになった。しかし、その選定項目や内容を見ると、温泉そのものや温泉と温泉地の歴史・文化にかかわる貴重な文化財を取り上げていて評価されるが、全国的に統一して把握

するというものではなかった。ここに、2003年7月の常務理事会において、本学会がこうした選定をすることは、重要かつ緊急であるとの合意が得られた。

そこで、名称の検討に入ったが、最終的に「日本温泉地域資産」とすることにし、これを「自然資産」「文化資産」「複合資産」に分類した。そして、選定委員会を発足させ、会員の応募をも加味して、とりあえず125の第1次選定をし、ここに公表することにした。この選定が日本の貴重な温泉資源や温泉文化を守り育てる機運を盛り上げ、各温泉地にとって資することがあれば、幸いである。

選定作業に当たって、とくにご尽力をいただいた選定委員会の石川理夫委員長をはじめ、選定委員各位に感謝したい。

## 日本温泉地域資産（第1次選定）の発表と経過報告

日本温泉地域資産選定委員会委員長  
石川 理夫

### 1 はじめに

わが国の温泉界は「温泉虚偽表示」問題で揺れている。国民・消費者の温泉に対する信頼が損なわれた中で、温泉・浴槽情報公開の必要性が再認識され、また、温泉法など関連法律や行政面で情報開示が裏付けられているかどうか、論議されるようになった。情報公開は信頼回復の大きな前提条件となるが、そればかりにとどまるものではない。

この間の論議は、個々の宿・施設や法律・行政の姿勢に問題を還元させるのみで、温泉情報公開をとおして日本の温泉地全体の方をどのようなものにしていくかという、原

点からとらえなおして、今後を展望する視点が欠落しているように思われる。

温泉という地球の有限資源性を解決する“打ち出の小槌”であるかのように、大深度大量掘削と循環ろ過浴槽方式に依存する状況にあつて、温泉提供者側のみならず国民・消費者側からも共に、際限のない温泉の大量消費構造を省み、温泉地の共存共栄と持続可能な発展の道筋をたてていくという問題意識が、そこには希薄である。

端的な例として、温泉ニーズの重要なひとつではあるが、今日では全浴槽レベルにスタンダード化はし難い「源泉100%かけ流し」

へのある種原理主義的信仰が生じている。ここでは、温泉地全体としての源泉活用・提供のあり方、共存共栄の道は考慮されない。ひたすら個々の宿や施設が「源泉100%かけ流し」かそうでないかという二者択一的“踏み絵”を踏まされている。挙げ句の果て、「鮮度100%・源泉100%かけ流し」を科学的にお墨付きするというニュービジネスが登場したほどである。

こうした中、不安と自信喪失に陥っている温泉地が少なくない。しかし、温泉の原点は温泉資源そのものと温泉を人が守り育ててきた温泉地の2つにある。日本の温泉地の未来のために日本温泉地域学会が会員と共に考え、寄与できるものは何か、そのささやかな試みのひとつが、今回より選定作業を開始し、第1次発表にいたった「日本温泉地域資産」である。

## 2 日本温泉地域資産の選定にいたる経過

日本には豊かで多様な温泉資源と、特色ある温泉文化が今も数多く保たれている。しかし、当の温泉地がその意義をよく理解し、守り育て、地域のために活用しているわけでは必ずしもない。そこで本学会では、日本の温泉地が誇りに思い、共に守り育てていくべき、こうした日本の温泉の宝、温泉の自然・歴史文化記念物、温泉文化財（resources, heritage, asset, common property）とも言うべきものを、日本の「温泉地域資産」として広く選定し、公にすることを通じて、温泉地の持続可能な発展（活性化）に寄与できればという提言が、2003年夏の常務理事会でなされた。

同年11月5・6日、宮城県東鳴子温泉で開催された本学会第2回研究発表大会時の理事会に、古田靖志会員（岐阜県博物館）から「日本の温泉記念物および温泉文化遺産の選定について」のレジュメも提出され、討議した結果、さらに詳細な検討作業を進めるこ

とになった。

2004年5月25・26日、大分県由布院温泉で開催された第3回研究発表大会時の理事会では、常務理事会（準備作業担当・石川理夫）作成による「日本温泉地域資産（仮称）選定に向けた作業案」が提出され、一致して承認された。

これを受けて同6月の常務理事会で、多分野にわたる会員から数名規模の選定委員を選んで選定委員会を発足させること、後述する内容の2分野に分けて「日本温泉地域資産」（本学会オリジナル用語）の第1次選定作業に本学会を挙げて取り組むことを決めた。選定作業は、第1次、第2次、第3次と段階をふみ、全会員からそれぞれの地域性を鑑みた推薦リスト（推薦理由を付記）を挙げてもらうことになった。これを集約し、選定委員会で審査し、第1次選定にいたることになった。この結果は本学会誌を通じて対外的に発表し、今後刊行物にすることも考えていきたい。

「日本温泉地域資産」選定委員会委員は、下記のとおりである。

委員長：石川理夫

委員：飯豊敏夫・浦達雄・寺田徹  
長島秀行・布山裕一・濱田眞之  
古田靖志・山村順次

## 3 日本温泉地域資産とは

### (1) 日本温泉地域自然資産

日本の温泉地域資産と呼ぶにふさわしいものは、まず地球の、日本列島の天与の恵み、自然の産物である温泉資源そのものである。とりわけ、今も豊かに自然湧出している源泉（湯元）であり、多様な個性・特色がある成分や泉質を有するすぐれた源泉（温泉水）が挙げられる。

これには、湧出した源泉が生み出す固有の自然現象の果実（間欠泉・噴湯丘・噴泉塔・石灰華、あるいは温泉に棲息する特殊な生物など）も含まれる。そのいくつかは、すでに

国の特別天然記念物などに指定されているものがある。しかし、指定されないまま放置されているもの、限られた地域レベルの認知にとどまっているものも少なくない。そうした日本固有の豊かな温泉資源の象徴となり得るものが、選定対象に挙げられる。

すなわち、貴重で保存されるべき温泉源や源泉、温泉固有の自然現象を対象にしたものを、日本の温泉地域資産のなかでも第1の対象分野として、「日本温泉地域自然資産」と呼ぶことにする。

## (2) 日本温泉地域文化資産

次に、日本の温泉地には、たとえば都市学・地理学・建築・美術工芸・民俗芸能・社会学・医学など、多くの専門分野から見ても、ユニークですぐれた成果・作品と評価されるものが数多く見いだされる。

一例を挙げれば、数百年の歴史を経て、独特の温泉情緒を醸し出している温泉街や源泉広場、また、建築工芸の粋を集めた木造多層旅館や道後温泉本館のような伝統的共同浴場など、国の登録文化財や都道府県の重要文化財に多く指定されているような歴史的建造物がある。

加えて、日本の湯治文化を特色づける伝統的な入浴・温泉利用法、地場の素材を生かした伝統的浴槽、歴史ある温泉地に伝わる温泉信仰、芸能・宗教的行事や古くは『延喜式』神名帳以来文献に記された温泉神社、各々縁起を持つ温泉寺・薬師堂が残されている。

これらのものは、日本の温泉文化史上価値が認められ、温泉文化財として後世に伝えていくべきものである。現に、温泉地の特色・魅力をかたちづくる大きな要素となっていて、温泉地の活性化や保養・観光集客の目玉となっているものが少なくない。一方で、温泉地全体の歴史的文化的な資産価値を有する地域・公共財としては認識されないままの例も多い。こうしたものこそ、選定対象に加えていきたい。

このように、日本の温泉史を特色づける温

泉地固有の歴史資産、日本の温泉文化が育んだ有形・無形の文化資産と呼ぶべきものを、公共・民間を問わず、日本の温泉地域資産のもうひとつの分野として、歴史資産と文化資産に分けずにまとめて「日本温泉地域文化資産」と呼ぶことにする。

## (3) 日本温泉地域複合資産

なお、同一選定対象が、前記の日本温泉地域自然資産と日本温泉地域文化資産の両方にまたがることはあり得る。また、それぞれの選定対象が同一温泉地内で複数連なり、重なっている場合、「日本温泉地域複合資産」と呼ぶことにする。

## (4) 経済的・客観的にも〈資産価値〉を有する日本温泉地域資産

以上、3つの日本温泉地域資産は、学術的にも評価されるばかりか、温泉地の活性化に寄与する地域資源・地域資産として、経済的・客観的に数値評価できる資産価値を有するものとみなされる。それは文化財同様、有形・無形を問わない。

## (5) 先行する類似選定企画について

なお、本学会が選定する3つの「日本温泉地域資産」と名称が似ていたり、選定対象が一部重なることもあり得る、先行する選定企画が2つある。それらとの選定のあり方を含めた違いについて、言及しておきたい。

### ①「につぼん温泉遺産 100 温泉地」

これは、鬼怒川温泉・熱海温泉といった温泉地まるごとを選定対象にしている。選定は、学術的評価や温泉資源、温泉文化史的考察にもとづくというより、市販の温泉ガイドに見られる日本百名湯選びと同様で、「どの温泉地がいい」という選者の温泉地全体評価にもとづいて選ばれている。このように、温泉地まるごとを選ぶことは、本学会の趣旨とは異なる。

### ②「温泉遺産」

これには「国登録の有形文化財の温泉施設」「保存したい温泉建築」「古人に学ぶ温泉の伝統的な療法」「温泉利用法」など、本学

会の日本温泉地域資産と合致する選定対象がいくつか含まれていて、参考になる。ただし、「温泉遺産」として出版された本を見ると、その過半が「全国厳選・源泉かけ流し風呂(の宿)」紹介で占められ、そのかぎりでは、最近多い「源泉かけ流し宿」ガイドと内容的に大差ない。しかも、商業的・広告的観点からの選定もうかがわれ、そうした点では本学会と決定的に趣旨・選定のあり方が異なる。

#### (6) 「源泉かけ流し浴槽」は選定対象か

前述の先行類似企画に関連して、その大半を占める「源泉かけ流し浴槽」について、コメントしておきたい。

「源泉かけ流し」という温泉場本来の提供・利用法を保っていることは、湯治にはもとより、源泉の個性を味わいたい利用者にとっても大事である。しかしながら、循環ろ過湯主流の今日では、「源泉かけ流し浴槽」は少数派になったとはいえ、まだまだ全国に多く保たれており、そのすべてを一律に選定対象にすることは、まず無理がある。

その上で、源泉かけ流し浴槽を選定対象に挙げる場合は、循環ろ過しないで源泉かけ流

しという状態のみならず、その浴槽自体にも歴史的・温泉文化史的価値が認められるもの、あるいは自然湧出する源泉そのものを伝統的な湯壺にしている、温泉資源面からも評価の対象となるなど、条件をもっと精査して絞り込むことが求められる。

#### (7) 源泉湯壺・浴槽の選定資産ジャンル分けについて

ちなみに、川床が貴重な自然湧出源泉となっていて、「川湯」ができる天然湯壺状態のままであれば、「日本温泉地域自然資産」の対象となる。

一方、同じく自然湧出の源泉そのものに、源泉の泉質や特色を生かす利用法にふさわしい浴槽を人為的にこしらえて、年月を経た源泉浴槽の場合は、「日本温泉地域文化資産」の対象となる。

また、同じく高温自然湧出の海岸泉源地帯で、伝統的な天然砂蒸し浴が行われてきた例では、貴重な泉源地帯を自然資産とし、伝統的砂蒸し浴を文化資産として、双方の選定対象となる場合が考えられる。

## 日本温泉地域資産（第1次選定）

今回の第1次選定では、全国から計125件の日本温泉地域資産が選ばれた。内訳は自然資産が57件、文化資産が75件（双方にまたがって選定されたものを含む）である。なお、今回は日本温泉地域複合資産の選定は見合わせている。選定委員会には、なお多くの候補対象リストが寄せられており、今後の第2次選定作業に委ねたい。

北から47都道府県順に通し番号を付けて、該当市町村、【自然資産】【文化資産】などの分野別と、初出中心に小ジャンル項目、簡単な選定理由を併記した。

### 北海道

- 1 登別温泉の地獄谷（登別市）【自然資産／自然湧出泉源】  
貴重な火山性温泉の大規模な自然湧出泉源地帯
- 2 ニセコ湯本温泉の大湯沼（ニセコ町）【自然資産】  
ニセコ温泉郷の貴重な自然湧出泉源地帯の代表
- 3 二股ラジウム温泉の石灰華ドーム（長万部町）【自然資産／温泉沈殿物】  
わが国最大の温泉生成による石灰華ドーム
- 4 オンネトー湯の滝（足寄町）【自然資産】  
マンガン酸化物を生成する細菌が棲息。国指定天然記念物
- 5 屈斜路湖畔自然湧出泉群（弟子屈町）【自然資産】  
オヤッコツ地獄、砂湯など自然湧出泉源が広範囲に点在
- 6 硫黄山噴気地帯（弟子屈町）【自然資産】  
硫黄を析出させて荒々しい景観を保つ川湯温泉の泉源地帯
- 7 知床半島カムイワッカの大湯滝（斜里町）【自然資産／自然湧出泉源湯壺・温泉生物】  
自然湧出泉が湯川・湯滝となり天然湯壺を形成し、貴重な酸性温泉産藻類が生育

### 青森県

- 8 恐山温泉の霊場と自然湧出泉源地帯（むつ市）【自然資産・文化資産】  
古からの温泉霊場で伝統的浴舎を保ち、多様な温泉鉱物を産出
- 9 酸ヶ湯温泉の地獄沼（青森市）【自然資産】  
高温自然湧出酸性泉の泉源地帯の一角を占める
- 10 酸ヶ湯温泉のヒバ造り「千人風呂」（青森市）【文化資産／伝統的浴舎・泉源浴舎・湯治文化】  
泉源浴槽「熱の湯」を含む100坪近い総ヒバ造りの伝統的浴舎
- 11 蔦温泉の伝統的旅館建築と泉源浴舎（青森市）【文化資産／伝統的旅館建築ほか】  
大正期建築の木造本館と泉源に建てた伝統的木造浴舎
- 12 温湯温泉の共同浴場を囲む「客舎」群（黒石市）【文化資産／伝統的共同湯広場・湯治文化】  
内湯を持たない宿泊専用「客舎」が共同浴場を囲む貴重な共同湯広場景観

### 秋田県

- 13 後生掛温泉の自然湧出泉源地帯（鹿角市）【自然資産】  
泥火山・湯沼など八幡平の火山性自然湧出の温泉資源を象徴する「地獄」

- 14 秋田八幡平温泉群のオンドル浴舎（鹿角市・田沢湖町）【文化資産／湯治文化】  
後生掛・銭川・大深・玉川の各温泉にあり、温泉熱で床を温めるオンドル湯治棟
- 15 後生掛温泉の泥湯と箱蒸し（鹿角市）【文化資産／伝統的入浴法】  
温泉熱（蒸気・地熱）を利用した箱蒸しと泥湯の伝統的入浴法
- 16 蒸の湯温泉の噴気地帯（鹿角市）【自然資産】  
後生掛温泉の地獄と並び、噴気の上る自然湧出泉源地帯を形成
- 17 玉川温泉の自然湧出泉源地帯（田沢湖町）【自然資産】  
強塩酸酸性泉（大噴湯）と北投石（国指定特別天然記念物）を産出
- 18 玉川温泉の岩盤浴（田沢湖町）【文化資産】  
泉源地帯「地獄谷」で地熱と微量放射線を生かす伝統的湯治法
- 19 鶴の湯温泉の伝統的宿舎と泉源露天風呂（田沢湖町）【文化資産】  
藩政期のものを明治に再現した茅葺き本陣長屋と自然湧出泉源にある露天風呂
- 20 黒湯温泉の噴気地帯（田沢湖町）【自然資産】  
噴気・噴湯が見られ、金精様も置かれた東北湯治文化の象徴
- 21 黒湯温泉の湯治棟（田沢湖町）【文化資産】  
乳頭温泉郷の湯治場景観を保つ茅葺きと杉皮葺き自炊棟
- 22 川原毛地獄の大湯滝（湯沢市）【自然資産】  
日本三大地獄地帯にあり、自然湧出の大湯滝が流れ落ち、天然湯壺を形成
- 23 小安峽温泉の大噴湯【自然資産／大噴湯】  
小安峽谷の崖から熱泉が噴出する泉源地帯
- 24 秋ノ宮温泉の魚卵状珪華（ブリコ石）（雄勝町）【自然資産／温泉沈殿物】  
希少な魚卵状の温泉華。国指定天然記念物

## 岩手県

- 25 藤七温泉の噴気地帯（松尾村）【自然資産】  
岩手八幡平で貴重な泉源地帯
- 26 国見温泉のライム（緑）色源泉（雫石町）【自然資産】  
特色ある湯色を呈する含硫酸黄－カルシウム・ナトリウム－炭酸水素塩泉〔硫化水素型〕
- 27 鉛温泉の伝統的旅館建築と泉源立ち湯（花巻市）【文化資産】  
昭和初期建築木造三階建て本館と岩盤から自然湧出する深い泉源浴槽「白猿の湯」
- 28 大沢温泉の自炊棟と離れ家（花巻市）【文化資産】  
伝統的湯治場景観を保つ木造三階建て自炊棟と藩政期以来の茅葺き離れ家
- 29 夏油温泉の石灰華ドーム（北上市）【自然資産】  
高さ 20 m に及ぶ石灰華「天狗の湯」。国指定特別天然記念物
- 30 夏油温泉の泉源露天風呂群【文化資産】  
夏油川河畔の自然湧出泉源を生かした「大湯」など露天風呂群
- 31 須川温泉の自然湧出泉源地帯と部分蒸気浴（一関市）【自然資産】【文化資産】  
溶岩丘から毎分 6,000 ℓ の温泉が自然湧出。湯治文化を伝える部分蒸気浴「おいらん風呂」

## 宮城県

- 32 鬼首温泉郷の地獄沢間欠泉群（鳴子町）【自然資産】  
「雌釜」「雄釜」を含む間欠泉群。国指定特別天然記念物。



- 33 鳴子温泉の瀉沼（鳴子町）【自然資産】  
『続日本後記』に記録された鳴子温泉誕生地の強酸性火口湖
- 34 鳴子温泉の温泉神社下「滝の湯」共同浴場（鳴子町）【文化資産／伝統的共同湯】  
「御神湯」源泉などを湯樋で注ぐ滝湯付き伝統的共同浴場
- 35 鎌先温泉の伝統的旅館街（白石市）【文化資産】  
木造三階建て「一條旅館」自炊棟など、石畳の道と調和した湯治場景観

## 山形県

- 36 湯殿山神社「ご神体」の自然湧出源泉（朝日村）【自然資産】【文化資産／温泉信仰】  
源泉をご神体とする貴重な温泉信仰
- 37 肘折温泉の朝市（大蔵村）【文化資産／湯治文化】  
湯治場路上での伝統的朝市
- 38 銀山温泉の伝統的旅館建築群（尾花沢市）【文化資産／伝統的旅館街】  
大正ロマンを残す木造三層・四層の和風旅館街
- 39 白布温泉の茅葺き旅館と打たせ湯浴場（米沢市）【文化資産】  
二百数十年続く茅葺き和風旅館「西屋」の伝統的打たせ湯浴舎
- 40 姥湯温泉の自然湧出崖源泉と露天風呂（米沢市）【文化資産】  
自然湧出の崖から源泉を湯樋で注ぐ露天岩風呂

## 福島県

- 41 飯坂温泉の「鯖湖湯」共同浴場と伝統的旅館建築（福島市）【文化資産】  
国有形登録文化財の「なかむらや旅館」と並ぶ伝統的共同浴場
- 42 木賊温泉の自然湧出源泉浴槽群（笹岩村）【文化資産】  
河畔の自然湧出岩盤上にある「井筒屋」と共同湯の源泉浴槽

## 栃木県

- 43 大丸温泉の自然湧出湯川（那須町）【自然資産】  
自然湧出の湯川を利用した天然露天風呂
- 44 那須湯本温泉の「鹿の湯」共同浴場と伝統的入浴法（那須町）【文化資産】  
かぶり湯と時間湯の入浴法を伝える伝統的共同浴場
- 45 奥鬼怒温泉・湯沢の噴泉塔と河原の自然湧出源泉（栗山村）【自然資産】  
希少な噴泉塔のひとつ。国指定天然記念物
- 46 川俣温泉の間欠泉（栗山村）【自然資産】  
自然噴出する貴重な間欠泉
- 47 日光湯元温泉の温泉寺と境内源泉（日光市）【自然資産】【文化資産】  
平安時代に開かれた温泉寺境内が自然湧出泉源地帯

## 群馬県

- 48 伊香保温泉の大堰のある石段街（伊香保町）【文化資産／計画的温泉街】  
近世初期の日本初の温泉街計画
- 49 四万温泉の日向見薬師堂【文化資産】  
萱葺き建造物。堂下に自然湧出源泉を持つ。国指定重要文化財
- 50 四万温泉の伝統的旅館建築と浴舎（中之条町）【文化資産】  
元禄期の歴史を伝える「積善館」本館と大正モダニズム様式の浴舎「元禄の湯」

- 51 法師温泉の伝統的泉源浴舎（新治村）【文化資産】  
鹿鳴館風建築様式で泉源に建つ「法師乃湯」浴舎
- 52 尻焼温泉の川床の自然湧出泉源（六合村）【自然資産】  
長笹沢川の川床を赤茶色に染めた自然湧出泉で川湯
- 53 草津温泉の湯畑と歴史的町並み（草津町）【文化資産／伝統的温泉街】  
温泉情緒たっぷりの大泉源広場と滝下通りの和風旅館街
- 54 草津温泉の強酸性源泉と棲息藻類【自然資産／自然湧出泉源・温泉生物】  
温泉適応希少生物の藻類イデユコゴメが棲息する自然湧出強酸性泉
- 55 草津温泉の時間湯入浴法【文化資産／伝統的入浴法】  
共同湯「千代の湯」「地蔵湯」に残る伝統的入浴法
- 56 万座温泉の自然湧出泉源地帯（嬬恋村）【自然資産】  
空噴・湯畑など標高 1,760m に広がる自然湧出泉源

### 神奈川県

- 57 塔之沢温泉の伝統的旅館建築（箱根町）【文化資産】  
明治 17 年（1884）に建て直された木造四層建築「環翠楼」
- 58 宮ノ下温泉の歴史的洋風旅館建築（箱根町）【文化資産】  
洋風温泉ホテルの草分け「富士屋ホテル」
- 59 大涌谷噴気泉源地帯（箱根町）【自然資産】  
箱根の歴史上、貴重な泉源地帯

### 新潟県

- 60 栃尾又温泉の微温湯長時間入浴法（湯之谷村）【文化資産／湯治文化】  
約 37℃ のぬる湯の放射能泉に「長湯」する伝統的湯治法
- 61 蓮華温泉の自然湧出泉源地帯（糸魚川市）【自然資産】  
白馬連峰標高 1,500 m の噴気地帯から 4 種類の泉質が自然湧出

### 富山県

- 62 みくりが池温泉の噴気泉源地帯（立山町）【自然資産】  
『今昔物語』に記され、日本最高所 2,450m のみくりが池温泉の湯元
- 63 立山温泉の新湯産出球状オパール「玉滴石」（立山町）【自然資産】  
高温の湯池から産出する希少な球状珪華沈殿物

### 石川県

- 64 岩間温泉の噴泉塔群（尾口村）【自然資産】  
白山麓にある高さ 10 m に及ぶ噴泉塔。国指定特別天然記念物
- 65 山中温泉の「菊の湯」共同浴場広場（山中町）【文化資産／伝統的共同湯広場】  
共同湯の総湯「菊の湯」を核に発展した温泉地の原型

### 山梨県

- 66 下部温泉の自然湧出微温湯泉源浴槽（下部町）【文化資産／湯治文化】  
ぬる湯長時間入浴法を保つ「源泉館」「大市館」の地下岩盤泉源浴槽
- 67 増富ラジウム温泉の岩盤自然湧出放射能泉と泉源湯壺（須玉町）【自然資産】  
「不老閣」裏山の岩盤から自然湧出する放射能泉を天然湯壺に利用

## 長野県

- 68 上諏訪温泉の「片倉館」（諏訪市）【文化資産】  
昭和初期の温泉文化を伝える昭和3年（1928）のレンガ造り洋風建築と深い浴槽
- 69 鹿教湯温泉の湯坂と文殊堂（丸子町）【文化資産／伝統的湯治場景観】  
閑静な鹿教湯温泉の代表的な湯治場景観
- 70 山田温泉の「大湯」共同浴場（高山村）【文化資産】  
伝統的な共同浴場建築様式
- 71 渋温泉の石畳温泉街（山ノ内町）【文化資産】  
木造旅館や共同湯が並ぶ伝統的温泉街
- 72 地獄谷温泉の天然噴泉（山ノ内町）【自然資産】  
活動を続ける希少な噴泉。国指定天然記念物
- 73 地獄谷温泉の野生ニホンザル入浴風景（山ノ内町）【文化資産／野生動物の温泉利用生態】  
野猿公苑を中心に湯浴み習慣を持つニホンザルの貴重な生態
- 74 野沢温泉の「麻釜」泉源地（野沢温泉村）【自然資産】【文化資産／伝統的温泉利用】  
野沢組、湯仲間が守る自然湧出泉源の中心。野沢菜を茹でる生活風景
- 75 野沢温泉の「大湯」共同浴場（野沢温泉村）【文化資産】  
13ヵ所ある共同湯の中心。江戸の湯屋建築を再現
- 76 白骨温泉の噴湯丘と球状石灰華（安曇村）【自然資産】  
湯川上流の温泉噴孔から球状石灰華を産出。国指定特別天然記念物
- 77 中房温泉の膠状珪酸と珪華を産する自然湧出泉源地帯（穂高町）【自然資産】  
高温自然湧出泉から希少な温泉沈殿物を産出。国指定天然記念物
- 78 湯俣温泉の噴湯丘と球状石灰華（大町市）【自然資産】  
希少な形態の石灰華を産出。国指定天然記念物

## 静岡県

- 79 熱海温泉の湯前神社と大湯間欠泉跡（熱海市）【文化資産／温泉神社・歴史的泉源】  
温泉神社の湯前神社とかつて主泉源だった社前の大湯間欠泉跡
- 80 熱海温泉の「起雲閣」【文化資産／洋風建築】  
昭和7年（1932）建築の洋館で旧温泉旅館。熱海市文化財
- 81 伊東温泉松川河畔の伝統的旅館群（伊東市）【文化資産】  
軒を並べる瓦屋根の木造三階建てや四層の和風旅館景観
- 82 修善寺温泉の「独鈷の湯」と伝統的旅館街（修善寺町）【文化資産】  
伝統的温泉街景観を保つ桂川河畔の「独鈷の湯」と周辺旅館群

## 兵庫県

- 83 有馬温泉の歴史的源泉【自然資産／貴重な源泉】  
金泉・銀泉で知られる含鉄・ナトリウムー塩化物強塩泉や自然湧出二酸化炭素泉
- 84 有馬温泉の歴史的町並み【文化資産】  
温泉寺・温泉神社・太閤秀吉湯山御殿遺跡を含む温泉街の歴史的町並み
- 85 有馬温泉の入初式【文化資産／温泉祭事】  
開湯伝説の行基と12坊を開いた仁西上人をしのび、江戸時代から続く温泉祭事
- 86 城崎温泉の伝統的温泉街（城崎町）【文化資産／計画的温泉地】  
大正14年（1925）の火災後、大瀬川沿いに温泉地づくりがなされた温泉町並みの景観美

- 87 湯村温泉の「荒湯」(温泉町)【自然資産】  
98℃で自然湧出する歴史的泉源。生活利用される

## 和歌山県

- 88 川湯温泉の大塔川中の自然湧出泉源(本宮町)【自然資産】  
大塔川川底から自然湧出する70℃以上の単純温泉で川湯
- 89 湯の峰温泉の「つぼ湯」と「湯筒」(本宮町)【文化資産/温泉信仰・じか湧き浴槽・歴史的温泉利用形態】  
熊野詣での湯垢離場。自然湧出泉源浴槽「つぼ湯」は中世の説経『小栗判官』の舞台
- 90 龍神温泉の伝統的旅館建築「上御殿」(竜神村)【文化資産】  
日高川溪谷の紀州藩の湯治場景観を保持

## 島根県

- 91 (出雲)湯村温泉の歴史的川床自然湧出泉源(木次町)【自然資産】  
『出雲国風土記』に記された川床の自然湧出泉源湯壺
- 92 玉造温泉の玉作湯神社と歴史的町並み(玉湯町)【文化資産・温泉神社・伝統的温泉街】  
『出雲風土記』記された古湯の歴史を伝える玉湯川沿いの和風旅館街
- 93 温泉津温泉の「元湯」共同浴場と歴史的町並み(温泉津町)【文化資産/伝統的共同湯・温泉街】  
大森(石見)銀山の積出港として、中世以来の歴史と情緒を保持。重要伝統的建造物群保存地区に指定
- 94 有福温泉の「御前湯」共同浴場と伝統的温泉街(江津市)【文化資産】  
共同湯3軒のうち「御前湯」を核に、赤い石州瓦屋根旅館が階段状に並ぶ

## 岡山県

- 95 奥津温泉の老舗旅館群と「足踏み洗濯」(奥津町)【文化資産/泉源浴槽・温泉習俗】  
吉井川河畔に泉源浴槽付き旅館「東和楼」「奥津荘」と「足踏み洗濯」習俗を保つ

## 山口県

- 96 俵山温泉の共同湯(外湯)文化(長門市)【文化資産/湯治文化】  
伝統的な共同湯(外湯)文化を保つ旅館街

## 愛媛県

- 97 道後温泉の「道後温泉本館」共同浴場(松山市)【文化資産/伝統的共同湯】  
明治27年(1894)建築の伝統的共同湯

## 佐賀県

- 98 武雄温泉の「蓬莱門」と「殿様湯」を持つ共同浴場(武雄町)【文化資産/伝統的共同湯・浴槽】  
鍋島藩主愛用の「殿様湯」浴槽が残る楼門付共同浴場

## 長崎県

- 99 雲仙温泉の「地獄」自然湧出泉源地帯(小浜町)【自然資産】  
キリシタン弾圧に利用され、伝統的共同湯がある雲仙地獄

## 熊本県

- 100 地獄温泉の天然泥湯(長陽村)【文化資産/伝統的入浴法】  
湧き出る温泉泥利用の伝統的泥湯を保つ「すずめの湯」

101 岳の湯・はげの湯温泉の噴気地帯（小国町）【自然資産】

湧蓋山麓集落の軒先や田圃から噴気が上る泉源地帯

**大分県**

102 鉄輪温泉の「地獄」群（別府市）【自然資産】

別府温泉郷の歴史的泉源地帯で、世界的に貴重な地獄が数多く存在

103 鉄輪温泉の湯煙景観と伝統的温泉街（別府市）【文化資産】

湯煙が上り、「蒸し湯」や「地獄蒸しかまど」を持ち、「入湯貸間」が並ぶ温泉街

104 明礬温泉の天然泥湯（別府市）【文化資産】

温泉泥泉源を利用した泥湯入浴法

105 明礬温泉の明礬採取小屋（別府市）【文化資産／温泉利用形態】

江戸期以来の伝統的な明礬採取法

106 鉄輪温泉の青色発色源泉（別府市）【自然資産／貴重な源泉】

「神和苑」の青色を呈する自然湧出泉

107 別府温泉の「竹瓦温泉」共同浴場（別府市）【文化資産】

明治以来の伝統的共同湯で、建物は昭和13年（1938）に改築。砂湯もできる

108 塚原温泉の泉源地帯（湯布院町）【自然資産】

pH1.4の強酸性含鉄硫酸塩泉が伽藍岳山腹から噴出

109 由布院温泉の金鱗湖と「下ん湯」共同浴場（湯布院町）【自然資産】【文化資産】

湧泉の地だった由布院温泉の原点を保つ自然湧出泉の湯池と伝統的共同湯

110 湯平温泉の伝統的石畳街（湯布院町）【文化資産／計画的温泉地】

江戸時代から整備が始まった石畳の坂道が続く湯治場景観

111 湯平温泉の伝統的飲泉文化【文化資産／湯治文化】

四万温泉と並ぶ東西「胃腸の湯」の伝統的飲泉文化

112 長湯温泉の自然湧出ラムネ泉（直入町）【自然資産】

約920mgほどの炭酸ガスを含む31℃の自然湧出炭酸水素塩泉

113 長湯温泉の「温泉マリモ」（球状石灰華）【自然資産】

温泉成分が凝固したユニークな球状石灰華

114 長湯温泉の「御前湯」共同浴場と伝統的飲泉文化【文化資産】

昭和初期からの飲泉文化を核に、今日的に再現された伝統的共同浴場

115 塚野温泉の伝統的飲泉文化と飲泉所（大分市）【文化資産】

炭酸ガスを含む炭酸水素塩泉を飲用する飲泉所「霊泉堂」

116 七里田温泉の「下湯」共同浴場の自然湧出ラムネ泉（久住町）【自然資産】

36℃の炭酸水素塩泉は含有量943mgの炭酸ガスで湯がはじけ、肌に気泡が付く

117 寒ノ地獄温泉の泉源冷泉浴（九重町）【文化資産／伝統的入浴法】

久住山中の泉源浴槽で夏場のみ行われる13度の硫黄泉冷泉浴

118 筋湯温泉の共同浴場の打たせ湯（九重町）【文化資産／伝統的入浴法】

何条もの細い湯滝を持つ伝統的共同湯

**鹿児島県**

119 新湯温泉の伝統的湯治場（牧園町）【文化資産】

白濁の硫化水素泉を利用した皮膚病に良い湯治場の景観

- 120 栗野岳温泉の八幡大地獄と自然湧出泉源（栗野町）【自然資産】【文化資産】  
八幡大地獄を泉源地帯に4種類の泉質と蒸し風呂、泥湯など伝統的入浴法
- 121 指宿温泉の摺ヶ浜海岸の高温自然湧出泉源地帯と天然砂蒸し（指宿市）【自然資産】【文化資産】  
砂浜や波打ち際からの高温自然湧出泉で、砂湯に利用
- 122 山川伏目砂蒸し温泉の高温自然湧出泉源地帯と天然砂蒸し（山川町）【自然資産】【文化資産】  
竹山崖下海岸の高温地熱の砂浜で、砂湯に利用
- 123 鰻温泉の蒸気噴気蒸しかまど「スメ」（山川町）【文化資産／温泉利用形態】  
90℃前後の高温の蒸気・噴気口にすえた「スメ」で煮炊きに利用
- 124 薩摩硫黄島海岸の自然湧出泉源地帯（三島村）【自然資産】  
海中温泉を含み、海を変色させる自然湧出泉源

#### その他

- 125 江戸・明治時代に作成された温泉番付【文化資産】  
江戸期以降「諸国温泉功能鑑」として各地で作成

# 日本温泉地域学会入会申込書

平成 年 月 日

会員種別	一般	学生	賛助 ( ) 口
ふりがな 氏 名			
	印 (満 歳) 男・女		
団体名・商号 代表者名			
	印		
勤務・所属先名称			
所在地	〒		
	電話	( )	
	FAX	( )	
	E-mail :		
現住所	〒		
	電話	( )	
	FAX	( )	
	E-mail :		
研究・関心分野			
メールでの対応	可能	不可能	
研究会誌送付先	勤務・所属先	現住所	

\*学生会員は学生証の写しを同封してください。

事務局受付日： 年 月 日

申込書送付先

〒 263-8522 千葉市稲毛区弥生町 1-33

千葉大学教育学部地理学研究室内 (山村研究室)

日本温泉地域学会事務局

電話・FAX : 043(290)2543

E-mail : yamamura@faculty.chiba-u.jp

郵便振替 : 口座番号 00190-6-462149 加入者名 : 日本温泉地域学会

## 日本温泉地域学会役員

会 長	山村 順次 (千葉大学)		
副 会 長	石川 理夫 (温泉評論家)		
理 事 長	浜田 眞之 (地熱)		
常務理事	長島 秀行 (東京理科大学)		
	〃 寺田 徹 (日本温泉協会)		
理 事	池永 正人 (長崎国際大学)	浦 達雄 (大阪明浄大学)	
	〃 市原 実 (長崎総合科学大学)	菊地 莊悦 (東鳴子温泉まるみや)	
	〃 河野 正人 (野沢温泉住吉屋)	首藤 勝次 (長湯温泉大丸旅館)	
	〃 辻内和七郎 (箱根温泉供給)	中澤 敬 (草津町長)	
	〃 布山 裕一 (日本温泉協会)	古田 靖志 (岐阜県博物館)	
	〃 松崎 郁洋 (黒川温泉ふもと旅館)	森 繁哉 (東北芸術工科大学)	
	〃 八岩まどか (温泉評論家)	由佐 悠紀 (京都大学)	
監 事	音成 克巳 (阿蘇町温泉医)	中山 昭則 (別府大学)	
幹 事	君島 俊克 (千葉大学大学院生)	小林 裕和 (ジェイ・ティー・ビー)	
	〃 小林 浩 (千葉県庁)	下島 康史 (長崎国際大学)	

任期：2003（平成15）年5月11日～2006（平成18）年春季総会

### 温泉地域研究 第3号

2004年9月30日発行

編集・発行者 日本温泉地域学会

〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33  
千葉大学教育学部地理学研究室内

電話 043 (290) 2543

FAX 043 (290) 2543

振替 00190-6-462149

印刷所 株式会社 こくぼ

〒260-0843

千葉市中央区末広3-3-10



# Journal of Studies on Spa Region

No.3  
2004.9

## contents

### Articles

- Regional Development and Activation in Yumura Spa, Hyogo  
Prefecture ..... Junji YAMAMURA ( 1 )
- Regional Changes and Activation of Higashinaruko Health Spa  
in Miyagi Prefecture ..... Takaaki KOBORI Junji YAMAMURA (11)

### Research Notes

- Present State of Urban Spa Facilities and Problems  
of Spa Resort ..... Isamu MAEDA Sook-young KANG (19)
- Excursion in Spa and its Significance ..... Yasushi FURUTA (25)

### Lecture

- Ideal Method on Formation of Yufuin Spa Region ..... Kentaro NAKAYA (31)

### Symposium

- Message on Formation of Spa Region from Yufuin Spa ..... (37)

### Book Reviews

- Susumu NISHIMURA ed. 『The Most Advanced Science of Hot Spring』  
..... Hideyuki NAGASHIMA (52)
- Junji YAMAMURA 『Spas in the World(New Edition)』 ..... Tatsuo URA (53)

### News on Spa

- Gero Spa Museum ..... Yasushi FURUTA (54)

### Notes and News

- Natural and Cultural Assets on Hot Spring and Spa ..... (59)